

翻 訳

高適詩訳注稿(一)

川 口 喜 治

凡例

- 一、本稿(以下、本訳注)は、高適詩の訳注稿である。
- 二、本訳注は、原文、書き下し文、詩型、押韻、現代語訳、詩題解説、語注で構成する。
- 三、本訳注の底本は、孫欽善『高適集校注(修訂本)』(上海古籍出版社、二〇一四年。以下、孫注)とする。
- 四、高適詩の詩題の前に、孫注の作品の配列順序を算用数字で示した。詩題のあとの〔〕内には、孫注の頁数を漢数字で示し、次に拙稿「高適詩集詩注作品所在対照表」(『中唐文学会報』二〇、二〇一三年)の作品番号を算用数字で示した。そのあとの【】内には、三の明覆宋刻本『高常侍集十卷』における作品所在箇所を巻数・丁数・表裏によって示した。
- 五、校勘は、原則として、孫注に依拠した。また、校勘は、凡例六の場合を除いて逐一示さない。
- 六、校勘によって底本の文字を改めた場合等は、語注にその旨を記した。なお、孫注が対校本としている高適集、敦煌写本は、下記の諸本である。訳注者が確認できた諸本の書誌情報を丸括弧内に示す。また、丸括弧のあとが、孫注の凡例に示された対校本の略称(カギ括弧内)である。本訳注も同じ略称を用いる。

清影宋抄本『高常侍集十卷』(中國國家圖書館藏清初影宋抄本影印。國家圖書館出版社、二〇〇九年)：「清抄本」

明銅活字本『高常侍集八卷』：(中國國家圖書館・明銅活字印本07821・2022)：「明銅活字本」

*この「明銅活字本」は、三の孫注附載の「高適集版本考」では、「四部叢刊影印底本」とする。

明・張遜業輯校、黃埠刻十二家唐詩本『高常侍集二卷』(中國國家圖書館・明嘉靖黃埠刻本10380・2665)：「張黃本」

明・許自昌校刻前唐十二家詩本『高常侍集二卷』(國立公文書館(内閣文庫)・明萬曆三十二年序刊本)：「許本」

清全唐詩本『高適詩四卷』(中華書局排印本、一九六〇年)：「全唐詩」

敦煌寫本殘卷「伯三三八六二」高適詩集(東洋文庫)：「敦煌集本」

敦煌寫本殘卷「伯二五五二」詩選(東洋文庫)：「敦煌選本」

羅振玉輯印鳴沙室佚書敦煌寫本殘卷『詩選』(東洋文庫)：「敦煌選本乙」

*「敦煌選本」と「敦煌選本乙」とは、中國國家圖書館デジタルアーカイブではP2567『唐人選唐詩』としてまとめられている。

校勘に、右の諸本以外のものを用いた場合は、初出の箇所、その書誌情報を示した。

底本に無い文字を加えた場合(例えは、一つの詩題下に複数首がある場合に其一、其二を加えるなど)は、丸括弧内に補った。

七、作品の配列は、孫注に従った。なお孫注は、その底本の作品配列の順序を改め、制作時期順に配列しなおしている。

八、詩型の分類は、孫注の底本である明覆宋刻本『高常侍集十卷』に従った。雑言古詩の分類は立てず、七言古詩にまとめた。

九、押韻は、『広韻』の韻目を示し、あわせて平水韻の韻目を示した。

十、詩題解説には、作品の内容の簡単な要約と制作時期・背景等を記した。制作

時期背景は、孫注と附載の『高適年譜』(以下、孫譜)のほか、周勛初『高適年譜』(上海古籍出版社、一九八〇年。以下、周譜)、劉開揚『高適詩集編年箋註』(中華書局、一九八一年。以下、劉注)と附載の『高適年譜』(以下、劉譜)を参考にした。

各年譜における高適の出生年を示しておく。ちなみに没年は、永泰元年(七六五)である。

孫譜：大足元年・長安元年(七〇一)

周譜：聖曆三年・久視元年(七〇〇)

劉譜：長安四年(七〇四)

なお、高適は天宝八載(七四九)に、初めての任官で、汴州(陳留郡)封丘県(河南省新郷市封丘県)の尉となった。本訳注ではそれまでの高適の人生を、布衣の時代のように呼ぶ。

また、この布衣の時代、高適は宋州(睢陽郡)宋城県(河南省商丘市睢陽区)に比較的長く寓居していた。これは右の三譜において繫年に異なりはあるが、共通している。本訳注では、この時期を宋中寓居の時期のように呼ぶ。

十一、語注には、全注釈である孫注、劉注、阮廷瑜『訂正再版高常侍詩校注』(臺北)國立編譯館中華叢書編審委員會、一九八〇年)を含め、三の「作品所在対照表」に掲げた諸注釈を利用した。このほか「対照表」作成後に訳注者が確認できたものは、孫欽善・陳鐵民『新譯高適岑參詩選』(三民書局、二〇一四年)、李丹『高適詩全集』(崇文書局、二〇二〇年)である。

語注における用例の引用は、通行本によった。なお、李善注『文選』は、胡刻本(中華書局、一九七七年)を用いた。李善以外の五臣の注は、『六臣註文選』(四部叢刊本)を用いた。

また、語注において、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三年)、嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』(中華書局、一九五八年)から引用する場合、それぞれ『漢詩』卷一、『全漢文』卷一のように示した。

語注に引用した詩文の作者について、作者であることが疑われる場合も、引用元の文献通りとした。例えば、『楚辭』屈原「漁父」、前漢・李陵「與蘇武三首」(『文選』卷二九)、前漢・蘇武「詩四首」(『文選』卷二九)、前漢・枚乘「雜詩九首」(『玉臺新詠』卷一)である。

語注における語の意味については、主に『大漢和辭典』、『漢語大詞典』、『角川

新字源改訂新版』(KADOKAWA、二〇一七年)、『漢字源改訂第六版』(学研プラス、二〇一八年)、小川環樹『唐詩概説』『唐詩の助字』(岩波書店、一九五八年)を参考にし、『新字源』、『漢字源』、『唐詩概説』『唐詩の助字』については、そのまま借用した場合もある。

なお、語注において「こは……と解する」というふうな表現をしている場合の「こ」とは、原則として、訳注対象としている高適詩、その詩句・語句等を指す。

十二、詩題解説、語注に引いた文献で、その書誌情報を示す必要があると判断したものは、初出の箇所を示した。

十三、漢字については、原則として以下の通りとした。高適詩の原文および押韻、詩題解説・語注に引用する文献や用例の作者名・作品名・書名・本文などは、Unicodeが対応する範囲で旧字体を用いた。異体字については、『角川新字源改訂新版』が本字、古字、別体字とするものは、旧字体使用の場合に準じて、高適詩の原文および押韻、詩題解説・語注に引用する文献や用例などに、Unicodeが対応する範囲で用いた。これら以外は、通行の字体を用いた。なお、IFSは用いない。

*本凡例は、東山之會「賈島詩譯注」(『中唐文学会報』に二一号(二〇一四年)より連載)、下定雅弘・松原朗「杜甫全詩訳注」(一)〜(四)『講談社、二〇一六年』を主に参考にしている。

001 行路難二首(其一)(一・120)【5-1b】 行路難二首(其の一)

- | | | | |
|---|---------|---------|--------------|
| 1 | 長安少年不少錢 | 長安少年 | 錢少なからず |
| 2 | 能騎駿馬鳴金鞭 | 能く駿馬に騎し | 金鞭を鳴らす |
| 3 | 五侯相逢大道邊 | 五侯 | 相い逢う |
| 4 | 美人絃管爭留連 | 美人 | 絃管 争いて留連す |
| 5 | 黃金如斗不敢惜 | 黃金 | 斗の如く 敢えて惜しまず |
| 6 | 片言如山莫棄捐 | 片言 | 山の如く 棄捐する莫し |
| 7 | 安知顛顛讀書者 | 安くんぞ知らん | 顛顛して読書する者の |

8 暮宿靈臺私自憐 暮れに靈台に宿して私に自ら憐むを

【詩型】

七言古詩

【押韻】

下平一先(邊・憐)、下平二仙(錢・鞭・連・捐)同用。／平水韻：下平一先。

【現代語訳】

行路難二首 その一

1・2 長安の若者は金銭に不自由することなく、駿馬を乗りこなし、金の鞭を鳴らして疾走する。

3・4 都大路のあたりでは権貴の人々と出会ってすぐに意気投合して交わりを結び、花街では美しい妓女たちが歌舞音曲によってきそいあつて引きとどめようとする。

5・6 ますのような大きな黄金も使い惜しみするようなことはせず、ちよつとした約束の言葉でもいったん口にした以上、山のように大きく見做して反故にはしない。

7・8 そんな若者にどうしてわかるうか。学問をしても栄達できずにやつれ果てた男が、日暮れに靈台に寄宿し、人知れず我が身を哀れんでいることを。

【詩題解説】

長安の豪勢な若者の生態と、それとは対照的な不遇の士を描く。制作時期・場所は、本詩の1「長安少年」と005「別章參軍」(四・122) 1・2「二十解書劍、西遊長安城」から、高適二十歳くらいの時、長安での作と思しいが、確定はできない。ただ、若い頃の作品であると考えられる。

「行路難」は、樂府題。主に人生行路の難しき、離別のつらさを歌う。『樂府詩集』卷七〇・雜曲歌辭「行路難」の解題に「樂府解題曰、行路難、備言世路艱難及離別悲傷之意。多以君不見爲首」。なお、『清抄本』(卷一)、『文苑英華』(卷二〇〇) (北京圖書館所藏宋刊殘本・明刊本影印。中華書局、一九六六年)、『樂府詩集』(卷七一) (中華書局排印本、一九七九年)は、第一首と第二首の順序が逆であり、第一首は「君不見」で始まる。

【語注】

1 ●長安少年：長安の若者。富貴の子弟であろう。本詩は、1から3まで、陳・

沈炯「長安少年行」(『初學記』卷一九・人部・美丈夫)に着想を得ていると考えられる。「長安好少年、驄馬鐵連錢。陳王裝玉勒、晉后鑄金鞭。步搖如飛燕、劍鏢似舒蓮。去來新市北、遨遊大道邊。道邊三老翁、鬚鬢似衰蓬。自言生漢代、少小見豪雄。五侯俱日拜、七貴各論功」。また、『漢書』卷七六・趙廣漢傳に「長安少年數人會窮里空舍謀共劫人、坐語未訖、廣漢使吏捕治具服」。古辭「長安有狹斜行」(『樂府詩集』卷三五・相和歌辭)に「長安有狹斜、狹斜不容車。適逢兩少年、挾轂問君家」。陳・江總「梅花落三首」其三(『樂府詩集』卷二四・橫吹曲辭)に「長安少年多輕薄、兩兩常唱梅花落。王維「隴頭吟」(『全唐詩』卷一二五)に「長安少年遊俠客、夜上戍樓看太白」。

●少年：若者。『韓非子』內儲說上七術に「故子產死、游吉不忍行嚴刑。鄭少年相率爲盜、處於蕞澤、將遂以爲鄭禍」。『古樂府詩六首』其一「日出東南隅行」(『玉臺新詠』卷一)に「少年見羅敷、脫巾著帽頭」。

●少錢：お金が足りない。李白「將進酒」(『全唐詩』卷一六二)に「主人何爲言少錢、徑須沽取對君酌」。

2 ●能騎：乗りこなす。『史記』卷二一〇・匈奴傳に「兒能騎羊、引弓射鳥鼠」。『襄陽耆舊記』(『藝文類聚』卷一九・人部・謳謠)に「山季倫(山簡)每臨習池、未曾不大醉而還。恆曰、我高陽池中也。襄陽城中小兒歌之曰、山公何所去、往至高陽池。……時時能騎馬、倒着白接離」。ここは、次の「駿馬」を乗りこなすのが難しいので、「能騎」とある。『世說新語』賞譽に「(王)濟從騎有一馬絕難乘、少能騎者」。『瑯琊王歌辭八曲』其八(『樂府詩集』卷二五・橫吹曲辭・梁鼓角橫吹曲)に「憎馬高纏繫、遙知身是龍。誰能騎此馬、唯有廣平公」。

●駿馬：足の速い優れた馬。『韓非子』十過に「君(晋獻公)曰、……屈產之乘、寡人之駿馬也」。西晉・陸機「上留田行」(『藝文類聚』卷四一・樂部・論樂)に「嗟行人之謫謫、駿馬陟原風馳、輕舟汎川雷邁」。梁・吳均「詩」(『藝文類聚』卷三三・人部・遊俠)「梁詩」卷一〇では「結客少年場」に「結客少年歸、翩翩駿馬肥。報恩殺人竟、賢君賜錦衣」。また、1「長安少年」注の沈炯詩を参照。

●金鞭：金の鞭。陳・沈炯「建除詩」(『藝文類聚』卷五六・雜文部・詩)に「滿衢飛玉軼、夾道躍金鞭」。1「長安少年」注の沈炯詩を参照。楊炯「紫駟馬」(『全唐詩』卷五〇)に「俠客重周遊、金鞭控紫駟」。

●鳴鞭：馬鞭を鳴らす。威勢のよ良さ。劉宋・鮑照「白馬篇」(『樂府詩集』卷六三・雜曲歌辭)に「白馬駢角弓、鳴鞭乘北風」。梁・元帝蕭繹「將軍名詩」(『藝

文類聚』卷六三・雜曲歌辭)に「白馬駢角弓、鳴鞭乘北風」。梁・元帝蕭繹「將軍名詩」(『藝文類聚』卷六三・雜曲歌辭)に「白馬駢角弓、鳴鞭乘北風」。

文類聚』卷五六・雜文部・詩に「虎旅皆成陣、龍騎盡能躡。鳴鞭俱破虜、決勝往長榆」。

3：相手が権貴の人々であつてもおしげずに堂々としている様子を描く。

3 ●五侯：高位高官。権貴の人々。漢の河平二年(前二七)、成帝は、皇太后王氏(王莽のおば)の兄弟五人を同じ日に侯に封じ、世間はこれを「五侯」と呼んだという故事をふまえる。王氏一族は権勢を誇った。『漢書』卷九八・元后傳に「明年、河平二年、上悉封舅譚爲平阿侯、商成都侯、立紅陽侯、根曲陽侯、逢時高平侯。五人同日封、故世謂之五侯。……王氏子弟皆卿大夫侍中諸曹、分據勢官滿朝廷」。西晉・張載「登成都白菟樓詩」(『晉詩』卷七)に「程卓累千金、驕侈擬五侯」。劉宋・袁淑「效曹子建樂府白馬篇」(『文選』卷三二)に「五侯競書幣、羣公亟爲言」。また、1「長安少年」注の沈炯詩を参照。

●相逢：出会う。前漢・揚雄「蜀都賦」(『全漢文』卷五一)に「雕鏤鉛器、百伎千工。東西鱗集、南北竝湊。馳逐相逢、周流往來」。ここは、出會つて意気投合し交わりを結ぶことだと解する。「古樂府詩六首」其二「相逢狹路間」(『玉臺新詠』卷一)に「相逢狹路間、道隘不容車。如何兩少年、挾轂問君家。君家誠易知、易知誠難忘。黃金爲君門、白玉爲君堂。堂上置樽酒、使作邯鄲倡。中庭生桂樹、華鏡何煌煌。兄弟兩三人、中子爲侍郎」。劉宋・謝惠連「相逢行」(『樂府詩集』卷三四・相和歌辭)に「行行即長道、道長息班草。邂逅賞心人、與我傾懷抱。……相逢既若舊、憂來傷人、片言代紆綯」。

●大道：大きな道。『列子』說符に「心都子曰、大道以多歧亡羊、學者以多方喪生」。古詩爲焦仲卿妻作(『玉臺新詠』卷一)に「隱隱何甸甸、俱會大道口」。ここは、都大路。梁・元帝蕭繹「洛陽道詩」(『藝文類聚』卷四二・樂部・樂府)に「洛陽開大道、城北達城西」。1「長安少年」注の沈炯詩を参照。蔡孚「奉和聖製龍池篇」(『全唐詩』卷七五)に「帝宅王家大道邊、神馬潛龍湧聖泉」。蘇渙「變律」(本十九首。今存三首)其二(『全唐詩』卷二五五)に「長安大道邊、挾彈誰家兒」。

●邊：あたり。

4 ●美人：美女。『莊子』田子方に「仲尼聞之曰、古之真人、知者不得說、美人不得濫、盜人不得劫、伏戲、黃帝不得友」。西晉・傅玄「美女篇」(『樂府詩集』卷六三・雜曲歌辭)に「美人一何麗、顏若芙蓉花」。劉宋・鮑照「堂上歌行」(『樂府詩集』卷六五・雜曲歌辭)に「滿堂皆美人、目成對湘娥」。高適092「燕歌行」(八六・119)に「戰士軍前半死生、美人帳下猶歌舞」。ここは、美しい妓女。孟浩然「美

人分香」(『全唐詩』卷一六〇)「豔色本傾城、分香更有情。髻鬟垂欲解、眉黛拂能輕。舞學平陽態、歌翻子夜聲。春風狹斜道、含笑待逢迎」。李白「秋獵孟諸夜歸置酒單父東樓觀妓」(『全唐詩』卷一七九)に「出舞兩美人、飄飄若雲仙」。

●絃管：弦楽器と管楽器。『淮南子』泰族訓に「今取怨思之聲、施之於絃管、聞其音者、不淫則悲。淫則亂男女之辯、悲則感怨思之氣。豈所謂樂哉」。梁・何遜「銅爵臺妓詩」(『藝文類聚』卷三四・人部・哀傷)に「秋風木葉落、蕭瑟絃管清」。陳・傅縡「雜曲」(『樂府詩集』卷七七・雜曲歌辭)に「樓臺宛轉曲皆通、絃管逶迤徹下風」。

●争：きそいあつて。

●留連：居続ける。『焦氏易林』豫之坤に「蔡侯朝楚、留連江濱」。西晉・張華「輕薄篇」(『樂府詩集』卷六七・雜曲歌辭)に「留連彌信宿、此歡難可過」。ここは、引き留める。高適011「別王微」(一三・016)に「留連愁作歡、或爲梁甫吟」。劉長卿「陪元侍御遊支硎山寺」(『全唐詩』卷一四九)に「留連南臺客、想像西方內」。白居易「草詞畢遇芍藥初開因詠小謝紅藥當階翻詩以爲一句未盡其狀偶成十六韻」(『全唐詩』卷四四二)に「有意留連我、無言怨思誰」。

5：6：若者の遊侠の生態を描く。「黄金」は、交遊や義侠などのために使うのであろう。

5 ●黄金：黄金。『易經』噬嗑に「六五。噬乾肉、得黄金。貞厲无咎」。古辭「雞鳴」(『樂府詩集』卷二八・相和歌辭)に「黄金絡馬頭、頰頰何煌煌」。北周・王褒「高句麗」(『樂府詩集』卷七八・雜曲歌辭)に「不惜黄金散盡、只畏白日蹉跎」。高適049「鉅鹿贈李少府」(四四・025)に「駿馬常借人、黄金每留客」。なお、5：6は、『史記』卷一〇〇・季布傳「楚人諺曰、得黄金百、不如得季布」一語をふまえているとも考えられる。北周・庾信「和張侍中述懷詩」(『北周詩』卷三)に「徒懷琬琰心、空守黄金諾」。陳子昂「座右銘」(『全唐文』卷二二四)に「白珪玷可滅、黄金諾不輕」。

●如斗：ますのように大きい。『說苑』辨物に「楚昭王渡江、有物大如斗、直觸王舟、止於舟中」。『晉書』卷六九・周顛傳に「顛不與言、顧左右曰、今年殺諸賊奴、取金印如斗大繫肘」。李白「草書歌行」(『全唐詩』卷一六七)に「起來向壁不停手、一行數字大如斗」。233高適「同河南李少尹畢員外宅夜飲時洛陽告捷遂作春酒歌」(二七二・147)に「武侯腰間印如斗、郎官無事時飲酒」。岑參「走馬川行奉送出師西征」(『全唐詩』卷一九九)に「輪臺九月風夜吼、一川碎石大如斗、隨風滿地石

亂走」。

●不敢惜：「不敢」は、くするようなことはしない。決してくしない。『後漢書』卷三二・陰興傳に「興叩頭流涕、固讓曰、臣不敢惜身、誠虧損聖德、不可苟冒」。白居易「酬思黯相公見過弊居戲贈」(『全唐詩』卷四二二)に「家醜不敢惜、待君來即開」。

6 ●片言：ちよつとしたことば。一言。『論語』顔淵に「子曰、片言可以折獄者、其由也與。子路無宿諾」。西晉・盧諶「贈劉琨」(『文選』卷二五)に「由余片言、秦人是憚」。李頎「行路難」(『全唐詩』卷一三三)に「賓客填街復滿座、片言出口生輝光」。李白「駕去溫泉後贈楊山人」(『全唐詩』卷一六八)に「當時結交何紛紛、片言道合惟有君」。こは、ちよつとした約束の言葉と解する。

●如山：山のように大きい。『詩經』小雅「天保」に「天保定爾、以莫不興。如山如阜、如岡如陵」。西晉・裴秀「大蜡詩」(『藝文類聚』卷五・歲時・臘)に「有肴如林、有貨如山」。劉宋・鮑照「白紵歌六首」其四(『樂府詩集』卷五五・舞曲歌辭)に「思君厚德委如山、潔誠洗志期暮年、烏白馬角寧足言」。

●棄捐：すてる。見すてる。『楚辭』前漢・東方朔「七諫」「怨世」に「棄捐葑芷與杜衡兮、余奈世之不知芳何」。『古詩十九首』其一(『文選』卷二九)に「弃捐勿復道、努力加餐飯」。魏・甄皇后「塘上行」(『玉臺新詠』卷二)に「莫以豪賢故、棄捐素所愛。莫以魚肉賤、棄捐葱與薤。莫以麻泉賤、棄捐菅與蒯」。

7 ●顛顛：やせおとろえる。やつれる。「憔悴」に同じ。『國語』吳語に「申胥諫曰、……使吾甲兵鈍弊、民人離落、而日以憔悴、然後安受吾儘、韋昭注「憔悴、瘦病也」。『楚辭』屈原「漁父」に「屈原既放、游於江潭。行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁」。『古歌』(『漢詩』卷一〇)に「男兒在他鄉、焉得不憔悴」。魏・阮籍「詠懷詩十七首」其一二(『文選』卷二三)に「豈惜終憔悴、詠言著斯章」。

●讀書：書物を読む。学問をする。『論語』先進に「子曰、有民人焉、有社稷焉。何必讀書、然後爲學」。『史記』卷八六・刺客列傳「荆軻傳」に「荆卿好讀書擊劍、以術說衛元君、衛元君不用」。『說苑』雜言に「孔子困於陳蔡之間、居環堵之內、席三經之席、七日不食、藜羹不糝。弟子皆有饑色。讀詩書治禮不休」。梁・江淹「效阮公詩十五首」其二(『梁詩』卷四)に「十年學讀書、顏華尙美好。不逐世間人、鬪雞東郊道。富貴如浮雲、金玉不爲寶。一旦鷓鴣鳴、嚴霜被勁草。志氣多感失、淚下沾懷抱」。梁・何遜「苦熱行」(『樂府詩集』卷六五・雜曲歌辭)に「習靜閑衣巾、讀書煩几案」。また、『漢書』卷六五・東方朔傳「上(武帝)嘗使諸數

家射覆、置守宮孟下、射之、皆不能中。……乃覆樹上寄生、令朔射之。朔曰、是婁數也」の顏師古注に「今讀書者不曉其意、謂射覆之物覆在盆下、輒改前覆守宮孟下爲盆字、失之遠矣」。段成式「觀山燈獻徐尚書三首」其三(『全唐詩』卷五八四)に「窮愁讀書者、應得假餘光」。邵謁「下第有感」(『全唐詩』卷六〇五)に「嘗聞讀書者、所貴免征伐」。

8 ●暮宿：日暮れに宿る。『呂氏春秋』離俗覽・舉難に「甯戚欲干齊桓公、窮困無以自進、於是爲商旅將任車以至齊、暮宿於郭門之外」。後漢・蔡邕「初平詩」(『漢詩』卷七)に「暮宿河南悵望、天陰雨雪滂滂。崔峒「贈寶十九」(『全唐詩』卷二九四)に「靈臺暮宿意多違、木落花開羨客歸」。

●靈臺：ここに不遇の表現に關係して「靈臺」とあるのは、『後漢書』卷四一・第五頡傳「(順)帝即位、(第五頡)擢爲將作大匠、卒官」の李賢注に「三輔決錄注曰、頡、字子陵、……洛陽無主人、鄉里無田宅、客止靈臺中、或十日不炊」とあるのによる。『漢語大詞典』は、「東漢第五頡客居之所」という語釈を示し、右の『後漢書』を用例として引いたあと、後因用爲居處僻陋之典とし、また北周・庾信「謝明皇帝賜絲布等啓」(『全後周文』卷一〇)「某比年以來、殊有闕乏。白社之内、拂草看冰。靈臺之中、吹塵視飯」とこの高適詩を用例とする。梁・何真南「答何秀才詩」(『梁詩』卷九)に「終朝長守饑、疊夜抱餘寒。……靈臺聊寄止、戚里豈餘歡」。梁・劉峻「劉孝標」(『江州還入石頭詩』(『藝文類聚』卷二八・八部・遊覽)に「我思江海遊、曾無朝市玩。忽寄靈臺宿、空軫及關歎」。王績「性不好治產與後言懷」(『陳尚君』『全唐詩續拾』卷一(『陳尚君』『全唐詩補編』(中華書局一九九二年)所収)に「河曲編蕭坐、靈臺結絮眠」。右の「暮宿」注の崔峒詩を参照。なお、この「靈臺」が周の文王が長安付近に建てたという「靈臺」や次の「三輔黃圖」に見える漢の「靈臺」と如何なる關係があるのか、よくわからない。待考。『詩經』大雅「靈臺」に「經始靈臺、經之營之」。小序の鄭箋に「天子有靈臺者、所以觀祲象察氣之妖祥也。文王受命而作邑于豐(陝西省西安市)、立靈臺」。『三輔黃圖』卷五・臺榭に「周文王靈臺、在長安西北四十里。……漢靈臺、在長安西北八里。漢始曰清臺、本爲候者觀陰陽天文之變、更名曰靈臺」。さらに、この「靈臺」が、『漢語大詞典』に「古時帝王觀察天文星象、妖祥災異的建築」と積する「靈臺」とどのような關係にあるのかもわからない。『詞典』用例は、後漢・張衡「東京賦」(『文選』卷三三)「左制辟雍、右立靈臺」薛綜注「司歷紀候節氣者曰靈臺也」など。

●私自：「私」は、内緒で。ひとりでごっそり。『楚辭』宋玉「九辯」の序に「九辯者、楚大夫宋玉之所作也。……宋玉者、屈原弟子也。閔惜其師、忠而放逐、故作九辯以述其志」とあり、歌辞に「坎廞兮貧士失職而志不平、廓落兮羈旅而無友生。惆悵兮而私自憐」王逸注「竊內念己、自憫傷也」、また「私自憐兮何極、心怆怆兮諒直」。劉宋・顏延之「從軍行」〔樂府詩集〕卷三二・相和歌辭に「逖矣遠征人、惜哉私自憐」。なお、「自」は接尾辞とも考えられる。志村良治『中国中世語法史研究』(八九頁。三冬社、一九八四年)参照。志村氏の举例は、梁・簡文帝蕭綱「詠人棄妾」〔玉臺新詠〕卷七「豈言心愛斷、銜啼私自憐」。

002 行路難二首(其二)〔二・121〕〔5-1-2a〕 行路難二首(其の二)

- 1 君不見富家翁 君見ずや 富家の翁を
2 舊時貧賤誰比數 旧時 貧賤 誰か比数せん
3 一朝金多結豪貴 一朝 金多く 豪貴と結び
4 百事勝人健如虎 百事 人に勝ち 健なること虎の如し
5 子孫成行滿眼前 子孫 行を成し 眼前に満ち
6 妻能管絃妾歌舞 妻は管絃を能くし 妾は歌舞す
7 自矜一身忽如此 自ら矜る 一身 忽ち此くの如しと
8 却笑傍人獨愁苦 却って笑う 傍人の独り愁苦するを
9 東鄰少年安所如 東隣の少年 安くにか如く所ぞ
10 席門窮巷出無車 席門 窮巷 出ずるに車無し
11 有才不肯學干謁 才有るも肯えて干謁を学ばずば
12 何用年年空讀書 何ぞ用いん 年年 空しく読書するを

【詩型】

七言古詩

【押韻】

上聲九麌(數・舞)、上聲十姥(虎・苦)同用。／平水韻：上聲七麌。
上平九魚(如・車・書)。／平水韻：上平六魚。
*『廣韻』上平聲・九魚・車・車輅。又昌遮切。

【現代語訳】

行路難二首 その二

- 1・2 ご覧なさい、金持ちの老人を。この老人はかつては貧しく身分も低く、誰からも相手にされなかった。
3・4 ある日にわか金持ちとなって権貴の人々と親交を結び、万事において他人に打ち勝ち、その猛々しさはまるで虎のよう。
5・6 目の前にはたくさんの子や孫が行列をなし、妻は管や絃などの楽器を見事に演奏し、妾はそれに合わせて素晴らしい歌や舞を披露する。
7・8 自分ひとりの力でたちまちこのようになったのだと自慢し、一方で他人がおもいなやんで苦しむのを嘲笑する。
9・10 東隣の若者はどこに行こうとするのか。路地裏に住み、むしろを門にかけて戸の代わりにする貧乏暮らしで、出かけるのに車もないのに。
11・12 才能があっても有力者に取り入るのを学ぶ気がないのなら、毎年結果も出せずに学問する必要などないのだ。

【詩題解説】

豪奢な暮らしをする金持ちの老人と、それとは対照的に貧窮する不遇の青年を描く。

【語注】

- 1 ●君不見：樂府の常套語。句首に置かれて読み手の注意を喚起する。ご覧なさい。見られよ。劉宋・鮑照「行路難(二首)」其一〔藝文類聚〕卷三〇・人部・怨に「君不見河邊草、冬時枯死春滿道。君不見城上日、今暝沒西山、明朝復更出」。南齊・釋寶月「行路難」〔玉臺新詠〕卷九に「君不見孤雁關外發、酸嘶度揚越」。
●富家翁：金持ちの老人。「論衡」初稟に「富家之翁、貲累千金、生有富骨、治生積貨、至於年老、成富翁矣」。「論衡」解除に「富家翁嫗、可求解除之福、以取踰世之壽」。「三國志」卷九・魏書・曹爽傳「爽於是遣許允、(陳)泰詣宣王、歸罪請死、乃通宣王奏事」の裴松之注に「魏氏春秋曰、爽既罷兵曰、我不失作富家翁」。「史記」卷五五・留侯世家「樊噲諫沛公出舍、沛公不聽」の裴駟集解に「徐廣曰、一本、噲諫曰、沛公欲有天下邪。將欲爲富家翁邪。沛公曰、吾欲有天下。……沛公不聽」。白居易「效陶潛體詩十六首」其一五〔全唐詩〕卷四二八に「東鄰有富翁、藏貨徧五都」。

- 2 ●舊時：昔。かつて。「論衡」正説に「詩經舊時亦數千篇、孔子刪去復重、正而

存三百篇、猶二十九篇也。古辭「木蘭詩二首」其一〔樂府詩集〕卷二五「橫吹曲辭・梁鼓角橫吹曲」に「脱我戰時袍、著我舊時裳」。賀知章「回鄉偶書二首」其二〔全唐詩〕卷一一二に「唯有門前鏡湖水、春風不改舊時波」。

●貧賤：貧しく身分が低い。『禮記』曲禮上に「富貴而知好禮、則不驕不淫。貧賤而知好禮、則志不懾」。『史記』卷六九「蘇秦傳」に「蘇秦出遊數歲、大困而歸。兄弟嫂妹妻妾竊皆笑之。……於是六國從合而并力焉。蘇秦爲從約長、并相六國。……蘇秦之昆弟妻嫂側目不敢仰視、俯伏侍取食。蘇秦笑謂其嫂曰、何前倨而後恭也。嫂委地蒲服、以面掩地而謝曰、見季子位高金多也。蘇秦喟然歎曰、此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎」。『後漢書』卷八〇下「文苑列傳・酈炎傳」に「酈炎有志氣、作詩二篇(其一)曰、……富貴有人籍、貧賤無天錄」。西晉・曹摅「感舊詩」〔『文選』卷二九〕に「富貴他人合、貧賤親戚離。……今我唯困蒙、羣士所背馳」。

●比數：相手にする。前漢・司馬遷「報任少卿書」〔『文選』卷四一〕に「刑餘之人、無所比數」。杜甫「秋雨歎三首」其三〔『全唐詩』卷二一六〕に「長安布衣誰比數、反鎖衡門守環堵」。劉禹錫「酬令狐相公寄賀遷拜之什」〔『全唐詩』卷三六〇〕に「白髮青衫誰比數、相憐只是有梁王」。

3 ●一朝：ある日にわかに。前漢・東方朔「與公孫弘書」〔『初學記』卷一八・人部・交友・總角 撫塵〕に「是以東門先生居蓬戶空穴之中、魏公子一朝以百騎尊寵之。呂望未嘗與文王同席而坐、一朝讓以天下半」。梁甫吟〔『漢詩』卷一〇・樂府古辭〕。『藝文類聚』卷一九、「樂府詩集」卷四一は諸葛亮の作とするに「一朝被讒言、二桃殺三士」。東晉・陶淵明「桃花源詩」〔『晉詩』卷一六〕に「奇蹤隱五百、一朝敵神界」。『隋書』卷七〇・李密傳に「經數月、密鬱鬱不得志、爲五言詩曰、……樊噲市井徒、蕭何刀筆吏。一朝時運合、萬古傳名器。李白「鞠歌行」〔『全唐詩』卷一八五〕に「又不見田千秋才智不出人、一朝富貴如有神」。李白詩に見える田千秋は、前漢の人、車千秋(本姓が田)。車千秋は才能や學問、門閥や功勞がなかったが、衛太子の冤罪を晴らした上書によって武帝に認められ、武帝に拜謁したその場で大鴻臚に任ぜられ、数ヶ月で丞相となり、富民侯に封ぜられた〔『漢書』卷六六・車千秋傳〕。高適009「宋中遇劉書記有別」〔二一・032〕に「幾載困常調、一朝時運催。白身謁明主、待詔登雲臺」、130「錢宋八充彭中丞判官之嶺外」〔一四〇・209〕に「一朝知己達、累日詔書徵」、224「塞下曲」〔二五九・053〕に「萬里不惜死、一朝得成功」。

●金多：お金持ちである。2「貧賤」注の『史記』蘇秦傳を参照。李白「白頭吟二首」其二〔『全唐詩』卷二〇〕に「相如不憶貧賤日、官高金多聘私室」。白居易「書事詠懷」〔『全唐詩』卷四五七〕に「金多輸陸賈、酒足勝陶潛」。

●結：交わりを結ぶ。

●豪貴：権貴の人。『後漢書』卷五一「橋玄傳」に「初自安帝以後、法禁稍弛、京師劫質、不避豪貴、自是遂絕」。李白「魏郡別蘇明府因北遊」〔『全唐詩』卷一七四〕に「青樓夾兩岸、萬室喧歌鍾。天下稱豪貴、遊此每相逢」。任華「寄李白」〔『全唐詩』卷二六一〕に「身騎天馬多意氣、目送飛鴻對豪貴」。

4 ●百事：すべてのこと。『禮記』月令に「四方來集、遠鄉皆至、則財不匱、上無乏用、百事乃遂」。『荀子』彊國に「是以爲善者勸、爲不善者沮、上下一心、三軍同力、是以百事成而功名大也」。西晉・傅玄「洪業篇」〔『樂府詩集』卷五三・舞曲歌辭〕に「百事以時敘、萬機有常度」。張說「五君詠五首」其二「蘇許公瓌」〔『全唐詩』卷八六〕に「百事資朝問、三章廣世程」。

●勝人：他人にうち勝つ。『老子』三三三章に「勝人者有力、自勝者強」。『論語』憲問「克、伐、怨、欲不行焉、可以爲仁矣」の何晏集解に「馬曰、克、好勝人」。李商隱「華清宮」〔『全唐詩』卷五三九〕に「華清恩幸古無倫、猶恐蛾眉不勝人」。また、「韓非子」人主に「虎豹之所以能勝人執百獸者、以其爪牙也。當使虎豹失其爪牙、則人必制之矣」。

●健：強力な。雄々しい。

●如虎：虎のようである。『詩經』邶風「簡兮」に「有力如虎、執轡如組」。『史記』卷七・項羽本紀に「宋義 因下令軍中曰、猛如虎、很如羊、貪如狼、彊不可使者、皆斬之」。魏・曹叡「善哉行」〔『樂府詩集』卷三六・相和歌辭〕に「桓桓猛毅、如龍如虎」。

5・6：一族の繁栄を描く。

5 ●子孫：子や孫。『詩經』周南「螽斯」に「宜爾子孫、蟄蟄兮毛傳」蟄蟄、和集也。『同』小序に「螽斯、后妃子孫衆多也。言若螽斯不妬忌、則子孫衆多也」。魏・王粲「魏都兒舞歌」〔『樂府詩集』卷五三・舞曲歌辭〕に「子孫受百福、常與松喬遊」。西晉・陸機「百年歌(十首)」其六〔『藝文類聚』卷四三・樂部・歌〕に「六十時年亦著艾業亦隆、驂駕四牡入紫宮。軒冕納那翠雲中、子孫昌盛家道豐」。

●成行：列をなす。『淮南子』齊俗訓に「夫鳥飛成行、獸處成羣、有孰教之」。古辭「雞鳴」〔『樂府詩集』卷二八・相和歌辭〕に「鴛鴦七十二、羅列自成行」。杜

甫「贈衛八處士」(『全唐詩』卷二一六)に「昔別君未婚、兒女忽成行」。

●眼前：目の前。劉宋・謝靈運「石壁立招提精舍詩」(『藝文類聚』卷七六・內典・內典)に「浮歡昧眼前、沈照貫終始」。梁・沈約「和左丞庾杲之移病詩」(『初學記』卷一一・職官部・左右丞)に「囂喧滿眼前、簿領紛盈膝」。韋應物「晚歸澧川」(『全唐詩』卷一九一)に「昆弟忻來集、童稚滿眼前」。

6 ●妻能：妻が〜できる。『詩經』召南「草蟲」小序に「大夫妻能以禮自防也」。『詩經』召南「采蘋」小序に「大夫妻能循法度也」。王績「春晚園林」(『全唐詩續拾』卷一)に「老妻能勸酒、少子解彈琴」。

●管絃：管楽器と弦楽器。楽器。「管絃」に同じ。『淮南子』原道訓に「夫建鍾鼓、列管絃、席施茵、傅旒象、耳聽朝歌北鄙靡靡之樂、……此其爲樂也、炎炎赫赫、恍然若有所誘慕」。魏・王粲「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「管絃發徽音、曲度清且悲」。陳・張正見「御幸樂遊苑侍宴詩」(『陳詩』卷三)に「歌舞依鍾石、鸞歌應管絃」。張說「同劉給事城南宴集」(『全唐詩』卷八八)に「管絃高逐吹、歌舞妙含春」。

●妾：正妻以外の女性。側妾。

●歌舞：歌と舞。『春秋左氏傳』莊公二十年・傳に「鄭伯聞之、見號叔曰、寡人聞之、哀樂失時、殃咎必至。今王子類歌舞不倦、樂禍也」。『漢書』卷九七上・外戚傳・孝武李夫人傳に「孝武李夫人、本以倡進。初、夫人兄延年性知音、善歌舞、武帝愛之。本辭「滿歌行」(『樂府詩集』卷四三・相和歌辭)に「飲酒歌舞、樂復何須」。右の「管絃」注の張說詩を参照。

7 ●自矜：自分で自分のすぐれた点をほこる。『老子』二二章に「不自見故明、不自是故彰、不自伐故有功、不自矜故長」。『史記』卷七・項羽本紀に「太史公曰、……(項羽)自矜功伐、奮其私智而不師古、謂霸王之業」。西晉・傅玄「牆上難爲趨」(『樂府詩集』卷四〇・相和歌辭)に「子貢欲自矜、原憲知其非」。隋・王冑「白馬篇」(『樂府詩集』卷六三・雜曲歌辭)に「自矜有餘勇、應募忽爭先」。

●一身：自分ただひとり。我が身ひとつ。『史記』卷八三・魯仲連傳に「魯仲連曰、世以鮑焦爲無從頌而死者、皆非也。衆人不知、則爲一身」。魏・阮籍「詠懷詩十七首」其三(『文選』卷二三)に「身不自保、何況戀妻子」。劉宋・鮑照「數詩」(『文選』卷三〇)に「一身仕關西、家族滿山東」。

●忽如此：突然このようになる。『魏書』卷四三・朱脩之傳に「其母在家、乳汁忽出。母號慟告家人曰、我年老、非復有乳汁之時、今忽如此、兒必歿矣」。

李疑「淮南秋夜呈周侃」(『全唐詩』卷一四五)に「清秋忽如此、離恨應難歌」。李白「新林浦阻風寄友人」(『全唐詩』卷一七二)に「歲物忽如此、我來定幾時」。

8 ●却笑：却は、反対に。郭震「米囊花」(『全唐詩』卷六六)に「卻笑野田禾與黍、不聞弦管過青春」。李白「題宛溪館」(『全唐詩』卷一八四)に「卻笑嚴湍上、于今獨擅名」。岑參「北庭西郊候封大夫受降回軍獻上」(『全唐詩』卷一九八)に「陰山烽火滅、劍水羽書稀。卻笑霍嫫媸、區區徒爾爲」。

●傍人：傍らの人。他人。「旁人」に同じ。『說苑』復恩に「吳起爲魏將、攻中山。軍人有病疽者、吳子自吮其膿。其母泣之。旁人曰、將軍於而子如是、尙何爲泣」。『後漢書』卷八四・列女傳・陳留董祀妻(蔡琰)傳に「蔡琰、後感傷亂離、追懷悲憤、作詩二章。其辭(二首の其一)曰、……奄若壽命盡、旁人相寬大。梁・簡文帝蕭綱「聖製樂府三首」其三・妾薄命篇十韻(『玉臺新詠』卷七)に「妾心徒自苦、傍人會見嗤」。

●愁苦：うれえ苦しむ。おもいなやんで苦しむ。『楚辭』屈原「九章」涉江に「吾不能變心而從俗兮、固將愁苦而終窮」。9「東鄰」注の「焦氏易林」を参照。本辭「滿歌行」(『樂府詩集』卷四三・相和歌辭)に「伶丁荼毒、愁苦難爲」。劉宋・鮑照「代貧賤苦愁行」(『宋詩』卷七)に「長歎至天曉、愁苦窮日夕」。

9 ●東鄰：東となり。『易經』既濟に「九五、東鄰殺牛、不如西鄰之禴祭。實受其福」。『焦氏易林』恆之萃に「東鄰愁苦、君亂天紀」。西晉・摯虞「周文王讚」(『初學記』卷九・帝王部・總敘帝王)に「東鄰之昏、西鄰之曜」。西晉・張翰「詩」(三首)其二(『藝文類聚』卷二六・人事部・言志)「晉詩」卷七では「雜詩三首」其二に「東鄰有一樹、三紀裁可拱。無花復無實、亭亭雲中竦。劉方平「新春」(『全唐詩』卷二五二)に「南陌春風早、東鄰曙色斜」。

●少年：若者。梁・簡文帝蕭綱「雜朝飛詩」(『藝文類聚』卷九〇・鳥部・雉)に「少年從遠役、有恨意多違。儲光羲「洛陽道五首獻呂四郎中」其五(『全唐詩』卷一三九)に「少年不得志、走馬遊新市」。また、高適001「行路難二首」其一(120)の「長安少年」「少年」注を参照。

●安所如：どこに行くのか。「安」は、どこ。「如」は、ゆく。魏・曹植「仙人篇」(『樂府詩集』卷六四・雜曲歌辭)に「四海一何局、九州安所如」。魏・阮籍「詠懷詩八十二首」其三〇(『魏詩』卷一〇)に「驅車出門去、意欲遠征行。征行安所如、背棄夸與名」。また、『楚辭』屈原「遠遊」に「免衆患而不懼兮、世莫知其所如」。魏・應璩「百一詩」(『文選』卷二二)に「宋人遇周客、慙愧靡所如」。あるいは、

「安所」で、どこの意味か。『史記』卷一一九・循吏列傳・公儀休傳に「公儀休云、欲令農士工女安所讎其貨乎」。『漢書』卷九〇・酷吏傳・尹賞傳に「長安中歌之曰、安所求子死、桓東少年場」。

10 ●席門：むしろを門にかけて戸の代わりにしたもの。貧乏暮らしのたとえ。

『史記』卷五六・陳丞相世家に「張負隨平至其家、家乃負郭窮巷、以弊席爲門、然門外多有長者車轍」。『宋書』卷八九・袁粲傳に「袁粲常著妙德先生傳以續嵇康高士傳以自況曰、……所處席門常掩、三逕裁通、雖揚子寂寞、嚴叟沈冥、不是過也」。羅鄴「自遣」(『全唐詩』卷六五四)に「焚魚酌醴醉堯代、吟向席門聊自娛」。韋莊「題七步廊」(『全唐詩』卷六九七)に「席門無計那殘陽、更接簷前七步廊」。

●窮巷：むさ苦しい場末のまち。路地裏。『墨子』號令に「里正與皆守宿里門、吏行其部、至里門、正與開門內吏、與行父老之守及窮巷幽間無人之處」。右の「席門」注の『史記』陳丞相世家を参照。西晉・左思「詠史八首」其八(『文選』卷二二)に「落落窮巷士、抱影守空廬」。東晉・陶淵明「讀山海經詩」(『文選』卷三〇)に「窮巷隔深轍、頗迴故人車」。

●出無車：出かけるのに車がない。『戰國策』齊四に「齊人有馮諼者、貧乏不能自存、使人屬孟嘗君、願寄食門下。……居有頃、復彈其鋏、歌曰、長鋏歸來乎。出無車。左右皆笑之、以告」。錢起「罷官後酬元校書見贈」(『全唐詩』卷二三八)に「忘機貧負米、憶戴出無車」。

●無車：耿漳「贈別安邑韓少府」(『全唐詩』卷二六八)に「古城寒欲雪、遠客暮無車」。

11 ●有才：才能がある。『孟子』盡心下に「(孟子)曰、其爲人也、小有才。未聞君子之大道也」。北齊・裴讓之「公館讌訓南使徐陵詩」(『藝文類聚』卷五三・政治部・奉使)に「有才稱竹箭、無用忝絲綸」。李頎「送劉方平」(『全唐詩』卷一三三)に「有才不偶誰之過、肯即藏鋒事高臥」。于逖「野外行」(『全唐詩』卷二五九)に「有才且未達、況我非賢良」。

●不肯：くする気がない。くするのを承知しない。

●干調：個人的なことをたのむために会いに行く。取り入る。『宋書』卷七四・臧質傳に「(柳)元景檄書宣告曰、……自恣醜薄、罔知涯涘、干調陳聞、曾無紀極、請樂窮大予之英、求器盡官府之選」。『魏書』卷四二・道約傳に「(道約)性多造請、好以榮利干調、乞丐不已、多爲人所笑弄」。王昌齡「鄭縣宿陶太

公館中贈馮六元二」(『全唐詩』卷一四〇)に「雲龍未相感、干調亦已屢」。劉長卿「罷攝官後將還舊居留辭李侍御」(『全唐詩』卷一五〇)に「世難慵干調、時間喜放歸」。

12 ●何用：必要としない。

●年年：毎年。『博物志』卷一〇・雜説に「舊説云、天河與海通。近世有人居海渚者、年年八月有浮槎去來、不失期」。東晉・陶淵明「擬古詩九首」其六(『晉詩』卷一七)に「年年見霜雪、誰謂不知時」。劉希夷「代悲白頭翁」(『全唐詩』卷八二)に「年年歲歲花相似、歲歲年年人不同」。また、崔翹「送友人使夷陵」(『全唐詩』卷一二四)に「獨有幽庭桂、年年空自芳」。顧況「贈僧二首」其一(『全唐詩』卷二六七)に「上人一向心入定、春鳥年年空自啼」。

●空：むだに。ここは、科挙に合格し官職を得ることができないことをいう。●讀書：001「行路難」其一(一・120)の7「讀書」注を参照。また、戴叔倫「行路難」(『全唐詩』卷二七三)に「揚雄閉門空讀書、門前碧草春離離」。

003 題李別駕壁(二・128)【514b】 李別駕の壁に題す

- | | | |
|---|---------|--------------------|
| 1 | 去鄉不遠逢知己 | 郷を去ること遠からずして知己に逢う |
| 2 | 握手相歡得如此 | 手を握りて相い歡ぶこと此くの如きを得 |
| 3 | 禮樂遙傳魯伯禽 | 礼楽 遙かに伝う 魯の伯禽 |
| 4 | 賓客爭過魏公子 | 賓客 争いて過る 魏の公子 |
| 5 | 酒筵莫散明月上 | 酒筵 莫れに散じて 明月上り |
| 6 | 檣馬長鳴春風起 | 檣馬 長鳴して 春風起る |
| 7 | 一生稱意能幾人 | 一生 意に称う 能く幾人ぞ |
| 8 | 今日從君問終始 | 今日 君從り 終始を問わん |

【詩型】

七言古詩

【押韻】

上聲四紙(此)、上聲六止(己・子・起・始)同用。／平水韻・上聲四紙。

【現代語訳】

李別駕の家の壁に詩を書きしるす

1・2 故郷を離れて遠くなくところで私を真に理解してくれる人に出会った。手を取りあい、歓談することがこんなにもできようとは。

3・4 あなたは、遠い昔の魯公伯禽の正統な礼楽を継承しており、賓客が魏の公子・無忌のような人柄を慕い先を争って訪れる。

5・6 酒宴が日暮れにお開きとなつて晴れた空に明るい月がのぼり、馬屋に つながれた馬が勢いよく鳴いて春風が吹いてきた。

7・8 人生が思い通りになる人はいったいどれほどいるのだろうか。あなたは その一人だ。だから今日、あなたに物事の真理(人生の成功の道)について 始めから終わりまでお尋ねしたいと思う。

【詩題解説】

李別駕を知己として得た感激、李への称賛などをうたう。制作時期、場所は未詳。詩の措辞、内容から、高適の布衣時代の作品であると考えられる。「題壁」は、壁に詩文を書きしるす。ここは、李別駕の役宅の壁であろう。「李別駕」は、周譜、孫注が祖詠「酬汴州李別駕贈」(『全唐詩』卷一三二)の李別駕と同じ人物と推定するが、待考。「別駕」は、中・下都督府、州の長官である都督、刺史の次官(礪波護)唐の行政機構と官僚「唐代百官表」。中央公論社、一九九八年)。

【語注】

1 ● 去郷：郷里を去る。『楚辭』宋玉「九辯」に「去郷離家兮徠遠客、超逍遙兮今焉薄」。魏・曹植「白馬篇」(『文選』卷二七)に「少小去郷邑、揚聲沙漠垂」。劉宋・鮑照「結客少年場行」(『文選』卷二八)に「去郷三十載、復得還舊丘」。梁・何遜「慈姥磯詩」(『梁詩』卷九)に「暮煙起遙岸、斜日照安流。一同心賞夕、暫解去郷憂」。

● 逢：出会う。

● 知己：自分のことをよく理解してくれる人。自分の真価を知る人。『説苑』復恩に「鮑叔死、管仲學上衽而哭之、泣下如雨。管仲曰、……生我者父母、知我者鮑子也。士爲知己者死、而況爲之哀乎」。魏・曹植「贈徐幹」(『文選』卷二四)に「彈冠俟知己、知己誰不然」。魏・嵇康「述志詩二首」其二(『魏詩』卷九)に「願與知己遇、舒憤啓幽微」。西晉・陸雲「贈顧彥先五章」其四(『晉詩』卷六)に「邂逅相遇、良願乃從。不逢知己、誰濟子躬」。後漢書「卷四一・第五倫傳」に「倫曰、未遇知己、道不同故耳」。北周・庾信「和張侍中述懷詩」(『北周詩』

卷三)に「疇昔逢知己、生平荷恩渥」。なお、高適が「知己」の語を比較的多く用いることについては、拙稿「杜甫『送高三十五書記』詩における高適批評」(『山口県立大学国際文化学部紀要』一六、二〇一〇年)を参照されたい。

2 ● 握手：手を握りあう。親愛の情を示す行為。『史記』卷二二六・滑稽列傳・淳于髡傳に「髡曰、……若乃州閭之會、男女雜坐、行酒稽留、六博投壺、相引爲曹、握手無罰、目眇不禁。前漢・蘇武「詩四首」其三(『文選』卷二九)に「握手一長歎、淚爲生別滋」。後漢書「卷一五・李通傳」に「光武初以通士君子相慕也、故往答之。及相見、共語移日、握手極歡」。沈佺期「李舍人山園送龐邵」(『全唐詩』卷九六)に「握手涼風至、當歌秋日微」。

● 相歡：「歡」は、にぎやかに話をしてよろこぶ。『幽明錄』(『藝文類聚』卷八六・菓部・梨)に「成彪兄喪、晝哭夜泣。兄提二升酒、一盤梨、就之。引酌相歡」。隋・康孟「詠日應趙王教詩」(『初學記』卷一・天部・日。作者名、『北周詩』卷四)は「孟康」とする)に「相歡承愛景、共惜寸陰移」。宋之問「藍田山莊」(『全唐詩』卷五二)に「獨與秦山老、相歡春酒前」。

● 得如此：このようであることが可能である。『韓非子』內儲說上七術に「(江乙曰)……誠得如此、臣免死罪矣」。古樂府詩六首「其三」隴西行(『玉臺新詠』卷一)に「取婦得如此、齊妻亦不如」。岑參「衛節度赤驃馬歌」(『全唐詩』卷一九九)に「男兒稱意得如此、駿馬長鳴北風起」。

3 ● 禮樂：禮儀と音楽。礼は社会の秩序を整えるもの。楽は人の心を和らげるもの。『論語』子路に「子曰、……事不成、則禮樂不興。禮樂不興、則刑罰不中」。『禮記』樂記に「故禮以道其志、樂以和其聲、政以一其行、刑以防其姦。禮樂刑政、其極一也」。次の「魯伯禽」注の『史記』魯周公世家を参照。魏・曹操「秋胡行」(『樂府詩集』卷三六・相和歌辭)に「仁義爲名、禮樂爲榮」。沈佺期「哭蘇眉州崔司業二公」(『全唐詩』卷九七)に「禮樂羊叔子、文章王仲宣」。

● 遙傳：はるかに伝える。張説「節愍太子妃楊氏墓誌銘」(『全唐文』卷二二二)に「何必鼓吹山上、遙傳慈母之名」。賀朝「從軍行」(『全唐詩』卷一一七)に「鳴雞已報關山曉、來雁遙傳沙塞寒」。王昌齡「江上聞笛」(『全唐詩』卷一四一)に「相去萬餘里、遙傳此夜心」。

● 魯伯禽：周公旦の子。周公旦が成王を補弼することになったとき、代わって魯に封じられた。『禮記』曾子問に「孔子曰、吾聞諸老聃曰、昔者魯公伯禽、有爲爲之也」。『史記』卷三三・魯周公世家に「(周公旦)於是卒相成王、而使其

子伯禽代就封於魯。……於是成王乃命魯得郊祭文王。魯有天子禮樂者、以褒周公之德也。……魯公伯禽之初受封之魯、三年而後報政周公。周公曰、何遲也。伯禽曰、變其俗、革其禮、喪三年然後除之、故遲。北周・庾信「周公伯禽贊」〔藝文類聚〕卷三・人部・鑿謚に「伯禽居魯、鳴玉來朝。周公問政、治國風謠。北山有梓、南山有橋。禮容雖備、俯仰無驕。白居易「雜感」〔全唐詩〕卷四二五に「伯禽鞭見血、過失由成王」。

4 ●賓客：賓客。『史記』卷八七・李斯傳に「斯乃上書曰、……今乃棄黔首以資敵國、卻賓客以業諸侯、使天下之士退而不敢西向、裹足不入秦。此所謂藉寇兵而齎盜糧者也」。『史記』卷七五・孟嘗君傳に「孟嘗君在薛、招致諸侯賓客及亡人有罪者、皆歸孟嘗君。孟嘗君舍業厚遇之、以故傾天下之士。食客數千人、無貴賤一與文〔田文、すなわち孟嘗君〕等」。『史記』卷七六・平原君傳に「平原君趙勝者、趙之諸公子也。諸子中勝最賢、喜賓客、賓客蓋至者數千人」。魏・阮籍「詠懷詩八十二首」其六二〔魏詩〕卷一〇に「賓客者誰子、倏忽若飛塵」。晉・陳新塗妻李氏「冬至詩」〔藝文類聚〕卷三・歲時・冬に「式宴集中堂、賓客盈朝館」。李頎「行路難」〔全唐詩〕卷一三三に「賓客填街復滿座、片言出口生輝光」。012高適「宋中十首」其一〔一四・001〕に「梁王昔全盛、賓客復多才」。

●争：先を争って。我先にと。次の「魏公子」注の『史記』魏公子傳を参照。
●過：訪れる。

●魏公子：魏無忌。信陵君。戦国時代の魏の昭王の公子（天子・諸侯の庶子）。その人となり慕って、多くの士が訪れ、食客三千人を誇った。『史記』卷七七・魏公子傳に「魏公子無忌者、魏昭王少子而魏安釐王異母弟也。昭王薨、安釐王即位、封公子為信陵君。……公子為人仁而下士、士無賢不肖皆謙而禮交之、不敢以其富貴驕士。士以此方數千里爭往歸之、致食客三千人」。梁・王僧孺「贈顧倉曹詩」〔藝文類聚〕卷三・人部・贈答に「晨趨魏公子、夕宿韓王孫。北周・庾信「同會河陽公新造山池聊得寓目詩」〔北周詩〕卷三に「由來魏公子、今日始相逢」。

5 ●酒筵：酒盛りの席。酒宴。王維「三月三日勤政樓侍宴應制」〔全唐詩〕卷一二七に「酒筵嫌落絮、舞袖怯春風」。李白「陪侍郎叔遊洞庭醉後三首」其二〔全唐詩〕卷一七九に「白鷗閒不去、爭拂酒筵飛」。
●莫：日暮れ。『全唐詩』卷二二三に「暮」に作る。

●散：おひらきになる。酒宴の参加者が分散して帰ってゆく、ということであろう。

●明月：晴れた夜に明るく輝く月。宋玉「神女賦」〔文選〕卷一九に「其少進也、皎若明月舒其光」。前漢・班婕妤「怨歌行」〔文選〕卷二七に「裁為合歡扇、團圓似明月」。魏・曹植「公讌詩」〔文選〕卷二〇に「公子敬愛客、終宴不知疲。清夜遊西園、飛蓋相追隨。明月澄清景、列宿正參差。劉希夷「覽鏡」〔全唐詩〕卷八二に「秋風下山路、明月上春期」。司空曙「關山月」〔全唐詩〕卷二九三に「蒼茫明月上、夜久光如積」。

6 ●馬屋：つながれた馬、つまり自由にその才能を發揮できない高適が、李別駕という知己を得て、気持ちを強くしたことをいう。「春風」は、その気持ちの新鮮さ、あるいは、その場の和やかさを表しているであろう。

6 ●櫪馬：うまやにつながれた馬。ここは、自由に才能を發揮することがかなわない人のたとえ。魏・曹操「步出夏門行」〔樂府詩集〕卷三七・相和歌辭に「驥老伏櫪、志在千里。烈士暮年、壯心不已」。『三國志』卷二一・魏書・劉劭傳「郎中令河東杜襲等亦著文賦、頗傳於世」の裴松之注に「文章敘錄曰、……襲與田丘儉鄉里相親、故為詩與儉、……其詩曰、騏驎馬不試、婆娑槽櫪間。壯士志未伸、坎軻多辛酸。西晉・潘岳「馬汧督誄」〔文選〕卷五七に「青煙傍起、歷馬長鳴」この「歴」は「櫪」に同じ。北周・王褒「從軍行二首」其二〔樂府詩集〕卷三三・相和歌辭に「年少多遊俠、結客好輕身。代風愁櫪馬、胡霜宜角筋。張九齡「秋晚登樓望南江入始興郡路」〔全唐詩〕卷四七に「櫪馬苦踰踟、籠禽念遐征」。

●長鳴：長く鳴く。勢いよく鳴く。「長」は、底本（孫注）は「常」に作る。孫注は校勘を示さないが、ここは、「清抄本」卷三三、「全唐詩」卷二二三、「敦煌選本」に「従い、長」とする。ちなみに敦煌写本P2976（東洋文庫）は、6を「櫪馬鳴春風起」と六文字に作る。「淮南子」天文訓に「孟夏之月、以熟穀禾、雄鳩長鳴、為帝候歲」。後漢書「卷四三・朱穆傳」穆又著絕交論、亦矯時之作」の李賢注に「其詩曰、……長鳴呼鳳、謂鳳無德」。魏・曹植「求自試表」〔文選〕卷三七に「臣聞騏驎長鳴、伯樂昭其能」李善注「戰國策、楚客謂春申君曰、昔騏驎駕車吳坂、遷延負轅而不能進、遭伯樂、仰而長鳴、知伯樂知己也。今僕屈厄日久、君獨無意使僕為君長鳴也」。右の「櫪馬」注の潘岳誄を参照。庾抱「聽馬」〔全唐詩〕卷三九に「櫪上浮雲聽、本出吳門中。發跡來東道、長鳴起北風」。

沈佺期「紫駟馬」(『全唐詩』卷九六)に「踠足追奔易、長鳴遇賞難」。2「得如此」注の岑參詩を参照。

●春風：春風。宋玉「登徒子好色賦」(『文選』卷一九)に「復稱詩曰、寤春風兮發鮮榮、契齋侯兮惠音聲」。後漢・宋子侯「董嬌饒詩」(『玉臺新詠』卷一)に「春風東北起、花葉正低昂」。次の「起」注を参照。

●起：ここは、風が吹き始める。吹いてくる。魏・曹植「感婚賦」(『藝文類聚』卷四〇・禮部・婚)に「春風起兮蕭條、蟄蟲出兮悲鳴」。梁・沈約「八詠詩二首」其二「會圍臨春風」(『玉臺新詠』卷九)に「臨春風、春風起春樹」。北周・宗懷「早春詩」(『初學記』卷三・歲時部・春)に「昨暝春風起、今朝春氣來」。

7 ●稱意：こころにかなう。思い通りになる。『史記』卷六〇・三王世家に「四月戊寅、奏未央宮。丞相臣(莊)青翟、御史大夫臣(張)湯味死言、……百蠻之君、靡不鄉風、承流稱意」。劉宋・鮑照「行路難四首」其一(『玉臺新詠』卷九)に「人生不得恆稱意、惆悵徒倚至夜半」。李白「擬古十二首」其二(『全唐詩』卷一八三)に「人生難稱意、豈得長爲羣」。

●能幾人：何人いることができるのだろうか。『三國志』卷五九・吳書・吳主五子傳・孫和傳に「和謂(丁)晏曰、文武在事、當能幾人」。岑參「送韓巽入都觀省便赴舉」(『全唐詩』卷一九九)に「洛陽才子能幾人、明年桂枝是君得」。錢起「送嚴士良侍奉詹事南遊」(『全唐詩』卷二三八)に「握手想千古、此心能幾人」。

8 ●布衣の高適が李別駕に推薦、幹旋を求めているということが言外にあるか。

●君：人を呼ぶ敬称。

●終始：始めから終わりまで。『易經』乾に「彖曰、……大明終始、六位時成」。『易經』繫辭下に「其道甚大、百物不廢。懼以終始、其要无咎。此之謂易之道也」。また、終わりと始め。『禮記』大學に「物有本末、事有終始。知所先後、則近道矣」。『易經』繫辭下に「易之爲書也、原始要終、以爲質也」。よくわか
らないが、ここは、道、真理、物事の本質の始めから終わりまでというよ
うな意味か。あるいは、人生、その成功の道や秘訣の始めから終わりまで
というような意味か。なお、『漢書』卷四九・鼂錯傳に「上(文帝)親策詔之曰、
……以選賢良明於國家之大體、通於人事之終始、及能直言極諫者、各有人數、
將以匡朕之不逮」。後漢・秦嘉「贈婦詩三首」其二(『玉臺新詠』卷一)に「貞士篤
終始、恩義可不屬」。高適082「自淇涉黃河途中作十三首」其三(七五・051)に「輟

榜聊問之、答言盡終始」。儲光羲「漁父詞」(『全唐詩』卷一三六)に「靜言念終始、安坐看沈浮」。

004 贈別褚山人(三・184)【6-7a】 褚山人に贈別す

- | | | |
|---|-------|------------------|
| 1 | 攜手贈將行 | 手を携えて將に行かんとするに贈る |
| 2 | 山人道姓名 | 山人 姓名を道う |
| 3 | 光陰薊子訓 | 光陰 薊子訓 |
| 4 | 才術褚先生 | 才術 褚先生 |
| 5 | 牆上梨花白 | 牆上 梨花白く |
| 6 | 樽中桂酒清 | 樽中 桂酒清し |
| 7 | 洛陽無二價 | 洛陽 二価無く |
| 8 | 猶是慕風聲 | 猶お是れ風声を慕う |

【詩型】

五言律詩

【押韻】

下平十二庚(生)、下平十四清(名・清・聲)同用。／平水韻：下平八庚。

【現代語訳】

褚山人に贈る別れのうた

1・2 手をつないでこれから旅立とうとするあなたにこの詩を贈ろう。山に
隠れ住むあなたは友情のあかしに名前を教えてください。

3・4 あなたの寿命は神仙の薊子訓のように長く、才能や学識は山中に隠棲
し続けた褚伯玉先生のように豊かだ。

5・6 塀より高く咲く梨花は白く、酒樽の肉桂香る酒は澄み切っている。

7・8 洛陽で薬を売って掛け値も言わねば値引きもせず、また名声を求めな
かった韓康のようなあなたは、洛陽を去つてもやはり人々にその人柄が慕
われるだろう。

【詩題解説】

旅立つ褚山人を讃えはなむけとした詩。制作時期は未詳。制作場所は、本詩

7・8「洛陽無二價、猶是慕風聲」から、洛陽であると思われる。「贈別」は、旅立つ人に詩文や物品などを餞別として贈る。「褚山人」は、未詳。「山人」は、世を捨てて山に隠れ住む人。山に暮らす隠者。南齊・孔稚珪「北山移文」(『文選』卷四三)に「蕙帳空兮夜鶴怨、山人去兮曉猿驚。昔聞投簪逸海岸、今見解蘭縛塵纓」。山人について、金文京『李白』(一九五―一九九頁。岩波書店、二〇一二年)は、「隱遁のポーズを取りながら官界への進出をねらう、いわば官僚予備軍であるとし、また詩人たちの情報交換は官僚情報網より、山人のネットワークが有効であったとする。また、李白と、杜甫、高適との間に共通の山人がおり、互いに交流し合っていたとする。高適詩の詩題に「山人」が見えるものは、このほか、¹⁴「宋中遇林慮楊十七山人因而有別」(二二〇・081)、¹²⁶「別楊山人」(一三四・131)、¹²⁷「送蔡山人」(一三五・123)、¹⁵⁰「賦得還山吟送沈四山人」(一六六・142)、¹⁶⁶「送郭處士往萊蕪兼寄苟山人」(一八五・134)、²²¹「武威同諸公過楊七山人」(二五七・151)。なおこのうち、「送蔡山人」について、金氏は李白『送蔡山人』(『全唐詩』卷一七六)の蔡山人と同一人物と見做しているようである。

【語注】

1 ● 攜手：手をたずさえる。親愛の情を示す行為。『詩經』邶風「北風」に「惠而好我、攜手同行」。前漢・李陵「與蘇武三首」其三(『文選』卷二九)に「攜手上河梁、遊子暮何之」。魏・嵇康「五言贈秀才詩」(『魏詩』卷九)に「逍遙遊太清、攜手長相隨」。

● 將行：出発しようとする。旅立とうとする。『晏子春秋』內篇「雜上」曾子將行晏子送之而贈以善言に「曾子將行。晏子送之曰、君子贈人以軒、不若以言。吾請以言之、以軒乎。曾子曰、請以言」。劉宋・鮑照「春日行」(『樂府詩集』卷六五・雜曲歌辭)に「獻歲發、吾將行」。杜審言「和李大夫嗣真奉使存撫河東」(『全唐詩』卷六二)に「將行備禮樂、送別仰神仙」。王維「偶然作六首」其三(『全唐詩』卷一二五)に「忽乎吾將行、寧俟歲云暮」。

2 ● 山人：詩題解説を参照。また、梁・劉孝綽「詠百舌詩」(『梁詩』卷一六)に「山人惜春暮、旭旦坐花林」。北周・庾信「道士步虛詞(六首)」其一(『藝文類聚』卷七八・靈異部・仙道)に「移梨付苑吏、種杏乞山人」。

● 道姓名：「道」は、言う。ことばで言い表す。「姓名」を隠している隠者がそれを明かすのは、相手を信頼し、厚い友情で結ばれたということであろう。その反対のような例として、『高士傳』卷下「漢濱老父」に「漢濱老父者、不知何

許人也。……(尚書郎南陽張)溫大慙、問其姓名、不告而去。また、隠者が姓名を隠す例を『高士傳』から挙げると、卷上に「石門守者、魯人也。亦避世不仕、自隱姓名」、卷中に「河上丈人者、不知何國人也。明老子之術、自匿姓名、居河之湄、著老子章句」、¹「黃石公者、下邳人也。遭秦亂、自隱姓名、時人莫知者」、²成公、成帝時人。自隱姓名、常誦經、不交世利、時人號曰成公」などがある。また、『史記』卷四一・越王句踐世家に「范蠡浮海出齊、變姓名、自謂鴟夷子皮、耕于海畔、苦身戮力、父子治產」。盧照鄰「詠史四首」其一(『全唐詩』卷四一)に「髡鉗爲臺隸、灌園變姓名」。高適²⁴⁸「漁父歌」(二九三・124)に「世人欲得知姓名、良久問他不開口」。劉長卿「時平後送范倫歸安州」(『全唐詩』卷一五一)に「卻到長安逢故人、不道姓名應不識」。杜甫「哀王孫」(『全唐詩』卷二一六)に「問之不肯道姓名、但道困苦乞爲奴」。

3 ● 光陰：時間。年月。東晉・王羲之「雜帖」(『全晉文』卷二四)に「十一月四日右將軍會稽內史瑯琊王羲之敢致書司空高平郡公足下。……仰與公宿舊通家、光陰相接」。南齊・王融「法壽樂」歌學徒(『樂府詩集』卷七八・雜曲歌辭)に「昔余輕歲月、茲也重光陰」。梁・江淹「劉僕射東山集詩」(『梁詩』卷三)に「共惜玉樽暮、願是光陰遲」。

● 薊子訓：後漢の人。神仙と伝えられる。『後漢書』卷八二下・方術列傳「薊子訓傳」に「薊子訓者、不知所由來也。……後因遁去、遂不知所止。初去之日、唯見白雲騰起、從且至暮、如是數十處。時有百歲翁、自說童兒時見子訓賣藥於會稽市、顏色不異於今。後人復於長安東霸城見之、與一老公共摩挲銅人、相謂曰、適見鑄此、已近五百歲矣」。また、『神仙傳』卷七に薊子訓傳が見える。羅隱「期徐道者不至」(『全唐詩』卷六五九)に「只應薊子訓、醉後懶分身」。

4 ● 才術：才能と学問。才氣と学識。『後漢書』卷四〇下・班固傳に「固自以二世才術、位不過郎」。李嶠「扈從還洛呈侍從羣官」(『全唐詩』卷五七)に「登原采謳誦、俯谷求才術」。李白「草創大還贈柳官迪」(『全唐詩』卷一六九)に「才術信縱橫、世途自輕擲」。

● 褚先生：東晉から南齊にかけての隠者、褚伯玉。山中で隱棲生活を続けた。詩題解説の「北山移文」の作者、孔稚珪はその弟子に当たる。「先生」は、学問や技芸に長じている人の敬称。南齊・孔稚珪に「褚先生百玉碑」(『藝文類聚』卷三七・人部・隱逸)。『南齊書』卷五四・高逸・褚伯玉傳に「伯玉少有隱操、寡嗜欲。……在山三十餘年、隔絕人物。王僧達爲吳郡、苦禮致之、伯玉不得已、

停郡信宿、裁交數言而退。寧朔將軍丘珍孫與僧達書曰、聞褚先生出居貴館。……建元元年、卒。年八十六。常居一樓上、仍葬樓所。孔稚珪從其受道法、爲於館側立碑」。

5 ●牆上：「牆」は、土塼。『墨子』號令に「葆宮之牆必三重、牆之垣、守者皆累瓦釜牆上」。魏・曹丕に「大牆上萬行」(『樂府詩集』卷三九・相和歌辭)。王建「戴勝詞」(『全唐詩』卷二九八)に「戴勝誰與爾爲名、木中作窠牆上鳴」。白居易「重到城七絕句」其四「劉家花」(『全唐詩』卷四三八)に「劉家牆上花還發、李十門前草又春」。

●梨花：梨の花。花の色は白い。劉宋・孝武帝劉駿に「梨花贊」(『藝文類聚』卷八六・菓部・梨)。梁・蕭子顯「燕歌行」(『玉臺新詠』卷九)に「洛陽梨花落如雪、河邊細草細如茵」。王宏「從軍行」(『全唐詩』卷三八)に「可憐少年把手時、黃鳥雙飛梨花白」。常建「春詞」(『全唐詩』卷一四四)に「階下草猶短、牆頭梨花白」。

6 ●罇中：酒樽の中。「罇」は、「樽」の本字。『三國志』卷二二・魏書・崔琰傳「初、太祖性忌、有所不堪者、魯國孔融、……」の裴松之注に「張璠漢紀曰、……(孔融)愛才樂酒、常歎曰、坐上客常滿、樽中酒不空、吾無憂矣」。東晉・陶淵明「雜詩十二首」其四(『晉詩』卷一七)に「觴絃肆朝日、罇中酒不燥」。梁・元帝蕭繹「古意詩」(『藝文類聚』卷一八・人部・美婦人)に「罇中石榴酒、機上蒲萄紋」。

●桂酒：肉桂で香をつけた酒。『楚辭』屈原「九歌」「東皇太一」に「蕙肴蒸兮蘭藉、奠桂酒兮椒漿」王逸注「桂酒、切桂置酒中也」。魏・曹植「仙人篇」(『樂府詩集』卷六四・雜曲歌辭)に「玉樽盈桂酒、河伯獻神魚」。「子夜四時歌七十五首」「春歌二十首」其五(『樂府詩集』卷四四・清商曲辭)に「含春未及歌、桂酒發清容」。

●清：にこりが無い。澄み切っている。

7 ●洛陽無二價：後漢の韓康が薬を長安で売るとき、売値を変えなかった故事をふまえる。韓康は、名声を避けていたが、若い女性にまでもその存在が知られていることがわかり、霸陵県(陝西省西安市灊橋区。前漢の文帝の陵である霸陵があった)の山中に隠遁した。『後漢書』卷八三・逸民列傳・韓康傳に「韓康字伯休、一名恬休。京兆霸陵人。家世著姓。常采薬名山、賣於長安市、口不二價、三十餘年。時有女子從康買薬、康守價不移。女子怒曰、公是韓伯休那。乃不二價乎。康歎曰、我本欲避名、今小女子皆知有我、何用薬爲。乃遁入霸陵山中」。また『論衡』是應に「儒者……又言山出車、澤出舟、男女

異路、市無二價、耕者讓畔、行者讓路」。陳・劉勰「採薬遊名山詩」(『藝文類聚』卷八一・薬香草部・薬)に「定知無二價、非復在長安」。王維「濟上四賢詠三首」其三「鄭霍二山人」(『全唐詩』卷一二五)に「賣薬不二價、著書盈萬言」。

8 ●猶是：猶は、やはり。また。『是』は、である。肯定、認定の判断を示す。●風聲：風格と名声。よい評判と人望。人柄。『漢書』卷七二・王貢兩龔鮑傳に「白園公、綺里季、夏黃公、甬里先生、鄭子真、嚴君平皆未嘗仕、然其風聲足以激貪厲俗、近古之逸民也」。元結「系樂府十二首」其一二「下客謠」(『全唐詩』卷二四〇)に「風聲與時茂、歌頌萬千年」。あるいは、風のたよりの意味かもしれない。その場合は、「慕風聲」で、風のたよりにその消息を聞くことを待ち望んでいる、という意味になるか。『三國志』卷二八・蜀書・許靖傳「始靖兄事穎川陳紀、與陳郡袁渙、平原華歆、東海王朗等親善、……咸與靖書、申陳舊好、情義款至、文多故不載」の裴松之注に「魏略、王朗與文休(許靖の字)書曰、……時間消息於風聲、託舊情於思想」。

005 別韋參軍(四・122)【5-2a】 韋參軍に別る

- | | | |
|----|---------|--|
| 1 | 二十解書劍 | 二十にして書劍を解し |
| 2 | 西遊長安城 | 西のかた長安城に遊ぶ |
| 3 | 舉頭望君門 | 頭を挙げて君門を望み |
| 4 | 屈指取公卿 | 指を屈して公卿を取らんとす |
| 5 | 國風沖融邁三五 | 國風の沖融 三五を邁 <small>すす</small> ぎ |
| 6 | 朝廷歡樂彌寰宇 | 朝廷の歡樂 寰宇に彌 <small>あまね</small> し |
| 7 | 白璧皆言賜近臣 | 白璧 皆言う 近臣に賜ると |
| 8 | 布衣不得干明主 | 布衣 明主に干 <small>かん</small> するを得ず |
| 9 | 歸來洛陽無負郭 | 歸り來たりて洛陽に負郭無く |
| 10 | 東過梁宋非吾土 | 東のかた梁宋に過 <small>よ</small> るも吾が土に非ず |
| 11 | 免苑爲農歲不登 | 免苑 農と爲るも 歲 <small>とし</small> 登 <small>あ</small> らず |
| 12 | 雁池垂釣心長苦 | 雁池 釣を垂るるも 心 長 <small>つね</small> に苦しむ |
| 13 | 世人向我同衆人 | 世人 我を衆人に同じくし |
| 14 | 唯君於我最相親 | 唯だ君 我に於いて最も相い親しむ |

- 15 且喜百年有交態 且く喜ぶ 百年 交態有るを
 16 未嘗一日辭家貧 未だ嘗て一日も家の貧しきを辭せず
 17 彈棋擊筑白日晚 棋を弾きて筑を撃ち 白日晚れ
 18 縱酒高歌楊柳春 酒を縱にして高歌し 楊柳春なり
 19 歡娛未盡分散去 歡娛未だ尽きざるに 分散し去り
 20 使我惆悵驚心神 我をして惆悵して心神を驚かしむ
 21 丈夫不作兒女別 丈夫は作さず 兒女の別れの
 22 臨歧涕淚沾衣巾 歧に臨みて 涕淚 衣巾を沾す

【詩型】

七言古詩

【押韻】

下平十二庚(卿)、下平十四清(城)同用。／平水韻：下平八庚。

上聲九麌(宇・主)、上聲十姥(五・土・苦)同用。／平水韻：上聲七麌。

上平十七真(人・親・貧・神・巾)、上平十八諄(春)同用。／平水韻：上平十一眞。

【現代語訳】

韋參軍に別れる

1・2 二十歳で文武両道に通じ、西のかた都長安へ赴いた。

3・4 顔を上げて天子の宮殿を見やり、指を折るようにたやすく宰相や大臣の地位を手に入れようとした。

5・6 国の風俗習慣は穏やかで三皇五帝の時代を凌いでおり、朝廷の歓楽は天下の隅々にまで行き渡っていた。

7・8 ところが、白色の宝玉は陛下の寵臣にだけに下賜されると皆が言い、一庶民の分際で聡明な陛下にお目通りすることなどできなかつた。

9・10 洛陽に帰っても町の近郊に良田はなく、東の梁宋の地を訪れたがそこは我が郷土ではなかつた。

11・12 兔苑で農民となつたが作物は実らず、雁池で釣りをしても心はいつも晴れなかつた。

13・14 世間の人は私を凡人扱いするが、ただあなただけが私にこのうえなく親愛の情を示してくれる。

15・16 あなたが生涯の友になつてくれたことをひとまずは喜ぶこととしよう。

それにあなたはこれまで一日たりとも私が貧窮しているからといってつきあいを嫌がったりはしなかつた。

17・18 おはじきをして筑を鳴らしていると輝く太陽が沈み、楊柳が生い茂る春に思う存分酒を飲んで大きな声で歌をうたう。

19・20 にぎやかに過ぐす飲びの時がまだ尽きないのに離ればなれになり、私にはがっかりして悲しみに打ちひしがれる。

21・22 しかし一人前の男は、別れる時に女子供のように涙で服やハンカチを濡らすことなどしないものだ。

【詩題解説】

韋參軍と別れるにあたり、これまでの人生について不遇を中心に表白し、韋參軍との友情を温め、最後に離別の悲哀を忌避する。高適と韋參軍は交遊していたが、韋が何らかの理由で旅立つことになつたのであろうか。制作時期・場所については、10「東過梁宋非吾土」、11「兔苑爲農歲不登」、12「雁池垂釣心長苦」から、宋中に寓居していた時期(凡例十を参照)の作品であると考えられる。

「韋參軍」は、未詳。なお、周譜、劉注は、「敦煌選本」に見える李昂「睢陽送韋參軍還汾上(題下注「此公元昆任睢陽參軍」)」「王重民『補全唐詩』陳尚君『全唐詩補編』所収)の韋參軍が、高適詩の韋參軍の兄弟である可能性に言及する。「參軍」は、參軍事の略称。州においては、刺史、別駕、長史、司馬の下に、上から、録事參軍事、諸司參軍事、參軍事がある(003「題李別駕壁」(二・128)の詩題解説の礪波「唐代百官表」)。

【語注】

1・4：早熟な才能に対する自負と過剰な自信を描く。

1・20：二十歳。成人。次の『禮記』の記述では、三十代までは学問をして学識を蓄え諸芸を学ぶ段階であり、仕えるのは四十歳、大夫となるのは五十歳である。『禮記』曲禮上に「人生十年曰幼、學。二十曰弱、冠。三十曰壯、有室。四十曰強、而仕。五十曰艾、服官政。……百年曰期、頤」孔穎達正義「五十是知天命之年、堪爲大夫服事也。大夫得專事其官政、故曰服官政也。鄭康成注孝經云、張官設府謂之卿大夫。即此之謂也。」「同」内則に「十有三年、學樂誦詩舞勺。成童、舞象學射御。二十而冠、始學禮。可以衣裘帛。舞大夏、惇行孝弟。博學不教、內而不出。三十而有室。始理男事。博學無方。孫友視志。四十始仕。方物出謀發慮。道合則服從、不可則去。五十命爲大夫、服官政」。

「古樂府詩六首」其二「日出東南隅行」(『玉臺新詠』卷二)に「十五府小吏、二十朝大夫」。北齊・顔之推「古意詩(二首)」其一(『藝文類聚』卷二六・人部・言志)に「十五好詩書、二十彈冠仕」。

●解：通じる。マスターする。

●書劍：書物と劍。学問と武芸。『史記』卷八六・刺客列傳・荊軻傳に「荊卿好讀書擊劍、以術說衛元君、衛元君不用」。『同』卷一一七・司馬相如傳に「(司馬相如)少時好讀書、學擊劍」。北齊・顔之推「神仙詩」(『北齊詩』卷二)に「紅顏恃容色、青春矜盛年。自言曉書劍、不得學神仙」。陳子昂「送別出塞」(『全唐詩』卷八三)に「平生聞高義、書劍百夫雄」。

2 ●西遊：「遊」は、旅に出る。ここは、仕官のために定住した住居を離れてよそへ行く。『呂氏春秋』慎大覽・報更に「張儀、魏氏餘子也。將西遊於秦、過東周。客有語之於昭文君者曰、魏氏人張儀、材士也。將西遊於秦。願君之禮貌之也」。梁・武帝蕭衍「直石頭詩」(『梁詩』卷二)に「東壘葉黍稷、西遊入卿相」。王績「晚年敘志示翟處士」(『全唐詩』卷三七)に「明經思待詔、學劍覓封侯。棄繻頻北上、懷刺幾西遊」。

●長安城：長安のまち。「城」は、まちの周りを城壁で囲んだ城郭都市。『史記』卷九・呂太后本紀に「孝惠三年、方築長安城、四年就半、五年六年城就」。後漢・班固「詠史」(『漢詩』卷五)に「三王德彌薄、惟後用肉刑。太倉令有罪、就遞長安城」。梁・沈約「奉和竟陵王郡縣名詩」(『藝文類聚』卷五六・雜文部・詩)に「一窺長安城、羞言杜陵掾」。梁・何遜「臨別聯句」(『梁詩』卷九)に「君望長安城、予悲獨不見」。

3 ●舉頭：頭をあげる。上を向く。『論衡』驗符に「二黃龍見、長出十六丈、身大於馬、舉頭顧望、狀如圖中畫龍」。西晉・傅玄「白楊行」(『樂府詩集』卷四〇・相和歌辭)に「驥來對我悲鳴、舉頭氣凌青雲」。杜甫「三川觀水漲二十韻」(『全唐詩』卷二二六)に「舉頭向蒼天、安得騎鴻鵠」。ここは、自信を示す行為。

●望：見上げる。

●君門：君主の宮殿の門。天子の宮殿の門。朝廷。『禮記』曲禮上に「大夫士出入君門、由闕右、不踐闕」。魏・曹植「當牆欲高行」(『樂府詩集』卷六一・雜曲歌辭)に「願欲披心自說陳、君門以九重、道遠河無津」。李白「贈參寥子」(『全唐詩』卷一六八)に「飢憐辭故園、昂藏入君門」。また、薛據「懷哉行」(『全唐詩』卷二五三)に「懷策望君門、歲晏空遲迴」。于漬「邊遊錄戍卒言」(『全唐詩』卷

五九九)に「目斷望君門、君門苦寥廓」。

4 ●屈指：指を折って数える。『前漢紀』卷二六・孝成皇帝紀に「(陳湯)屈指計其日曰、不出五日、當有吉語至」。王績「圍碁」(『全唐詩續拾』卷二)に「攢眉思上策、屈指計中權」。李嶠「餞薛大夫護邊」(『全唐詩』卷六一)に「登山窺代北、屈指計遼東」。ここは、指を折り曲げるようにたやすいことをいう。高適¹³⁰「餞宋八充彭中丞判官之嶺外」(一四〇・209)に「舉鞭趨嶺嶠、屈指冒炎蒸」。

●取：手に入れる。わがものとする。

●公卿：三公九卿の官。高位高官のこと。「三公」は、臣下としての最高の三つの官職。「九卿」は、それに次ぐ九人の長官。『論語』子罕に「子曰、出則事公卿。入則事父兄。喪事不敢不勉。不爲酒困。何有於我哉」。南齊・謝朓「始之宣城郡詩」(『齊詩』卷三)に「疏散謝公卿、蕭條依掾史」。また、白居易「江州赴忠州至江陵已來舟中示舍弟五十韻」(『全唐詩』卷四四〇)に「掉頭稱俊造、翹足取公卿」。なお、『晉書』卷九一・儒林列傳に「於是傍求蠹簡、博訪遺書、創甲乙之科、擢賢良之舉、莫不紆青拖紫、服冕乘軒、或徒步而取公卿、或累旬以膺台鼎、故搢紳之士靡然嚮風、餘芳遺烈、煥乎可紀者也」とあるのも、この意味か。

5 ●國風：国の風俗。国の政教風化。『史記』卷三・殷本紀に「帝武丁即位、思復興殷、而未得其佐。三年不言、政事決定於冢宰、以觀國風」。盧僎「奉和李令扈從溫泉宮賜遊驪山韋侍郎別業」(『全唐詩』卷九九)に「多慚郎署在、輒繼國風餘」。張九齡「奉和聖製途次陝州作」(『全唐詩』卷四八)に「馳道當河陝、陳詩問國風」。

●沖融：おだやかなさま。やわらかなさま。閻朝隱「晴虹賦」(『全唐文』卷二〇七)に「上下明媚、表裏沖融」。高適¹⁷⁰「酬祕書弟兼寄幕下諸公」(一九二・091)に「司業至應徐、雅度思沖融」。杜甫「寄司馬山人十二韻」(『全唐詩』卷二二八)に「望雲悲轆軻、畢景羨沖融」。白居易「我身」(『全唐詩』卷四三四)に「外貌雖寂寞、中懷頗沖融」。

●邁：優れる。過ぎる。

●三五：三皇五帝。いくつかの説がある。『史記』卷四七・孔子世家に「楚令尹子西曰、……今孔丘述三五之法、明周召之業」。南齊・王融「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四六)に「方握河沈璧、封山紀石、邁三五而不追、踐八九之遙迹」。金真德「太平詩」(永徽元年、眞德大破百濟之衆、織錦作五言太平詩、

遣其弟之子法敏以獻」(『全唐詩』卷七九七)に「五咸一德、昭我皇家唐」。蘇頲「奉和馬常侍寺中之作」(『全唐詩』卷七四)に「德施超三五、文雄賦十千」。

6 ●朝廷：天子、君主が政治を行うところ。『論語』郷黨に「其在宗廟朝廷、便便言、唯謹爾」。『後漢書』卷二六、郭賀傳に「(郭賀)拜荊州刺史、引見賞賜、恩寵隆異。及到官、有殊政。百姓便之、歌曰、厥德仁明郭喬卿、忠正朝廷上下平」。西晉・傅玄「天命篇」(『樂府詩集』卷五三・舞曲歌辭)に「朝廷無遺理、方表寧且康」。

●歡樂：よろこびたのしむ。『孟子』梁惠王上に「孟子對曰、……文王以民力爲臺爲沼、而民歡樂之。謂其臺曰靈臺。謂其沼曰靈沼。樂其有麋鹿魚鼈。古之人與民偕樂。故能樂也」。古辭「滿歌行」(『樂府詩集』卷四三・相和歌辭)に「但當歡樂自娛、盡心極所嬉怡」。魏・曹植「孟冬篇」(『樂府詩集』卷五三・舞曲歌辭)に「陛下長歡樂、永世合天符」。

●彌：満ちはびこる。すみずみまで行き渡っている。
●寰宇：天下。『焦氏易林』升之臨に「据斗運樞、高步六虛。權既在手、寰宇可驅。國大無憂、與樂竝居」。李世民「五言塞外同賦山夜臨秋以臨爲韻」(『全唐詩續拾』卷二)に「憑軾望寰宇、流眺極高深」。則天皇后「唐享昊天樂 第九」(『全唐詩』卷五)に「禎符降昊穹、大業光寰宇」。

7 ●白璧：白色の宝玉。『春秋公羊傳』僖公二年に「荀息曰、請以屈產之乘與垂棘之白璧。往必可得也」。『史記』卷七九・范雎傳に「時候羸在旁曰、……夫虞卿躡屣擔簞、一見趙王、賜白璧一雙、黃金百鎰」。劉宋・鮑照「放歌行」(『文選』卷二八)に「豈伊白璧賜、將起黃金臺」。王績「被舉應徵別鄉中故人」(『全唐詩續拾』卷二)に「使君留白璧、天子降玄纁」。

●皆言：皆が言う。『春秋左氏傳』文公元年・傳に「殺之役、晉人既歸秦師。秦大夫及左右皆言於秦伯曰、是敗也、孟明之罪也。必殺之」。古樂府詩六首「其一」日出東南隅行」(『玉臺新詠』卷一)に「坐中數千人、皆言夫婿殊」。徐彥伯「上巳日被褻渭濱應制」(『全唐詩』卷七六)に「皆言侍蹕橫汾宴、暫似乘槎天漢遊」。高適「別崔少府」(『一五二・167』)に「皆言黃綬屈、早向青雲飛」。

●近臣：君主のそばに仕える臣。『禮記』服問に「君之母非夫人、則羣臣無服。唯近臣及僕隸乘從服」。西晉・潘岳「贈陸機出爲吳王郎中令」(『文選』卷二四)に「及爾同僚、具惟近臣」。駱賓王「帝京篇」(『全唐詩』卷七七)に「王侯貴人多近臣、朝遊北里暮南鄰」。また、『後漢書』志卷三〇・輿服に「太傅胡廣說曰、高

山冠、蓋齊王冠也。秦滅齊、以其君冠賜近臣謁者服之。韓滂「清明日賜百僚新火」(『全唐詩』卷二八一)に「朱騎傳紅燭、天廚賜近臣」。鄭轅「清明日賜百僚新火」(『全唐詩』卷二八一)に「改火清明後、優恩賜近臣」。

8 ●布衣：一般庶民の着る麻や綿の服。無位無官の者。『莊子』讓王に「魏牟、萬乘之公子也。其隱巖穴也、難爲於布衣之士」。『荀子』大略に「古之賢人、賤爲布衣、貧爲匹夫」。魏・阮籍「詠懷詩十七首」其九(『文選』卷二三)に「布衣可終身、寵祿豈足賴」。陳子昂「感遇詩三十八首」其二(『全唐詩』卷八三)に「布衣取丞相、千載爲辛酸」。

●得：くでる。可能を表す。
●干：おしてまみえる。『春秋公羊傳』定公四年に「伍子胥父誅乎楚、挾弓而去楚、以干闔廬」何休注「不待禮見曰干」。次の「明主」注の錢起詩と杜牧詩を参照。また、もとめる。官職や俸禄をもとめる。『論語』爲政に「子張學干祿」何晏集解「鄭曰、……干、求也。祿、祿位也」。ここは、天子にお目通りして官職や俸禄を請い求めるといことであろう。

●明主：賢明な君主。明君。『春秋左氏傳』襄公二十九年・傳に「季札曰、美哉、颯風乎。大而婉、險而易行。以德輔此、則明主也」。魏・曹植「惟漢行」(『樂府詩集』卷二七・相和歌辭)に「明主敬細微、三季蒼天經」。宋之問「初發荊府贈長史」(『全唐詩』卷五二)に「明主無由見、羣公莫與言」。錢起「送褚大落第東歸」(『全唐詩』卷二二六)に「頃來荷策干明主、還復扁舟歸五湖」。杜牧「盧秀才將出王屋高步名場江南相逢贈別」(『全唐詩』卷五二四)に「將攜健筆干明主、莫向仙壇問白雲」。

9：高適の郷里は、洛陽であるかもしれない。
9 ●洛陽無負郭：戦国時代の遊説家・蘇秦が六国の宰相を兼ねて郷里の洛陽に帰ったときに、自分に負郭の良田が二頃(戦国時代の一頃は、約一・八二ヘクタール)あったら、自分に負郭の印を腰につけることができたらうかと嘆息して言った故事をふまえる。「負郭」は、ここは、城郭の外側の城郭に近い土地で、日当たりがよい肥沃な土地。『史記』卷六九・蘇秦傳に「於是六國從合而并力焉。蘇秦爲從約長、并相六國。……蘇秦喟然歎曰、……且使我有雒陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎」司馬貞索隱「負者、背也、枕也。近

城之地、沃潤流澤、最爲膏腴。故曰負郭也」。梁・劉峻(劉孝標)「與宋玉山人書」(『藝文類聚』卷三七・人部・隱逸)に「將由囿空桑麻、田無負郭。俛眉翕肩、

以斯故爾」。賈賓王「疇昔篇」(『全唐詩』卷七七)に「祇爲須求負郭田、使我再干州縣祿」。杜甫「惠義寺園送辛員外」(『全唐詩』卷三三四)に「朱櫻此日垂朱實、郭外誰家負郭田」。ちなみに「負郭」は、城郭の内側の城郭に近い土地を指すこともあり、その場合は、日当たり、居住環境が悪い土地、陋巷である。

10 ● 過：訪れる。

● 梁宋：河南省東部、開封市から商丘市にかけての地。「梁」は、戦国・魏の別名。恵王のとき都を大梁(河南省開封市)に移してからの称。「宋」は、周の成王が殷の紂王の異母兄・微子を封じて建てた国で、都は商丘(河南省商丘市)。「史記」卷一二九「貨殖列傳」に「天自鴻溝以東、芒、碭以北、屬巨野、此梁、宋也。陶、睢陽、亦一都會也」張守節正義「鴻溝以東、芒、碭以北至鉅野、梁宋二國之地」。劉宋・顏延之「北使洛」(『文選』卷二七)に「塗出梁宋郊、道由周鄭間」。李頎「贈別高三十五」(『全唐詩』卷一三三)に「僂俛從寸祿、舊遊梁宋時」。なお「梁」は、漢の梁国(都は睢陽県、河南省商丘市睢陽区)を指す場合もある。「元和郡縣圖志」卷七・河南道・宋州に「宋城縣、望。郭下。漢睢陽縣、屬宋國、後屬梁國。後魏屬梁郡。隋開皇三年罷梁郡、以縣屬亳州。十六年、於此置宋州、睢陽屬焉。十八年改爲宋城」。なお、高適009「宋中遇劉書記有別」(一一・032)に「相逢梁宋間、與我醉蒿萊」、102「送蕭十八」(九九・017)に「故交在梁宋、遊方出庭戶」、121「宋中別周梁李三子」(一二七・087)に「周旋梁宋間、感激建安時」、170「酬祕書弟兼寄幕下諸公」(一九二・091)に「客從梁宋來、行役隨轉蓬」、226「奉寄平原顏太守」(二六二・247)に「始余梁宋間、甘與麋鹿同」。なお、高適詩に見える「梁宋」は、「梁」||「宋」||宋州宋城縣(河南省商丘市睢陽区)であるようにも思われる。待考。

● 吾土：自分の郷里。魏・王粲「登樓賦」(『文選』卷一一)に「雖信美而非吾土兮、曾何足以少留」。西晉・潘岳「在懷縣作二首」其二(『文選』卷二六)に「信美非吾土、祇攬懷歸志」。劉宋・鮑照「夢還詩」(『玉臺新詠』卷四)に「此土非吾土、慷慨當訴誰」。

11 ● 兔苑：前漢・文帝の第二子で梁の孝王・劉武が築いた園圃。次の「史記」梁孝王世家に見える「東苑」を指す。「兔(兔)園(苑)」とも書く。梁園(梁苑)とも書く)とも呼ぶ(植木久行「中国詩跡事典」二一五頁「梁園」。研文出版、二〇一五年)。「元和郡縣圖志」卷七・河南道・宋州・宋城縣に「兔園、縣東南十里。漢梁孝王園」。梁の孝王は、兔苑のほか、大規模に宮殿などを造営し、四方から

豪傑を招き、遊説の士が訪れた。またそこには司馬相如、鄒陽、枚乘、嚴忌らすぐれた文学者がいた。「史記」卷五八・梁孝王世家に「於是孝王築東苑、方三百餘里。廣睢陽城七十里。大治宮室、爲複道、自宮連屬於平臺三十餘里。……招延四方豪傑、自山以東游説之士莫不畢至。齊人羊勝、公孫詠、鄒陽之屬。「史記」卷一一七・司馬相如傳に「司馬相如)以賞爲郎、事孝景帝、爲武騎常侍、非其好也。會景帝不好辭賦、是時梁孝王來朝、從游説之士齊人鄒陽、淮陰枚乘、吳莊忌夫子(嚴忌)之徒、相如見而説之、因病免、客游梁。梁孝王令與諸生同舍、相如得與諸生游士居數歲、乃著子虛之賦」。なお、「莊忌夫子」が嚴忌であることについては、「楚辭」前漢・嚴忌「哀時命」の序に「哀時命者、嚴夫子之所作也。夫子名忌。與司馬相如俱好辭賦、客遊於梁、梁孝王甚奇重之」王逸注「忌、會稽吳人。本姓莊。當時尊尙、號曰夫子。避漢明帝諱曰嚴」。また、右の司馬相如傳の司馬貞索隱に「徐廣、郭璞皆云名忌字夫子。案、鄒陽傳云枚先生、嚴夫子。此則夫子是美稱、時人以爲號。漢書作嚴忌者、案忌本姓莊、避明帝諱改姓嚴也」。また、前漢・枚乘「梁王兔園賦」(『藝文類聚』卷六五・產業部・園)に「脩竹檀欒、夾池水旋、兔園竝馳」。『西京雜記』卷二・梁孝王宮園に「梁孝王好營宮室苑囿之樂、作曜華宮、築兔園。園中有百靈山、山有膚寸石、落猿巖、棲龍岫。又有雁池、池間有鶴洲鳧渚。其諸宮觀相連、延亘數十里、奇異異樹、瑰禽怪獸畢備。王日與宮人賓客弋釣其中」。梁・蕭琛「和元帝詩」(『藝文類聚』卷五〇・職官部・尹)に「平臺禮申穆、兔苑接卿雲」。陳・張正見「陪衡陽王遊耆闍寺詩」(『藝文類聚』卷七六・內典・內典)に「兔苑移飛蓋、王城列玳簪」。高適11「奉酬睢陽李太守」(一一〇・207)に「猿巖飛雨雪、兔苑落梧楸」。

● 爲農：農民となる。「國語」齊語に「管子對曰、……夫是故農之子恆爲農、野

處而不暱」。「晉書」卷四七・傅玄傳に「玄復上疏曰、……臣以爲亟定其制、通

計天下若干人爲士、足以副在官之吏。若干人爲農、三年足有一年之儲」。宋

之問「藍田山莊」(『全唐詩』卷五二)に「考室先依地、爲農且用天」。杜甫「爲農」

(『全唐詩』卷二二六)に「卜宅從茲老、爲農去國賒」。

● 歲：その年の收穫。

● 不登：「登」は、みのる。「禮記」曲禮下に「歲凶、年穀不登、君膳不祭肺」。『史記』卷三〇・平準書に「是時山東被河菑、及歲不登數年、人或相食、方一二千里」。王維「不遇詠」(『全唐詩』卷一二五)に「北闕獻書寢不報、南山種田時不登」。

12 ● 雁池：梁の孝王が梁園の中に造った池。11「兔苑」注の『西京雜記』を参照。

李嶠「劉侍讀見和山邸十篇重申此贈」(『全唐詩』卷六一)に「對巖龍岫出、分壑雁池深」。高嶠「晦日重宴」(『全唐詩』卷七二)に「駕言尋鳳侶、乘歡俯雁池」。

●垂釣：つりばりを垂れる。釣りをする。『楚辭』前漢・嚴忌「哀時命」に「下垂釣於谿谷兮、上要求於僂者」。魏・嵇康「秋胡行七首」其五(『樂府詩集』卷三六・相和歌辭)に「過而復悔、當不自得。垂釣一壑、所樂一國」。梁・昭明太子蕭統「陶淵明集序」(『全梁文』卷二〇)に「故莊周垂釣於濠、伯成躬耕於野」。駱賓王「疇昔篇」(『全唐詩』卷七七)に「垂釣甘成白首翁、負薪何處逢知己」。また、11「兔苑」注の『西京雜記』を参照。なおここには、『史記』卷三二・齊太公世家「呂尚蓋嘗窮困、年老矣、以漁釣奸周西伯」の太公望の故事もふまえるか。

●長：常に。いつも。李端「贈薛戴」(『全唐詩』卷二八四)に「毛義心長苦、袁安家轉貧」。

13 ●世人：世間の人。『楚辭』屈原「漁父」に「世人皆濁、何不泥其泥而揚其波」。『吳越春秋』闔閭内傳に「孫子者、名武、吳人也。善爲兵法、辟隱深居、世人莫知其能」。魏・應璩「詩」(『魏詩』卷八)に「世人指爲武、誰復勵嚴冬」。李白「梁甫吟」(『全唐詩』卷一六二)に「智者可卷愚者豪、世人見我輕鴻毛」。

●向：くを。くに。

●同：同じとする。

●衆人：普通の人。なみの人。『墨子』明鬼下に「今執無鬼者曰、夫衆人耳目之請、豈足以斷疑哉。奈何其欲爲高君子於天下、而有復信衆之耳目之請哉」。

『楚辭』屈原「漁父」に「衆人皆醉、何不鋪其糟而飲其醪」。魏・曹植「美女篇」(『文選』卷二七)に「衆人何嗷嗷、安知彼所觀」。劉宋・謝靈運「石門新營所住四面高山迴溪石瀨脩竹茂林詩」(『文選』卷三〇)に「匪爲衆人說、冀與智者論」。儲光羲「秋庭貽馬九」(『全唐詩』卷一三七)に「往復萬餘里、相逢皆衆人」。また、『後漢書』卷二四・馬援傳に「援謂之(孟冀)曰、吾望子有善言、反同衆人邪」。張籍「獻從兄」(『全唐詩』卷三八三)に「賢達失其所、沈飄同衆人」。

14 ●唯：それだけ。

●君：人を呼ぶ敬称。

●最相親：最も身近に接する。權德輿「酬主客仲員外見賀正除」(『全唐詩』卷三二二)に「憶昔曲臺嘗議禮、見君論著最相親」。白居易「欲與元八卜鄰先有是贈」(『全唐詩』卷四三八)に「平生心迹最相親、欲隱牆東不爲身」。

15 ●且喜：「且」は、まあちよっと。とりあえず。かりに。張說「幽州新歲作」

(『全唐詩』卷八七)に「共知人事何常定、且喜年華去復來」。高適⁰²⁴「苦雪四首」其三(二〇・096)に「且喜潤羣物、焉能悲斗儲」。杜甫「憶弟二首」其二(『全唐詩』卷二二五)に「且喜河南定、不問鄴城圍」。

●百年：一生。人間の寿命。1「二十」注の『禮記』曲禮上を参照。『莊子』盜跖に「盜跖大怒曰、……人上壽百歲、中壽八十、下壽六十」。魏・曹丕「芙蓉池作」(『文選』卷二二)に「遨遊快心意、保己終百年」。東晉・陶淵明「擬古詩九首」其二(『晉詩』卷一七)に「不學狂馳子、直在百年中」。梁・江淹「雜體詩三十首」其二二「陶徵君 田居 潛」(『文選』卷三二)に「問君亦何爲、百年會有役」。

●交態：交わりの態度。つきあい方。『史記』二二〇・汲鄭列傳に「翟公乃大署其門曰、一死一生、乃知交情。一貧一富、乃知交態。一貴一賤、交情乃見」。駱賓王「遊兗部逢孔君自衛來欣然相遇若舊」(『全唐詩』卷七八)に「將期重交態、時慰不然灰」。068高適「淇上別劉少府子英」(六五・079)に「求仁見交態、於道喜甘臨」。獨孤及「自東都還濠州奉酬王八諫議見贈」(『全唐詩』卷二四七)に「天地變化縣城改、獨有故人交態在」。

16 ●辭家貧：こは、相手(高適)の家が貧窮していることを理由に交際をしない、ということであろう。

●辭貧：貧しさを避ける。『禮記』坊記に「子云、君子辭貴不辭賤、辭富不辭貧、則亂益亡」。李白「擬古十二首」其三(『全唐詩』卷一八三)に「提壺莫辭貧、取酒會四鄰」。崔峒「客舍有懷因呈諸在事」(『全唐詩』卷二九四)に「讀書常苦節、待詔豈辭貧」。

●家貧：家が貧窮している。『莊子』人間世に「顏回曰、回之家貧、唯不飲酒不如葷者數月矣」。魏・曹植「靈芝篇」(『樂府詩集』卷五三・舞曲歌辭)に「董永遭家貧、父老財無遺」。東晉・陶淵明「飲酒詩二十首」其一八(『晉詩』卷一七)に「子雲性嗜酒、家貧無由得」。

17 ●彈棋：おほじきのようなゲーム。『後漢書』卷三四・梁冀傳に「(梁冀)性嗜酒、能挽滿、彈棊、格五、六博、蹴鞠、意錢之戲」李賢注「蘇經曰、彈棊、兩人對局、白黑棊各六枚、先列棊相當、更先彈也。其局以石爲之」。また、後漢・蔡邕に「彈棊賦」(『藝文類聚』卷七四・巧藝部・彈棊)。「古歌」(『藝文類聚』卷七四・巧藝部・投壺)に「投壺對彈棊、博弈竝復行」。李頎「彈棋歌」(『全唐詩』卷一三三)に「崔侯善彈棋、巧妙盡於此。藍田美玉清如砥、白黑相分十二子」。また、王錫九「李頎詩歌校注」「彈棋歌」(五二二頁。中華書局、二〇一八年)の注を参照。

●撃筑：筑を打ち鳴らす。「筑」は、琴に似た、竹で打ち鳴らす弦楽器。『史記』卷八六・刺客列傳・荆軻傳に「荆軻既至燕、愛燕之狗屠及善擊筑者高漸離。……高漸離擊筑、荆軻和而歌於市中、相樂也、已而相泣、旁若無人者」司馬貞索隱「筑似琴、有弦、用竹擊之、取以爲名」。18「縱酒」注の『史記』高祖本紀を参照。魏・阮瑀「詩二首」其二「藝文類聚」卷五五・雜文部・史傳。『魏詩』卷三では「詠史詩二首」其二に「漸離擊筑歌、悲聲感路人」。李嶠「市」(『全唐詩』卷五九)に「漸離初擊筑、司馬正彈琴」。

●白日：輝く太陽。『楚辭』宋玉「九辯」に「白日晚晚其將入兮、明月銷鑠而滅毀」。後漢・秦嘉「贈婦詩」(『玉臺新詠』卷九)に「曖曖白日、引曜西傾」。梁・虞羲「詠霍將軍北伐」(『文選』卷二二)に「飛狐白日晚、瀚海愁陰生」。陳子昂「感遇詩三十八首」其二(『全唐詩』卷八三)に「遲遲白日晚、嫋嫋秋風生」。

●晚：日が暮れる。

18 ●縱酒：酒を思う存分飲む。痛飲する。『史記』卷八・高祖本紀に「高祖還歸、過沛、留。置酒沛宮、悉召故人父老子弟縱酒、發沛中兒得百二十人、教之歌。酒酣、高祖擊筑、自爲歌詩曰、大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉、安得猛士兮守四方」。西晉・王濬「從幸洛水餞王公歸國詩」(『晉詩』卷八)に「臨川講妙藝、縱酒釣潛鱗」。杜甫「聞官軍收河南河北」(『全唐詩』卷二二七)に「白日放歌須縱酒、青春作伴好還鄉」。

●高歌：高らかに歌う。前漢・枚乘「七發八首」(『文選』卷三四)に「高歌陳唱、萬歲無斃」。西晉・石崇「思歸歎」(『藝文類聚』卷二八・人部・遊覽)に「吹長笛兮彈五絃、高歌凌雲兮樂餘年」。李嶠「雲」(『全唐詩』卷五九)に「飛感高歌發、威加四海回」。李白「南陵別兒童入京」(『全唐詩』卷一七四)に「高歌取醉欲自慰、起舞落日爭光輝」。

●楊柳：柳の総称。「楊」は、かわやなぎ。「柳」は、しだれやなぎ。春に芽吹き、大きく広げた枝にびっしりと葉をつける。また、別れを象徴する樹木。柳の枝を折る行為が別離と関わる「折柳贈別」は南朝の梁・陳時代にほぼ定着した(向島成美『漢詩のことば』一一二・三頁。大修館書店、一九九八年)。『詩經』小雅「采薇」に「昔我往矣、楊柳依依」。後漢・張衡「歌」(『漢詩』卷六)に「浩浩陽春發、楊柳何依依」。梁・元帝「蕭繹折楊柳詩」(『藝文類聚』卷八九・木部・楊柳)に「巫山巫峽長、垂柳復垂楊。同心宜同折、故人懷故鄉。……寒夜猿鳴激、遊子淚沾裳」。また、梁・吳均「詠雪詩二首」其一(『藝文類聚』卷二・天部・雪)

に「不見楊柳春、徒看桂枝白」。劉希夷「歸山」(『全唐詩』卷八二)に「草綠山無塵、山青楊柳春」。李頎「聽安萬善吹箏策歌」(『全唐詩』卷一三三)に「變調如聞楊柳春、上林繁花照眼新」。

19 ●歡娛：にぎやかによるこびたのしむ。前漢・蘇武「詩四首」其三(『文選』卷二九)に「歡娛在今夕、嫵婉及良時」。劉宋・孝武帝劉駿「與盧陵王紹別詩」(『宋詩』卷五)に「未盡歡娛懷、已傷歧路及」。

●分散：わかれわかれになる。『春秋左氏傳』桓公五年・傳に「於是陳亂。文公子佗殺太子免而代之。公(陳の桓公)疾病而亂作、國人分散」。東晉・陶淵明「雜詩十二首」其一(『晉詩』卷一七)に「人生無根蒂、飄如陌上塵。分散逐風轉、此已非常身」。張說「餞唐州高使君」(『全唐詩』卷八七)に「百歲屢分散、歡言復幾何」。白居易「答元奉禮同宿見贈」(『全唐詩』卷四三七)に「曉鼓一聲分散去、明朝風景屬何人」。

20 ●惆悵：がっかりして元気をなくす。失意のさま。うれえ悲しむさま。『楚辭』宋玉「九辯」に「坎壈兮貧士失職而志不平、廓落兮羈旅而無友生。惆悵兮而私自憐」。後漢・張衡「四愁詩四首」其二(『文選』卷二九)に「路遠莫致倚惆悵、何爲懷憂心煩傷」。魏・阮瑀「詩二首」其二(『藝文類聚』卷二七・人部・行旅)に「置酒高堂上、友朋集光輝。念當復離別、涉路險且夷。思慮益惆悵、淚下霑裳衣」。

●驚：おどろかす。びっくりさせる。

●心神：心。精神。西晉・左思「招隱詩二首」其二(『文選』卷二二)に「前有寒泉井、聊可登心神」。賈至「自蜀奉冊命往朔方途中呈韋左相文部房尚書門下崔侍郎」(『全唐詩』卷三三五)に「崎嶇凌危棧、惴慄驚心神」。

21 ●丈夫不作兒女別、臨歧涕淚沾衣巾：「丈夫」は、一人前の男。成人した男子。「兒女」は、女やこども。「臨」は、目の前にする。「歧」は、わかれみち。「涕淚」は、なみだ。「沾」は、ぬらす。「衣巾」は、衣服とハンカチ。『叢書子』儒服に「子高遊趙。平原君客有鄒文、季節者、與子高相友善。及將還魯、詣故人訣。既畢、文、節送行。三宿、臨別、文、節流涕交頤、子高徒抗手而已。……子高曰、始吾謂此二子丈夫爾。今乃知其婦人也」。魏・曹植「贈白馬王彪」(『文選』卷二四)に「丈夫志四海、萬里猶比隣。……憂思成疾疢、無乃兒女仁」。『世說新語』方正に「周叔治作晉陵太守、周侯、仲智往別。叔治以將別、涕泗不止。仲智悲之曰、斯人乃婦女、與人別唯啼泣。便舍去」。王勃「杜少府之任蜀州」(『全

- 006 酬龐十兵曹(六・115)【4-10b】 龐十兵曹に酬ゆ
- 1 憶昔遊京華 憶う 昔 京華に遊び
 - 2 自言生羽翼 自ら言う 羽翼生ずと
 - 3 懷書訪知己 書を懷きて知己を訪ね
 - 4 末路空相識 末路 相識空し
 - 5 許國不成名 許國 名を成さず
 - 6 還家有慙色 家に還りて慙色有り
 - 7 託身從吠畝 身を託して吠畝に従い
 - 8 浪跡初自得 跡を浪にして初めて自得す
 - 9 雨澤感天時 雨沢 天時に感じ
 - 10 耕耘忘帝力 耕耘 帝力を忘る

唐詩(卷五六)に「海内存知己、天涯若比鄰。無爲在岐路、兒女共霑巾」。

●丈夫：『春秋左氏傳』哀公十一年・傳に「叔孫・武叔曰、是謂我不成丈夫也」。

古辭「隴西行」(『樂府詩集』卷三七・相和歌辭)に「健婦持門戶、一勝一丈夫」。

また、右の注の「孔叢子」、曹植詩を参照。

●兒女：古辭「東門行」(『樂府詩集』卷三七・相和歌辭)に「拔劍出門去、兒女牽衣啼」。右の注の曹植詩、王勃詩を参照。

●臨歧：劉宋・鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷一四)に「指會規翔、臨岐矩步」。梁・吳均「發湘州贈親故別詩三首」其一(『梁詩』卷一〇)に「相送出江潯、淚下沾衣襟。何用敘離別、臨歧贈好音」。岑參「送楊子」(『全唐詩』卷二〇〇)に「惜別添壺酒、臨歧贈馬鞭」。

●涕淚：後漢・桓譚「桓子新論」琴道(『全後漢文』卷一五)に「于是孟嘗君喟然太息、涕淚承睫而未下」。魏・王粲「贈蔡子篤詩」(『文選』卷二三)に「何以贈行、言授斯詩。中心孔悼、涕淚漣洏」。杜甫「上韋左相二十韻」(『全唐詩』卷二二四)に「爲公歌此曲、涕淚在衣巾」。

●衣巾：『詩經』鄭風「出其東門」篇衣襟巾、聊樂我員の鄭玄箋に「窮困不得有其妻而以衣巾言之。恩不忍斥之」。魏・繁欽「定情詩」(『玉臺新詠』卷一)に「思君卽幽房、侍寢執衣巾」。右の「涕淚」注の杜甫詩を参照。

- 11 同人洛陽至 同人 洛陽より至り
- 12 問我睢水北 我を問う 睢水の北
- 13 遂爾款津涯 遂爾 津涯に款び
- 14 淨然見胸臆 淨然 胸臆を見ず
- 15 高談懸物象 高談 物象を懸け
- 16 逸韻投翰墨 逸韻 翰墨を投ず
- 17 別岸迴無垠 別岸 迴かにして垠り無く
- 18 海鶴鳴不息 海鶴 鳴きて息まず
- 19 梁城多古意 梁城 古意多く
- 20 攜手共悽惻 手を携えて共に悽惻す
- 21 懷賢想鄒枚 賢を懷いて鄒枚を想い
- 22 登高思荊棘 高きに登りて荊棘を思ふ
- 23 世情惡疵賤 世情 疵賤を惡み
- 24 之子憐孤直 之子 孤直を憐れむ
- 25 酬贈感并深 酬贈 感并びに深く
- 26 離憂豈終極 離憂 豈に終極あらんや

【詩型】
五言古詩

【押韻】
入聲二十四職(翼・識・色・力・臆・息・惻・棘・直・極)、二十五德(得・北・墨)同用。
／平水韻：入聲十三職。

【現代語訳】
龐十兵曹に答える

- 1・2 思い出すのは、かつて花の都を訪れたとき、翼が生えてどこまでも高く飛翔できると豪語していたこと。
- 3・4 自信作を懷に私を真に理解してくれと思うていた人たちを訪ねたが、結局知り合いはできなかった。
- 5・6 一身を国に捧げようと意気込んでいたが名声を得ることはできず、郷里に帰って恥じ入るばかりであった。
- 7・8 そこで田園に身をゆだねることとし、自由気ままに暮らしてようやく

満足を得た。

9・10 恵みの雨が降ると天の正しき巡りに感謝し、畑仕事をしては天子の恩恵を忘れてしまうほど平和で安楽だ。

11・12 友人が洛陽よりやってきて、私を睢水の北のこの町に訪ねてくれた。

13・14 そうして睢水の岸辺で楽しく時を過ごし、お互い胸襟を開いて語り合う。

15・16 あなたの高尚な話は森羅万象を解き明かし、その詩の秀逸な響きは私が筆と墨を投げ出して創作をあきらめてしまうほど。

17・18 あなたを送る岸辺は遙か遠くまで限りなく続き、海鶴は鳴き止まない。

19・20 ここ梁の国の古都は昔を偲ばせる趣に満ち、手をつないで一緒に心を痛ませる。

21・22 いにしえの賢者を慕って梁の孝王に庇護された鄒陽や枚乘に思いをはせ、高いところに登ってはいばらのように行く手を遮る者たちについて考える。

23・24 世間は傷を持ち身分が低い者を嫌うのに、この人は私が孤立無援であることを不憫に思ってくれる。

25・26 あなたの詩にお答えすれば、感慨がそれとともに深まり、別れの憂いが尽きることはない。

【詩題解説】

龐十兵曹と別れるにあたり、自らの人生における蹉跎、龐十兵曹との友情、惜別の情などを歌う。「酬」は、詩を贈られたことに返礼として詩を贈る。制作時期・場所は、12「問我睢水北」、19「梁城多古意」、21「懷賢想鄒枚」から、宋中寓居の時期と考えられる。「龐十兵曹」は、未詳。劉注、孫注は、王昌齡「山中別龐十」(『全唐詩』卷一四〇)の龐十と同じ人物と推定するが、待考。「十」は、排行(従兄弟を含めての兄弟の順番)。「兵曹」は、左右衛(禁衛軍)や三府(京兆府(長安)、河南府(洛陽)、太原府)、都督府などに置かれた兵曹参軍事(『大唐六典』卷二四・三〇など)。「同」卷二四・左右衛に「兵曹掌五府外府武官之職員、凡番第上下、簿書名數。皆受而過大將軍以配焉」。

【語注】

1 ●憶昔・昔のことをおもい起こす。「憶」は、あれこれとおもいをはせる。『續安帝紀』(『藝文類聚』卷一九・人部・謳謠)に「司馬休之兄尙、爲桓玄所敗。休之奔淮泗、頗得彼之人心。從者爲之歌曰、可憐司馬公、作性甚溫良。憶昔

水邊戲、使我不能忘」。劉宋・鮑照「代少年時至衰老行」(『宋詩』卷七)に「憶昔少年時、馳逐好名晨。結友多貴門、出入富兒鄰」。

●遊：旅に出る。仕官や学問のために定住した住居を離れてよそへ行く。

●京華：花の都。西晉・曹摅「答趙景猷詩十一章」其七(『晉詩』卷八)に「濟濟京華、僞父竝湊」。劉宋・謝靈運「齋中讀書」(『文選』卷三〇)に「昔余遊京華、未嘗廢丘壑」。

2：高位高官に昇ることができるという自負を述べる。

2 ●自言：自分自身で言う。「韓非子」六反に「夫欲得力士而聽其自言、雖庸人與鳥獲不可別也」。古辭「孤兒行」(『樂府詩集』卷三八・相和歌辭)に「臘月來歸、不敢自言苦」。魏・阮籍「詠懷詩八十二首」其七九(『魏詩』卷一〇)に「林中有奇鳥、自言是鳳凰」。北齊・顏之推「神仙詩」(『北齊詩』卷二)に「紅顏侍容色、青春矜盛年。自言曉書劍、不得學神仙」。

●羽翼：はねとつばさ。『禮記』樂記に「然後草木茂、區萌達、羽翼奮、角觝生、蟄蟲昭蘇」。漢書卷四〇・張良傳に「(上)〔劉邦〕歌曰、鴻鶴高飛、一舉千里。羽翼以就、橫絕四海」。魏・曹丕「遊仙詩」(『藝文類聚』卷七八・靈異部・仙道)に「服藥四五日、曾臆生羽翼。輕舉生風雲、倏忽行萬億」。駱賓王「帝京篇」(『全唐詩』卷七七)に「倏忽搏風生羽翼、須臾失浪委泥沙」。

3・6：『史記』卷六九・蘇秦傳(『蘇秦』)出游數歲、大困而歸。兄弟嫂妹妻妾竊皆笑之曰、周人之俗、治產業、力工商、逐什二以爲務。今子釋本而事口舌、困不亦宜乎。蘇秦聞之而慙、自傷、「戰國策」秦一(『蘇秦』)說秦王書十上而說不行。黑貂之裘弊、黃金百斤盡、資用乏絕、去秦而歸。……歸至家、妻不下紕、嫂不爲炊、父母不與言」がおおもととなっていると考えられる。

3 ●懷書：書物を懐に入れる。『後漢書』卷八〇上・文苑列傳・崔琦傳に「梁、冀遂令刺客陰求殺之。客見琦耕於陌上、懷書一卷、息輒偃而詠之。盧照鄰「同臨津紀明府孤雁」(『全唐詩』卷四一)に「避繳風霜勁、懷書道路長」。盧僎「途中口號」(『全唐詩』卷九九)に「抱玉三朝楚、懷書十上秦」。ここは、科擧の試験に先立ち、自分の詩文を有力者や試験官に届けて、自身の評判を高めたリ推挙を得たりする「行卷」のようなことであろうか。

●知己：003「題李別駕壁」(二・128)の1「知己」注を参照。また、杜甫「湖中送敬十使君適廣陵」(『全唐詩』卷二二三)に「騫騰訪知己、淮海莫蹉跎」。

4 ●末路：前途がなく行き詰まった道。高適094「宋中送族姪式顏時張大夫貶括

州使人召式顔遂有此作」(九〇・018)に「當時有勳業、末路遭讒毀。儲光羲」雜詩二首」其一(『全唐詩』卷一三六)に「混沌本無象、末路多事非」。徐浩「寶林寺作」(『全唐詩』卷二一五)に「揆余久纓弁、末路遭遭遣」。

●空：なにもない。

●相識：知り合い。『春秋左氏傳』襄公二十九年・傳に「季札」聘於鄭、見子產。如舊相識。與之編帶」。劉宋・鮑照「擬古」(『玉臺新詠』卷四)に「去歲征人還、流傳舊相識」。梁・吳均「初至壽春作詩」(『梁詩』卷一〇)に「北州少知舊、南陽寡相識」。

5 ●許國：身を捨てて国のために尽くす。『晉書』卷七七・陸玩傳に「(陸玩)重復自陳曰、……誠以身許國、義忘曲讓」。南齊・孔稚珪「白馬篇」首其二(『樂府詩集』卷六三・雜曲歌辭)に「本持身許國、況復武功彰」。宋之問「使往天平軍馬約與陳子昂新鄉爲期及還而不相遇」(『全唐詩』卷五二)に「知君心許國、不是愛封侯」。

●成名：名声を得る。『論語』子罕に「達巷黨人曰、大哉。孔子博學而無所成名」。前漢・李陵「荅蘇武書」(『文選』卷四一)に「男兒生以不成名、死則葬蠻夷中」。西晉・潘尼「贈司空掾安仁詩十章」其三(『晉詩』卷八)に「表奇髻鬣、成名弱冠」。張說「雜詩四首」其四(『全唐詩』卷八六)に「應將無住法、修到不成名」。杜甫「乾元中寓居同谷縣作歌七首」其七(『全唐詩』卷二一八)に「男兒生不成名身已老、三年飢走荒山道」。

6 ●還家：郷里の家に帰る。後漢・順帝劉保「詔南陽太守二年」(『全後漢文』卷七)に「詔書告南陽太守、五官中郎將樊英。……今以英爲光祿大夫、賜還家、在所縣給穀千斛」。古詩爲焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に「卿但暫還家、吾今且報府」。孟浩然「南歸阻雪」(『全唐詩』卷一五九)に「十上恥還家、裴回守歸路」。王維「送丘爲落第歸江東」(『全唐詩』卷一二六)に「爲客黃金盡、還家白髮新」。

●慚色：恥じている顔色。恥じ入る様子。『說苑』尊賢に「於是宗衛面有慚色、逡巡避席而謝曰、此衛之過也」。梁・施榮泰「雜詩」(『玉臺新詠』卷四)に「妝成桃毀紅、黛起草慚色」。杜甫「過郭代公故宅」(『全唐詩』卷二二〇)に「羣公有慚色、王室無削弱」。

7 ●託身：身をゆだねる。身を任せる。前漢・司馬相如「美人賦」(『初學記』卷一九・人部・美婦人)に「日既暮兮華色衰、敢託身兮長自思」。魏・繁欽「詠蕙詩」

(『藝文類聚』卷八一・藥香草部・蕙)に「蕙草生山北、託身失所依」。李頎「不調歸東川別業」(『全唐詩』卷一三三)に「寸祿言可取、託身將見遺」。

●從：〜に従う。あるいは、助字の「〜」にか。

●賦畝：田畑。『禮記』仲尼燕居に「子曰、慎聽之。女三人者。吾語女禮。猶有九焉。大饗有四焉。苟知此矣、雖在賦畝之中、事之、聖人已」。『後漢書』卷八三・逸民列傳に「然觀其甘心賦畝之中、憔悴江海之上、豈必親魚鳥樂林草哉、亦云性分所至而已」。杜甫「向夕」(『全唐詩』卷二三〇)に「賦畝孤城外、江村亂水中」。唐彥謙「和陶淵明貧士詩七首」其五(『全唐詩』卷六七)に「古人重賦畝、有祿不待干」。

8 ●浪跡：世俗の儀礼にとらわれず自由気ままに振る舞う。東晉・張翼「詠懷詩三首」其三(『晉詩』卷二二)に「遭動透浪迹、遇靖恬夷性」。梁・江淹「雜體詩三十首」其一八「張廷尉」雜述・綽(『文選』卷三一)に「浪迹無蚩妍、然後君子道」李善注「浪、猶放也。妍蚩、猶美惡也。戴逵栖林賦曰、浪迹潁澗、棲景箕岑」。

●初：やつと〜したばかり。はじめて。

●自得：その状態に満足して、楽しむ。『莊子』大宗師に「古之真人、……過而弗悔、當而不自得也」。東晉・陶淵明「始作鎮軍參軍經曲阿作」(『文選』卷二六)に「被褐欣自得、屢空常晏如」。張九齡「春江晚景」(『全唐詩』卷四八)に「興來祇自得、佳氣莫能傳」。高適¹²⁰「同羣公秋登琴臺」(一二六・107)に「物性各自得、我心在漁樵」。あるいは、真理を心にさるという意味か。『孟子』滕文公上に「孟子曰、……放勳曰、勞之來之、匡之直之、輔之翼之、使自得之、又從而振德之」。魏・嵇康「贈秀才入軍五首」其四(『文選』卷二四)に「俯仰自得、游心泰玄」。王維「戲贈張五弟諱三首」其一(『全唐詩』卷一二五)に「對君忽自得、浮念不煩遣」。

9 ●雨澤：恵みの雨。『禮記』禮器に「故作大事、必順天時。爲朝夕必放於日月。爲高必因丘陵。爲下必因川澤。是故天時雨澤、君子達臺臺焉」。魏・曹操「對酒」(『樂府詩集』卷二七・相和歌辭)に「雨澤如此、百穀用成」。元稹「樂府古題」「出門行」(『全唐詩』卷四一八)に「遣充行雨神、雨澤隨客意」。

●感：ありがたく思う。感謝する。

●天時：天が時間正しく運行すること。『周禮』冬官・考工記に「天有時以生、有時以殺。草木有時以生、有時以死。石有時以泐。水有時以凝、有時以澤」。

此天時也。儲光義「田家即事」(『全唐詩』卷一三七)に「老農要看此、貴不違天時」。白居易「桐花」(『全唐詩』卷四三四)に「地氣反寒暄、天時倒生殺」。

10 ● 耕耘：田畑を耕し、草を取る。畑仕事をしする。呂氏春秋「孟夏紀・尊師に」之田野、力耕耘、事五穀。魏・曹植「豫章行(二首)」其一(『藝文類聚』卷四一・樂部・論樂)に「虞舜不逢堯、耕耘處中田」。常建「鄂渚招王昌齡張慎」(『全唐詩』卷一四四)に「有時荷鋤犁、曠野自耕耘」。

● 帝力：帝王の力。天子の恩徳。それを「忘」れるのは、天下太平を意味する。『初學記』卷九・帝王部・總敘帝王「擊壤 鼓腹」に「史曰、堯時有老父者。擊壤而嬉於路。言曰、我擊井而飲、耕田而食、帝力何有於我哉」。『帝王世紀』(『藝文類聚』卷一一・帝王部・帝堯陶唐氏)に「有五十老人、擊壤於道。觀者歎曰、大哉、帝之徳也。老人曰、吾日出而作、日入而息。擊井而飲、耕田而食。帝何力於我哉」。蘇味道「詠井」(『全唐詩』卷六五)に「帝力終何有、機心庶此忘」。

陳子昂「爲赤縣父老勸封禪表」(『全唐文』卷二一〇)に「臣等叨願堯封、久念帝力」。高適126「別楊山人」(一三四・131)に「擊井耕田不我招、知君以此忘帝力」。權徳輿「郊居歲暮因書所懷」(『全唐詩』卷三三〇)に「返耕忘帝力、樂道疏代累」。

11 ● 同人：志を同じくする人。友人。『易經』同人「同人于野、亨。利涉大川。利君子貞」の「同人」は、人と仲良くする。こと同様の意味では、「抱朴子」内篇・祛惑に「爲同人遍說所歷、正爾、欲令人計合之、已數百歲人也」。席元明「三月三日宴王明府山亭」(『全唐詩』卷七二)に「同人聚飲、千載神交」。李頎「春送從叔遊襄陽」(『全唐詩』卷一三三)に「同人應館穀、刺史在郊迎」。高適101「宋中別李八」(一一二・086)に「將趨倚門望、還念同人別」、053「酬別薛三蔡大留簡韓十四主簿」(五〇・088)に「同人久離別、失路還相見」。

● 洛陽至：洛陽からやってくる。『漢書』卷一下・高帝紀に「(八年)九月、(高帝)行自雒陽至、淮南王、梁王、趙王、楚王皆從」。『晉陽秋』(『藝文類聚』卷五〇・職官部・刺史)に「胡質爲荊州刺史。子威、自洛陽至荊州定省。家貧、自驅驢單行」。

12 ● 問我：私を訪ねる。高適029「贈別晉三處士」(二三・140)に「有人家住清河源、渡河問我遊梁園」。杜甫「春日江村五首」其四(『全唐詩』卷二二八)に「鄰家送魚鱉、問我數能來」。白居易「懶放二首呈劉夢得吳方之」其二(『全唐詩』卷四五二)に「除卻劉與吳、何人來問我」。

● 睢水：宋州宋城県の南を流れる河川。つまり「睢水北」は、高適が寓居す

る宋城。『元和郡縣圖志』卷七・河南道・宋州・宋城縣に「睢水、西南自寧陵縣界流入」。『史記』卷七・項羽本紀に「漢卒皆南走山、楚又追擊至靈壁東睢水上。漢軍卻、爲楚所擠、多殺、漢卒十餘萬人皆入睢水、睢水爲之不流」。李頎「贈別高三十五」(『全唐詩』卷一三三)に「寄跡棲霞山、蓬頭睢水涘」。顧況「行路難三首」其三(『全唐詩』卷二六五)に「睢水英雄多血刃、建章宮闕成煨燼」。なお、高適008「單父逢鄧司倉覆倉庫因而有贈」(九・068)に「匹馬度睢水、清風何激揚」、031「別孫訢」(二六・181)に「誰念無知己、年年睢水流」、123「別李景參」(一三一・133)に「孟諸薄暮涼風起、歸客相逢渡睢水」、178「答侯少府」(二〇二・013)に「漆園多喬木、睢水清粼粼」。

13 ● 遂爾：かくして。そのまま。『晉書』卷六六・陶侃傳に「陶侃」又上表遜位曰、……不圖所患、遂爾綿篤、伏枕感結、情不自勝」。

● 款：うちとける。楽しく交遊する。

● 津涯：渡し場と岸辺。『書經』商書・微子に「微子若曰、……若涉大水、其無津涯。殷遂喪、越至于今」。ちなみに、周の成王は、殷の紂王の異母兄「微子」を宋に封じた。白居易「和微之詩二十三首」其一「和新樓北園偶集從孫公度周巡官韓秀才盧秀才范處士小飲鄭侍御判官周劉二從事皆先歸」(『全唐詩』卷四四五)に「醉鄉得道路、狂海無津涯」。盧仝「蜻蜒歌」(『全唐詩』卷三八九)に「黃河中流日影斜、水天一色無津涯」。

14 ● 淨然：清らかでくもりがないさまを意味するのであろう。

● 見：あらわす。ここは、二人がお互いに「胸臆」をあらわしたと解する。

● 胸臆：むね。胸中。心の中の思い。『列子』湯問に「泰豆歎曰、……推於御也、齊輯乎轡銜之際、而急緩乎臂吻之和、正度乎胸臆之中、而執節乎掌握之間」。『後漢書』卷八四・列女傳・陳留董祀妻(「蔡琰」傳)に「蔡琰」後感傷亂離、追懷悲憤、作詩二章。其辭(二首の其一)曰、……念我出腹子、匈(胸)に同じ臆爲摧敗」。西晉・陸機「文賦」(『文選』卷一七)に「思風發於匈臆、言泉流於唇齒」。梁・劉孝綽「望月有所思詩」(『藝文類聚』卷一・天部・月)に「如何當此時、懷情滿胸臆」。

15 ● 高談：高尚な話。活発な話でもあるのだらう。『後漢書』卷二八上・馮衍傳に「衍乃遣(田)邑書曰、……上不損剖符之責、下足救老幼之命、申眉高談、無愧天下」。魏・曹丕「與朝歌令吳質書」(『文選』卷四二)に「高談娛心、哀箏順耳」。西晉・陸機「擬古詩十二首」其二「擬今日良宴會」(『文選』卷三〇)に「高談一何

綺、蔚若朝霞爛。梁・江淹「雜體詩三十首」其一四「張黃門 苦雨 協」〔文選〕卷三二〕に「高談玩四時、素居慕疇侶」。

●懸物象：よくわからない。「物象」は、高適詩においては、他の用例である216「陪賓侍御靈雲南亭宴詩」〔二五〇・196〕「連唱波瀾動、冥搜物象開」、228「登廣陵棲靈寺塔」〔二六六・098〕「城池滿窗下、物象歸掌內」をあわせ考えると、天地万物、森羅万象を意味しているように思われる。また、『春秋左氏傳』僖公十五年・傳に「韓簡侍曰、龜、象也。筮、數也。物生而後有象。象而後有滋。滋而後有數。孔穎達疏」物既生訖而後有其形象。既爲形象而後滋多。滋多而後始有頭數。宋之問「景龍四年春祠海」〔全唐詩〕卷五二〕に「暖氣物象來、周遊晦明互」。孟郊「贈鄭夫子魴」〔全唐詩〕卷三七七〕に「天地入胸臆、吁嗟生風雷。文章得其微、物象由我裁」。「懸物象」は、天地万物、森羅万象をつりさげている、つまり天地万物、森羅万象を解き明かすように深遠である、という意味であるうか。次の用例が参考になるか。『易經』繫辭上に「縣象著明、莫大乎日月」。李白「江上吟」〔全唐詩〕卷一六六〕に「屈平詞賦懸日月、楚王臺榭空山丘」。高適129「同觀陳十六史興碑」〔一三七・031〕に「新碑亦崔嵬、佳句懸日月」。

16 ●逸韻：すぐれた詩歌のひびき。東晉・庾亮「翟徵君贊」〔藝文類聚〕卷三六・人部・隱逸に「晉徵士南陽翟君、稟逸韻於天陶、含沖氣於特秀、……其辭曰、卓哉先生、逸韻遐超」。李白「遊水西簡鄭明府」〔全唐詩〕卷一七九〕に「鄭公詩人秀、逸韻宏寥廓」。

●投翰墨：「翰墨」は、筆と墨。詩文。前漢・揚雄「荅劉歆書」〔全漢文〕卷五二〕に「但言詞博覽翰墨爲事、誠欲崇而就之。不可以遺、不可以忘」。魏・曹丕「典論論文」〔文選〕卷五二〕に「是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍、不假良史之辭、不託飛馳之勢、而聲名自傳於後」。西晉・潘岳「悼亡詩三首」其一〔文選〕卷二三〕に「帷屏無髣髴、翰墨有餘跡」。劉宋・謝瞻「張子房詩」〔文選〕卷二二〕に「濟濟屬車士、粲粲翰墨場」。「投翰墨」は、こころは、高適が筆と墨を投げ出してしまおう、つまり詩文を書くのをやめてしまおうという、龐十兵曹の詩が素晴らしい、という意味であろう。魏・劉楨「公讞詩」〔文選〕卷二〇〕に「生平未始聞、歌之安能詳。投翰長歎息、綺麗不可忘」。宋書「卷四三・傅亮傳」に「少帝失德、(傅亮)内懷憂懼、作感物賦以寄意焉。其辭曰、……豈知反之徒爾、喟投翰以增情」。

17 ●別岸：別れの岸辺。駱賓王「送劉少府遊越州」〔全唐詩〕卷七八〕に「離亭

分鶴蓋、別岸指龍川。李群玉「將之吳越留別坐中文酒諸侶」〔全唐詩〕卷五六八〕に「霜剪別岸柳、香枯北池蓮」。

●迥：遙かに遠い。

●無垠：「垠」は、はて。かぎり。『楚辭』屈原「九章」悲回風に「穆眇眇之無垠兮、莽芒芒之無儀」。西晉・張華「晉宗親會歌」〔樂府詩集〕卷一三・燕射歌辭に「德教加四海、敦睦被無垠」。隋・盧思道「升天行」〔樂府詩集〕卷六三・雜曲歌辭に「玄洲望不極、赤野曉無垠」。

18 ●海鶴：うみづる。実態は未詳。あるいは、うみかもめ、かわかもめのたぐいか。劉宋・鮑照「秋夜詩二首」其二〔宋詩〕卷九〕に「霽旦見雲峯、風夜聞海鶴」。王昌齡「送劉春虛歸取宏詞解」〔全唐詩〕卷一四〇〕に「太清聞海鶴、遊子引鄉阿」。また、「鶴」は、親しい者との別れを象徴する鳥。『樂府詩集』卷五八・琴曲歌辭「別鶴操」の解題に「崔豹古今注曰、別鶴操、商陵牧子所作也。娶妻五年而無子。父兄將爲之改娶。妻聞之、中夜起、倚戶而悲嘯。牧子聞之、愴然而悲、乃援琴而歌。後人因爲樂章焉」。梁・簡文帝蕭綱「傷離新體詩」〔藝文類聚〕卷二九・人部・別〕に「盤中浮蟻不能酌、琴聞玉微調別鶴。別鶴千里別離聲、絃調軫急心自驚」。陳・江總「別袁昌州詩二首」其二〔藝文類聚〕卷二九・人部・別〕に「別鶴聲聲遠、愁雲處處同」。

●鳴不息：鳴きやまない。劉宋・鮑照「行路難十八首」其七〔樂府詩集〕卷七〇・雜曲歌辭〕に「中有一鳥名杜鵑、言是古時蜀帝魂。聲音哀苦鳴不息、羽毛憔悴似人髭」。元稹「寄吳士矩端公五十韻」〔全唐詩〕卷四〇一〕に「邊霜颯然降、戰馬鳴不息」。

19 ●22：005「別韋參軍」〔四・122〕の11「免苑」注に記したように、前漢の梁の孝王は四方から豪傑を招き、遊説の士が訪れ、またそこには司馬相如、鄒陽、枚乘、嚴忌らすぐれた文学者がいた。その故事をふまえて、この四句は、高適と龐十兵曹には孝王のような庇護者がいないことをいっているのであろう。

19 ●梁城：漢の梁国の都、睢陽県。高適が寓居する宋州宋城縣。005「別韋參軍」〔四・122〕の10「梁宋」注の「元和郡縣圖志」を参照。また、『史記』卷一〇六・吳王濞傳に「初、吳王之度淮、與楚王遂西敗棘壁、乘勝前、銳甚。梁孝王恐、遣六將軍擊吳、又敗梁兩將、士卒皆還走梁。……吳兵欲西、梁城守堅、不敢西」。隋・盧思道「遊梁城詩」〔隋詩〕卷一〕に「揚鑣歷汴浦、迴扈入梁墟。漢藩文雅地、清塵暖有餘」。李嘉祐「送兗州杜別駕之任」〔全唐詩〕卷二〇六〕に「更有堪悲

處、梁城春日斜」。錢起「送田倉曹歸觀」(『全唐詩』卷二二七)に「青絲絡驄馬、去府望梁城」。

●古意：古めかしい趣。古を思わせる雰囲気。「水經注」卷一〇・濁漳水に「又東北至樂成陵縣、別出北」注「今城中有故池、方八十步、舊引衡水北入城注池。池北對層臺、基隍荒蕪、示存古意也」。『隋書』卷七〇・李密傳に「經數月、密鬱鬱不得志、爲五言詩曰、……霑襟何所爲、悵然懷古意」。陳子昂「酬李參軍崇嗣旅館見贈」(『全唐詩』卷八三)に「摧藏多古意、歷覽備艱辛」。杜甫「登兗州城樓」(『全唐詩』卷二二四)に「從來多古意、臨眺獨躊躇」。

20 ●攜手：手をたずさえる。親愛の情を示す行為。004「贈別褚山人」(三・184)の1「攜手」注を参照。

●悽惻：悲しみにいたむ。『漢書』卷七四・丙吉傳に「元帝時、長安士伍尊上書言、……是時治獄使者丙吉見皇曾孫遭離無辜、吉仁心感動、涕泣悽惻、選擇復作胡組養視皇孫、吉常從」。西晉・陸機「赴洛二首」其二(『文選』卷二六)に「載離多悲心、感物情悽惻」。梁・江淹「別賦」(『文選』卷一六)に「是以行子腸斷、百感悽惻」。杜甫「別唐十五誠因寄禮部賈侍郎」(『全唐詩』卷二二〇)に「歌罷兩悽惻、六龍忽蹉跎」。

21 ●懷賢：賢者を思い慕う。西晉・張載「贈司隸傳成詩五章」其三(『晉詩』卷七)に「嗟我昏矇、懷賢仰風」。劉宋・謝靈運「初發石首城」(『文選』卷二六)に「欽聖若且暮、懷賢亦悽其」。祖詠「酬汴州李別駕贈」(『全唐詩』卷一三一)に「歎逝逢三演、懷賢憶四眞」。

●想：おもいやる。しのぶ。

●鄒枚：前漢の梁の孝王のもとに集まった鄒陽と枚乘。005「別韋參軍」(四・122)の11「免苑」注の『史記』梁孝王世家、司馬相如傳を参照。また、『史記』卷八三・鄒陽傳に「鄒陽者、齊人也。游於梁、與故吳人莊忌夫子、淮陰枚生之徒交」。司馬貞索隱「名乘、字叔」。劉宋・謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」序(『文選』卷三〇)に「楚襄王時有宋玉、唐、景。梁孝王時有鄒、枚、嚴、馬。遊者美矣、而其主不文」。『南齊書』卷三九・劉瓛傳に「瓛與張融、王思遠書曰、……以古之王侯大人、或以此延四方之士、……羨鄒枚而遊梁、吾非敢叨夫曩賢、庶欲從九九之遺蹤」。隋・柳登「奉和晚日楊子江應制詩」(『隋詩』卷五)に「空美鄒枚侶、終謝淵雲筆」。張說「藥園宴武輅沙將軍賦得洛字」(『全唐詩』卷八六)に「文學引鄒枚、歌鐘陳衛霍」。

22 ●登高：高いところに登る。『禮記』曲禮上に「爲人子者、……不登高、不臨深」。『說苑』指武に「孔子北遊、東上農山、子路、子貢、顏淵從焉。孔子喟然歎曰、登高望下、使人心悲」。『後漢書』卷八四・列女傳・陳留董祀妻(蔡琰)傳に「蔡琰」後感傷亂離、追懷悲憤、作詩二章。其辭(二首の其二)曰、……登高遠眺望、魂神忽飛逝。「子夜四時歌七十五首」秋歌十八首「其九」樂府詩集「卷四四・清商曲辭」に「登高去來雁、惆悵客心傷」。

●思：考える。

●荊棘：いばら。『春秋左氏傳』襄公十四年傳に「范宣子親數諸朝曰、……乃祖吾離被苦蓋、蒙荊棘、以來歸我先君」。『楚辭』前漢・東方朔「七諫」「怨思」に「行明白而曰黑兮、荊棘聚而成林」王逸注「荊棘多刺、以喻讒賊。言已修行清白、皎然日明、而讒人聚而蔽之謂之暗昧、使不得進也」。魏・曹丕「於黎陽作詩」(四首)「其四」(『藝文類聚』卷五九・武部・戰伐)に「荊棘繞蕃叢生、南望果園青青」。東晉・陶淵明「詠三良詩」(『晉詩』卷一六)に「荊棘籠高墳、黃鳥聲正悲」。ここはおそらく、上句21の梁の孝王に庇護された「鄒枚」との対応から、自分たちの前途に立ちはだかる者たちを象徴するのだろう。

23 ●世情：世俗的な感情。俗人の感情。西晉・陸機「文賦」(『文選』卷一七)に「練世情之常尤、識前脩之所淑」。後秦・釋道恆「釋駁論」(『全晉文』卷一六三)に「名位財色、世情之所重」。陳・後主陳叔寶「獨酌謠四首」其二(『樂府詩集』卷八七・雜歌謠辭)に「逍遙自可樂、世語世情哉」。高適010「宋中別李八」(二・086)に「世情薄疵賤、夫子懷賢哲」。劉長卿「送元八遊汝南」(『全唐詩』卷一五〇)に「世情薄恩義、俗態輕窮厄」。杜甫「佳人」(『全唐詩』卷二一八)に「世情惡衰歇、萬事隨轉燭」。

●惡：嫌う。

●疵賤：欠点を持ち、身分が低い。梁・范雲「贈張徐州稷」(『文選』卷二六)に「物情棄疵賤、何獨顧衡闈」。張九齡「感遇十二首」其六(『全唐詩』卷四七)に「貴人棄疵賤、下士嘗殷憂」。右の「世情」注の高適詩を参照。

24 ●之子：この人。特定の男性または女性を、親しみを込めて呼ぶ。『詩經』小雅「鴻鴈」に「之子于征、劬勞于野」。魏・曹植「雜詩六首」其一(『文選』卷二九)に「之子在萬里、江湖迴且深」。梁・蕭琛「別詩」(『藝文類聚』卷二九・人部・別)に「之子兩特達、伊子日盤桓」。

●孤直：ぼつんとまっすぐ立つ。孤高で正直である。『北齊書』卷一五・庫狄士

文傳に「士文性孤直、雖隣里至親、莫與通狎」。劉希夷「孤松篇」(『全唐詩』卷八二)に「青青好顔色、落落任孤直」。崔融「西征軍行遇風」(『全唐詩』卷六八)に「夙齡慕忠義、雅尚存孤直」。

25 ●酬贈：贈られた詩に答えて詩を贈る。李白「酬王補闕惠翼莊廟宋丞泚贈別」(『全唐詩』卷一七八)に「酬贈非炯誠、永言銘佩紳」。姚合「和太僕田卿酬殷堯藩侍御見寄」(『全唐詩』卷五〇一)に「往還知分熟、酬贈思同新」。

●并：ともに。ならびに。それにまた。

25b 「酬」(高適の詩)と「贈」(龐十兵曹の詩)がともに感慨深いとも読めるか。

26 ●離憂：別れの憂い。李百藥「送別」(『全唐詩』卷四三)に「眷言一杯酒、悽愴起離憂」。盧照鄰「送鄭司倉入蜀」(『全唐詩』卷四二)に「離人丹水北、遊客錦城東。別意還無已、離憂自不窮」。高適「寄孟五」(八〇・〇三〇)に「秋風落窮巷、離憂兼暮蟬」。095「又送族姪式顔」(九一・〇一九)に「我今行山東、離憂不能已」。124「漣上別王秀才」(一一三・〇三四)に「暮帆使人感、去鳥兼離憂。行矣當自愛、壯年莫悠悠」。137「途中寄徐錄事」(一四七・179)に「離憂不堪比、旅館復何如」。160「留別鄭三章九兼洛下諸公」(一七九・126)に「遠路鳴蟬秋興發、華堂美酒離憂銷」。178「答侯少府」(二〇二・〇一三)に「心事正堪盡、離憂寧太頻」。

●終極：おわり。果て。『楚辭』屈原「遠遊」に「音樂博衍無終極兮、焉乃逝以徘徊」。古辭「君馬黃」(『樂府詩集』卷一六、鼓吹曲辭「漢鏡歌」)に「佳人歸以北、駕車馳馬、佳人安終極」。魏・曹植「贈白馬王彪」(『文選』卷二四)に「踟躕亦何留、相思無終極」。高適「漣上別王秀才」(一一三・〇三四)に「贈言豈終極、慎勿滯滄洲」。杜甫「哀江頭」(『全唐詩』卷二二六)に「人生有情淚霑臆、江水江花豈終極」。

007 過廬明府有贈(八・066)【3-14a】 廬明府に過りて贈る有り

- 1 良吏不易得 良吏 得易からず
- 2 古人今可傳 古人 今に伝う可し
- 3 靜然本諸己 靜然 諸れを己に本づけ
- 4 以此知其賢 此れを以て其の賢を知る
- 5 我行挹高風 我が行 高風に挹し

- 6 羨爾兼少年 爾の兼ねて少年なるを羨む
- 7 胸懷豁清夜 胸懷 清夜に豁き
- 8 史漢如流泉 史漢 流泉の如し
- 9 明日復行春 明日復た春を行く
- 10 逶迤出郊壇 逶迤 郊壇に出ず
- 11 登高見百里 高きに登りて百里を見れば
- 12 桑野鬱芊芊 桑野 鬱として芊芊たり
- 13 時平俯鵲巢 時平らかにして鵲巢を俯し
- 14 歲熟多人煙 歲熟して人煙多し
- 15 奸猾唯閉戶 奸猾 唯だ戸を閉め
- 16 逃亡歸種田 逃亡 歸りて田に種う
- 17 迴車自郭南 車を迴らして郭南自りすれば
- 18 老幼滿馬前 老幼 馬前に滿つ
- 19 皆賀蠶農至 皆賀す 蚕農至り
- 20 而無徭役牽 而して徭役の牽く無きを
- 21 君觀黎庶心 君は觀る 黎庶の心
- 22 撫之誠萬全 之を撫すること誠に万全なり
- 23 何幸逢大道 何ぞ幸いなる 大道に逢う
- 24 願言烹小鮮 願いて言に小鮮を烹んことを
- 25 誰能奏明主 誰か能く 明主に奏し
- 26 一試武城弦 一たび武城の弦を試みん

【詩型】
五言古詩

【押韻】
上平二十五寒(壇)、下平一先(賢・年・芊・煙・田・前・牽・弦)、下平二仙(傳・泉・全・鮮)通押。下平一先と下平二仙は、同用。／平水韻：上平十四寒、下平一先。

【現代語訳】
廬明府を訪ねて詩を贈る
1・2 優れた役人は得がたいものであり、だからこそいにしえの良い役人は今でもその名を伝えている。

- 3・4 君は冷静に自らの良識に従って政治を行い、そのことよって君の能力が知られる。
- 5・6 私は君のもとにやってきて高尚な風格に感銘を受け、加えて君が若いことをうらやましく思う。
- 7・8 爽やかに静かな夜に君は胸襟を開き、『史記』や『漢書』について西晋の博学、張華の如く湧き出る泉のようによどみなく論ずる。
- 9・10 明日また君は春の視察に向かい、長々と続く行列が町の南の祭壇に出て行く。
- 11・12 高いところに登り県内を見渡すと、桑林がこんもり青々と茂っている。
- 13・14 世の中は平和で万物が調和し、かささぎの巢も低いところにかかるので俯きながらでも探すことができ、豊作で民の家々から炊事の煙がいくつも立ちのぼる。
- 15・16 ずる賢いやつらはひたすら家に閉じこもり、逃亡していた者は帰って農作をしている。
- 17・18 君が馬車の向きを変えて町の南から帰れば、老人と子どもたちが馬の前に満ちあふれる。
- 19・20 皆が農作と養蚕の時節が到来し、そして徭役に連れて行かれないことをお祝いする。
- 21・22 君は人々の心情を把握し、実に丁寧にとりひとり彼らをいたわる。
- 23・24 なんとも幸せなことに君は大いなる道が行われる世に出会った。だから私は君が煩雑なまつりごとをしないよう強く期待する。
- 25・26 誰か聡明な陛下にお伝えし、正式な礼楽で小さな武城の町を治めた子游の如き君を国政で用いてみることはできないものか。

【詩題解説】

盧明府を訪れ、彼とその政治を賛美した作品。制作時期場所は、未詳。『論語』陽貨の孔子と子游の故事をふまえる26「一試武城弦」に武城(山東省臨沂市費県の南西)という地名が見えるが、制作場所と関わるかは判断できない。「過は、訪れる。盧明府は、未詳。『明府』は、県令。『容齋隨筆』卷一・贊公少公に「唐人呼縣令爲明府、丞爲贊府、尉爲少府。」「有贈」は、贈る。贈りものをする。ここは、詩を贈る。梁・王僧孺爲人有贈(『玉臺新詠』卷六)。李白「聞謝楊兒吟猛虎詞因此有贈」(『全唐詩』卷一七〇)。高適008「單父逢鄧司倉覆倉庫因而有贈」(九〇6)。

【語注】

- 1 ●良吏：有能な役人。『漢書』卷四九・鼂錯傳に「錯復言、……雖有材力、不得良吏、猶亡功也」。劉宋・謝靈運「遊嶺門山詩」(『宋詩』卷二)に「西京誰修政、龔汲稱良吏」。李華「詠史十一首」其四(『全唐詩』卷一五三)に「如何得良吏、一爲制方圓」。
- 不易得：得がたい。『論語』泰伯に「子曰、三年學、不至於穀、不易得也」。李白「贈從弟宣州長史昭」(『全唐詩』卷一七一)に「知音不易得、撫劍增感慨」。杜甫「醉歌行贈公安顏少府請顧八題壁」(『全唐詩』卷二二三)に「神仙中人不易得、顏氏之子才孤標」。
- 2 ●古人：昔の人。『詩經』邶風「綠衣」に「我思古人、俾無訛兮」。古辭・本辭「滿歌行」(『樂府詩集』卷四三・相和歌辭)に「禍福無形、惟念古人、遜位躬耕」。包融「阮公嘯臺」(『全唐詩』卷一一四)に「傳是古人跡、阮公長嘯處」。ここは、いにしえの良吏。
- 可傳：伝えることができる。『孟子』離婁下に「孟子曰、……舜爲法於天下、可傳於後世、我由未免爲鄉人也」。東晉・王珣「歌太宗簡文皇帝」(『樂府詩集』卷八・郊廟歌辭)に「易而有親、簡而可傳」。梁・江淹「雜三言五首」其二「訪道經」(『梁詩』卷四)に「茲道兮可傳、可傳兮皓然」。
- 3 ●靜然：物靜かで落ち着いているさま。『三國志』卷四二・蜀書・郤正傳に「郤正」依則先儒、假文見意、號曰釋議、其文繼於崔駰達旨。其辭曰、……余實不能齊技於數子、故乃靜然守己而自寧。劉希夷「謁諸葛祠」(『全唐詩續拾』卷七)に「靜然想英姿、孤懷亦差慟」。高適120「同羣公秋登琴臺」(一二六・107)に「靜然顧遺塵、千載如昨朝」。白居易「詠興五首」其二「出府歸吾廬」(『全唐詩』卷四五二)に「出府歸吾廬、靜然安且逸」。
- 本諸：「本」は、基礎を置く。『禮記』中庸に「子曰、……故君子之道、本諸身。●諸己：自分自身に。『論語』衛靈公に「子曰、君子求諸己、小人求諸人」。魏・嵇康「答二郭詩三首」其三(『魏詩』卷九)に「至人存諸己、隱璞樂玄虛。劉宋・何承天「石流篇」(『樂府詩集』卷一九・鼓吹曲辭)に「古之爲仁、自求諸己」。
- 4 ●其賢：その賢さ。『春秋』左氏傳「昭公元年・傳」(『趙孟』)乃請諸楚曰、……魯叔孫約可謂能矣。請免之以靖能者。子會而赦有罪、又賞其賢、諸侯其誰不欣焉、望楚而歸之。』『史記』卷五・秦本紀に「百里奚讓曰、……再用其言、得脫、一不用、及虞君難。是以知其賢」。魏・曹植「精微篇」(『樂府詩集』卷五三・舞

曲歌辭に「河激奏中流、簡子知其賢」。西晉・盧諶「覽古」(『文選』卷二二)に「簡生在下位、繆子稱其賢」。

5 ●我行：我が行旅。『詩經』小雅「六月」に「來歸自鎬、我行永久」。魏・阮瑀「詩」(一首)其二(『藝文類聚』卷二七・人部・行旅)に「我行自凜秋、季冬乃來歸」。沈佺期「過蜀龍門」(『全唐詩』卷九五)に「我行當季月、煙景共春融」。高適⁰⁵⁵「贈別王七十管記」(五一・023)に「我行即悠綉、及此還羈滯」、080「自淇涉黃河途中作十三首」其一一(七三・049)に「我行倦風滿、輟棹將問津」、125「漣上題樊氏水亭」(一三三・033)に「異縣少朋從、我行復連遭」。

●挹：こまねく。両手を前で組み合わせて上下させる礼。尊敬する。東晉・庾闡「詩」(『藝文類聚』卷七・山部・衡山)。「晉詩」卷一二では「衡山詩」に「北眺衡山首、南睨五嶺末。寂坐挹虛恬、運目情四豁」。後梁・宣帝蕭督「詠弓詩」(『初學記』卷二二・武部・弓)に「已悲軒主跡、復挹楚王風」。張易之「侍從過公主南宅侍宴探得風字應制」(『全唐詩』卷八〇)に「時攀小山桂、共挹大王風」。高適

008「單父逢鄧司倉覆倉庫因而有贈」(九・068)に「舉杯挹山川、寓目窮毫芒」、139「東平留贈狄司馬」(二四九・037)に「耿介挹三事、驛離從一官」、158「古樂府飛龍曲留上陳左相」(一七三・203)に「鑄組資高論、巖廊挹大猷」、159「留上李右相」(二七七・204)に「風俗登淳古、君臣挹大庭」。また、寶羣「中牟縣經魯公廟」(『全唐詩』卷二七一)に「青史編名在篋中、故林遺廟掛「挹」に同じ仁風」。柳宗元「法華寺石門精舍三十韻」(『全唐詩』卷三五二)に「鑑爾掛古風、終焉乃吾黨」。

●高風：高尚な風格。すぐれた人柄。『後漢書』卷二八下・馮衍傳に「衍不得志、退而作賦、又自論曰、……沮先聖之成論兮、懇名賢之高風、忽道德之珍麗兮、務富貴之樂耽」。西晉・陸雲「贈顧彥先五章」其四(『晉詩』卷六)に「莫攀莫附、媿我高風」。東晉・陶淵明「飲酒詩二十首」其一二(『晉詩』卷一七)に「仲理歸大澤、高風始在茲」。高適「東征賦」(三〇二)に「至鄆縣之舊邑、懷蕭相之高風」。

6 ●爾：君。おまえ。

●兼：あわせて。ともに。なお、王銖「詩詞曲語辭例積(增訂本)」(一一九頁。中華書局、一九八六年)は、「兼」に「頗」甚の意味があるとす。同書の唐詩の挙例を二例示す。奏韜玉「問古」(『全唐詩』卷六七〇)「大底榮枯各自行、兼疑陰陽也難明」。韓偓「秋深聞興」(『全唐詩』卷六八〇)「此心兼笑野雲忙、甘得貧閒味甚長」。

●少年：年若い。『列女傳』卷四・貞順傳・陳寡孝婦に「母曰、吾憐女少年早寡也」。魏・阮籍「詠懷詩十七首」其八(『文選』卷二三)に「平生少年時、輕薄好紆歌」。東晉・陶淵明「飲酒詩二十首」其一一六(『晉詩』卷一七)に「少年罕人事、遊好在六經」。

7 ●胸懷：心のうち。心の中のおもい。『論衡』別通に「故夫大人之胸懷非一、才高知大、故其於道術無所不包」。東晉・郭璞「遊仙詩二首」其二(『初學記』卷二三・道釋部・僊)に「呼吸玉滋液、妙氣盈胸懷」。東晉・王胡之「答謝安詩八章」其八(『晉詩』卷一一)に「取諸胸懷、寄想郢匠」。

●豁：ひらく。隠すところなく、すべて現す。
●清夜：晴れて静かな夜。前漢・司馬相如「長門賦」(『文選』卷一六)に「懸明月以自照兮、徂清夜於洞房」。魏・曹丕「於譙作詩」(『初學記』卷一四・禮部・饗讌)に「清夜延貴客、明燭發高光」。魏・曹植「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「清夜遊西園、飛蓋相追隨」。

8 ●博學で知られる西晋の學者張華が『史記』、『漢書』について論じ、ゆつたりとして傾聴に値するものだったという故事をふまえる。次の「史漢」注の「竹林七賢論」、『世說新語』を参照。

8 ●史漢：『史記』と『漢書』。東晉・戴逵「竹林七賢論」(『藝文類聚』卷五五・雜文部・談講)に「(王)濟曰、張華善說史漢。裴逸人敘前言往行。袁袞可聽」。『世說新語』言語に「(王)夷甫曰、……張茂先論史漢、靡靡可聽」劉孝標注「晉陽秋曰、華博覽洽聞、無不貫綜。世祖嘗問漢事、及建章千門萬戶。華畫地成圖、應對如流、張安世不能過也」。沈佺期「三日獨坐驩州思憶舊遊」(『全唐詩』卷九七)に「東哲言談妙、張華史漢適」。

●流泉：湧き出て流れる泉の水。『淮南子』主術訓に「是故草木之發若蒸氣、禽獸之歸若流泉、飛鳥之歸若煙雲、有所以致之也」。西晉・劉琨「扶風歌」(『文選』卷二八)に「據鞍長歎息、淚下如流泉」。李頎「送馬録事赴永陽」(『全唐詩』卷一三三)に「手持三尺令、遣決如流泉」。また、右の「史漢」注の『世說新語』劉孝標注を参照。

9 ●復：ふたたび。また。あるいは、リズムを整えるための軽い助字のようなものか。

●行春：次の『後漢書』と李賢注によれば、太守(郡の長官)が春に所轄する県を巡回して民に農業、養蚕業を勧め、生活に困窮している者を救うこと。

こは、「行春」を梟の長官(盧明府)が実施している。あるいは刺史の「行春」に従ったのかもしれない。『後漢書』卷三三・鄭弘傳に「弘少爲鄉耆夫、太守第五倫行春、見而深奇之、召署督郵、舉孝廉」李賢注「太守常以春行所主縣、勤人農桑、振救乏絕。見續漢志也」。『後漢書』志卷二八・百官に「本注曰、凡郡國皆……常以春行所主縣、勸民農桑、振救乏絕」。梁・任昉「贈郭桐廬出溪口見候余既未至郭仍進村維舟久之郭生方至」(『文選』卷二六)に「涿令行春反、冠蓋溢川坻」。張循之「送泉州李使君之任」(『全唐詩』卷九九)に「連年不見雪、到處即行春」。孟浩然「陪盧明府泛舟回作」(『全唐詩』卷一六〇)に「百里行春返、清流逸興多」。なお、『大唐六典』卷三〇・上州中州下州官吏に「京兆、河南、太原牧及都督、刺史……每歲一巡屬縣、觀風俗、問百姓、錄囚徒、恤鰥寡、闕丁口、務知百姓之疾苦」とある。これが「行春」であるかは、待考。

10 ●透迤：長く連なるさま。前漢・四皓「採芝操」(『樂府詩集』卷五八・琴曲歌辭)に「皓天嗟嗟、深谷透迤」。古詩十九首「其一」(『文選』卷二九)に「東城高且長、透迤自相屬」李善注「王逸楚辭注曰、透迤、長貌也」。張九齡「奉和聖製溫泉泉」(『全唐詩』卷四七)に「今茲十月自東歸、羽旆透迤上翠微」。こは、「行春」の隊列の様子。

●郊壇：町の南郊に設けられた祭祀のための壇。『宋書』卷九「後廢帝本紀」(元徽五年)七月戊子夜、帝殞於仁壽殿、時年十五。……葬丹陽秣陵縣郊壇西」。則天皇后「唐享昊天樂 第八」(『全唐詩』卷五)に「奠璧郊壇昭大禮、鏘金拊石表虔誠」。寶牟「元日喜聞大禮寄上翰林四學士中書六舍人二十韻」(『全唐詩』卷二七二)に「有事郊壇畢、無私日月臨」。

11 ●登高：高いところに登る。『荀子』勸學に「吾嘗跂而望矣、不如登高之博見也。登高而招、臂非加長也、而見者遠。順風而呼、聲非加疾也、而聞者彰」。魏・阮籍「詠懷詩十七首」其一五(『文選』卷二三)に「登高望九州、悠悠分曠野」。東晉・陶淵明「移居詩二首」其二(『晉詩』卷一七)に「春秋多佳日、登高賦新詩」。また、006「酬龐十兵曹」(六・115)の22「登高」注を参照。

●百里：こは、一つの県。『漢書』卷一九上・百官公卿表に「縣大率方百里」。賈賈王「餞鄭安陽入蜀」(『全唐詩』卷七九)に「地是三巴俗、人非百里材」。李頎「送綦母三諷房給事」(『全唐詩』卷一三三)に「百里人戶滿、片言爭訟疏」。

12 ●桑野：桑林の野。桑は大木仕立てであった(日野開三郎「唐代先進地帯の莊園」二四六―一四八頁。汲古書院、一九八六年)。桑の葉は養蚕業において

蚕蛾の幼虫の餌となる。『詩經』爾風「東山」に「蜩蝻者蠋、烝在桑野」。劉宋・顏延之「秋胡詩」(『文選』卷二二)に「蠶月觀時暇、桑野多經過」。孟浩然「田家元日」(『全唐詩』卷一六〇)に「桑野就耕父、荷鋤隨牧童」。

●鬱：木がむらがり茂るさま。

●芊芊：草木の盛んに茂るさま。また、あおあおと茂るさま。『列子』力命に「齊景公游於牛山、北臨其國城而流涕曰、美哉國乎。鬱鬱芊芊、若何滴滴去此國而死乎」。宋玉「高唐賦」(『文選』卷一九)に「仰視山顛、蕭何千千、炫燿虹蜺」李善注「望山谷、芊芊青也。千、芊古字通」。西晉・潘岳「在懷縣作二首」其一(『文選』卷二六)に「稻栽蕭任任、黍苗何離離」李善注「芊芊、茂也」。韋應物「善福精舍秋夜遲諸君」(『全唐詩』卷一九二)に「繁露降秋節、蒼林鬱芊芊」。

13 ●時平：時世が平和である。西晉・張載「權論」(『全晉文』卷八五)に「時平則才伏、世亂則奇用」。梁・蕭欣「還宅作詩」(『梁詩』卷二八)に「時平有道泰、世誠交情離」。李世民「詠司馬彪續漢志」(『全唐詩』卷二)に「政宣竹律和、時平玉條備」。

●俯鵲巢：「鵲巢」は、かささぎの巢。俯鵲巢は、次の「淮南子」によると、太古、天下が王の徳になつき、天地万物が調和しているので、「烏鵲(かささぎ)」の巢も低いところにかかり、うつむいたままで探し出すことができるという意味。『淮南子』汜論訓に「古者有鑿而綫領、以王天下者矣。其徳生而不辱、予而不奪、天下不非其服、同懷其徳。當此之時、陰陽和平、風雨時節、萬物蕃息。烏鵲之巢可俯而探也、禽獸可羈而從也」。なお、鵲の鳴く声は吉兆であった。『禽經』に「靈鵲兆喜」張華注「鵲噪則喜生」。開元天寶遺事「卷下」靈鵲報喜に「時人之家、聞鵲聲、皆爲喜兆、故謂靈鵲報喜」。また、『詩經』陳風「防有鵲巢」に「防有鵲巢、邛有旨苕」。西晉・傅玄「詩」(『藝文類聚』卷九二・鳥部・雀)。「晉詩」卷一では「雜詩三首」其三に「鵲巢丘城側、雀乳空井中」。蔣冽「山行見鵲巢」(『全唐詩』卷二五八)に「鵲巢性本高、更在西山木」。

14 ●歲熟：「歲」は、一年の收穫。「熟」は、成熟する。『史記』卷二七・天官書に「辰星之色、……秋、青白、而歲熟」。韋應物「答僱奴重陽二甥」(『全唐詩』卷一九〇)に「貧居煙火濕、歲熟梨棗繁」。白居易「正月十五日夜月」(『全唐詩』卷四四三)に「歲熟人心樂、朝遊復夜遊」。

●人煙：人家の炊事の煙。魏・曹植「送應氏詩二首」其一(『文選』卷二〇)に「中野何蕭條、千里無人煙」。陳・周弘讓「留贈山中隱士詩」(『陳詩』卷二)に「忽見

茅茨屋、曖曖有人煙」。

15 ●奸猾：悪賢い者。「姦猾」に同じ。「史記」卷一〇七・魏其武安侯傳に「御史大夫韓安國曰、……丞相亦言灌夫通姦猾、侵細民、家累巨萬、橫恣潁川、凌轢宗室、侵犯骨肉」。張祐「投陳許李司空二十韻」孫望「全唐詩補逸」卷一〇（陳尚君「全唐詩補編」所収）に「鬼神愁運思、姦猾恐迴情」。

●唯：それだけ。

●閉戸：門戸を閉じる。「孟子」離婁下に「孟子曰、……鄉鄰有鬪者、被髮纓冠而往救之、則惑也。雖閉戸可也」。劉宋・湛茂之「歷山草堂應教」（「宋詩」卷一〇）に「閉戸守玄漠、無復車馬跡」。張説「岳州山城」（「全唐詩」卷八七）に「山城豐日暇、閉戸見天心」。

16 ●逃亡：逃げ失せる。「管子」輕重乙に「管子對曰、……今發徒隸而作之、則逃亡而不守」。聶夷中「詠田家」（「全唐詩」卷六三六）に「不照綺羅筵、只照逃亡屋」。こゝは、逃げていなくなった者。租税や徭役の重い負担から逃れるため本籍地を無断で離れた逃亡を指すと思われる。

●種田：田畑に作物の種をまく。農作業をする。「東觀漢記」（「藝文類聚」卷五〇・職官部・太守）に「張堪、字君淑。試守蜀郡太守。遷漁陽太守、開治稻田八千餘頃、教民種田、百姓以殷富」。李頎「野老曝背」（「全唐詩」卷一三四）に「百歲老翁不種田、惟知曝背樂殘年」。岑參「送胡象落第歸王屋別業」（「全唐詩」卷二〇〇）に「可即疲賦賦、山村歸種田」。

17 ●迴車：車の向きをかえる。前漢・司馬相如「上林賦」（「文選」卷八）に「道盡途殫、迴車而還」。「古詩十九首」其一（「文選」卷二九）に「迴車駕言邁、悠悠涉長道」。陳・徐孝克「仰和令君詩」（「陳詩」卷六）に「上宰明四空、迴車八道中」。なおこゝの「迴車」は、孫注の底本では「迴軒」に作る。凡例に掲げた孫注の対校本は「迴軒」あるいは「迴軒」に作り、「軒（くるま）」を「車」に作るものは見られない（「敦煌選本」に本詩は見られない）。「迴車」と「迴軒」「迴軒」は、意味がほぼ同じであるので、ひとまず底本（孫注）に従う。なお、西晉・盧諶「覽古」（「文選」卷二二）に「屈節邯鄲中、俛首忍迴軒」。劉宋・鮑照「翫月城西門解中」（「文選」卷三〇）に「迴軒駐輕蓋、留酌待情人」。

●郭南：城郭の南。町の南。「水經注」卷一三・漂水に「漂水出鴈門陰館縣、東北過代郡桑乾縣南」注「太和十年、累石結岸、夾塘之上、雜樹交蔭。郭南結兩石橋、橫水爲梁」。岑參「春半與羣公同遊元處士別業」（「全唐詩」卷一九八）

に「郭南處士宅、門外羅羣峯」。錢起「登玉山諸峯偶至悟眞寺」（「全唐詩」卷二三六）に「郭南雲水佳、訟簡野情發」。

18 ●老幼：老人と子ども。「春秋左氏傳」襄公九年・傳に「冬、十月、……甲戌、師（晋軍）于汜、令於諸侯曰、脩器備、盛饌糧、歸老幼、居疾于虎牢、肆管園鄭」。『後漢書』卷三一・郭伋傳に「伋前在并州、素結恩德、及後入界、所到縣邑、老幼相攜、逢迎道路」。儲光羲「同諸公秋日遊昆明池思古」（「全唐詩」卷一三八）に「老幼樵木還、賓從迴羈羈」。白居易「秋遊原上」（「全唐詩」卷四二九）に「村中相識久、老幼皆有情」。

●馬前：馬の前。「春秋左氏傳」宣公十五年・傳に「楚師將去宋。申犀稽首於（楚）王之馬前」。崔國輔「雜詩」（「全唐詩」卷一九）に「逢著平樂兒、論交鞍馬前」。王建「東征行」（「全唐詩」卷二九八）に「馬前猛士三百人、金書左右紅旗新」。薛逢「觀競渡」（「全唐詩」卷五四八）に「使君出時皆有引、馬前已被紅旗陣」。

19 ●皆賀：皆がお祝いする。「春秋左氏傳」莊公十年・傳に「齊侯之出也、過譚。譚不禮焉。及其入也、諸侯皆賀。譚又不至」。李嘉祐「和袁郎中破賊後經刻縣山水上太尉」（「全唐詩」卷二〇七）に「剪寇人皆賀、迴軍馬自嘶」。劉禹錫「送李中丞赴楚州」（「全唐詩」卷三五九）に「緹騎朱旗入楚城、士林皆賀振家聲」。

●蠶農：養蚕業と農業。「三國志」卷二二・魏書・陳羣傳に「羣上疏曰、……可無舉宮暴露野次、廢損盛節蠶農之要」。高適「自淇涉黃河途中作十三首」其一（「七三・〇四九」）に「蠶農有時節、田野無閑人」。

20 ●而無：東晉・陶淵明「雜詩二首」其一（「文選」卷三〇）に「結廬在人境、而無車馬喧」。南齊・王融「有所思」（「藝文類聚」卷四一・樂部・論樂）に「如何有所思、而無相見期」。なお兩詩の「而」は逆接であるが、こゝの「而」は順接である。

●徭役：国家が人民に課す義務としての労働。「韓非子」備内に「故曰、徭役少則民安、民安則下無重權、下無重權則權勢減、權勢減則德在上矣」。劉宋・劉鑠「代青青河畔草」（「玉臺新詠」卷三）に「良人久徭役、耿介終昏旦」。袁朗「賦飲馬長城窟」（「全唐詩」卷三〇）に「四時徭役盡、千載干戈戢。太平今若斯、汗馬竟無施」。また、21「黎庶」注の「史記」秦始皇本紀を参照。

●牽：ひっぱる。拘束する。

21 ●君：人を呼ぶ敬称。

●觀：念を入れて見る。注意して見る。

●黎庶：民衆。庶民。『史記』卷六・秦始皇本紀に「三十二年、始皇之碣石、使燕人盧生求羨門、高誓、刻碣石門。……其辭曰、……地勢既定、黎庶無繇、天下咸撫。男樂其疇、女修其業、事各有序」。魏・曹操「度關山」〔樂府詩集〕卷二七・相和歌辭に「黜陟幽明、黎庶繁息」。西晉・成公綏「正旦大會行禮歌」〔樂府詩集〕卷一三・燕射歌辭に「宇宙清且泰、黎庶咸雍熙、善哉雍熙」。

22 ●撫：いたわる。やすんじる。21「黎庶」注の『史記』秦始皇本紀を参照。『潛夫論』勸將に「太古之民、淳厚敦朴、上聖撫之、恬澹無爲、體道履德、簡刑薄威、不殺不誅、而民自化、此德之上也」。

●誠：実に。ほんとうに。

●萬全：完全で手抜きがない。『韓非子』解老に「故天下之道盡之生也、若以慈衛之也、事必萬全、而舉無不當、則謂之寶矣」。張九齡「始興南山下有林泉嘗卜居焉荊州臥病有懷此地」〔全唐詩〕卷四七に「一跌不自保、萬全焉可尋」。張祜「從軍行」〔全唐詩〕卷五一に「一卷旌收千騎虜、萬全身出百重圍」。

23 ●何幸：なんと幸せなことか。魏・阮侃「答嵇康詩二首」其一〔魏詩〕卷八に「會遇一何幸、及子遭歡情」。梁・劉孝綽「詠日應令詩」〔藝文類聚〕卷一・天部・日に「園葵一何幸、傾葉奉離光」。張說「赦歸在道中作」〔全唐詩〕卷八八に「何幸光華旦、流人歸上京」。孟浩然「送袁太祝尉豫章」〔全唐詩〕卷一六〇に「何幸遇休明、觀光來上京」。

●逢：出会う。

●大道：人の行うべき大事な道。『禮記』禮運に「孔子曰、大道之行也、與三代之英、丘末之逮也、而有志焉」。魏・曹植「贈丁翼」〔文選〕卷二四に「君子通大道、無願爲世儒」。西晉・傅玄「文皇統百揆」〔樂府詩集〕卷一九・鼓吹曲辭に「大道侔五帝、盛德踰三王」。

24 ●盧明府が「烹小鮮」するのを高適が「願言」していると、ひとまず解する。

24 ●願言：心に強く思う。「言」は語調を整える助字。『詩經』邶風「二子乘舟」に「願言思子、中心養養」鄭玄箋「願、念也」。前漢・枚乘「雜詩九首」其六〔玉臺新詠〕卷一に「願言追昔愛、情款感四時」。西晉・潘岳「在懷縣作二首」其二〔文選〕卷二六に「願言旋舊鄉、畏此簡書忌」。

●烹小鮮：「小鮮」は、小魚。「烹」は、煮る。次の『老子』と河上公注にあるように、小魚を煮るのにつつき回すとかたが崩れてしまうのと同様、国家の統治はいろいろと手を加え煩雑であってはならないことをいう。『老子』六〇

章に「治大國、若烹小鮮」河上公注「鮮、魚。烹小魚、不去腸、不去鱗、不敢撓、恐其糜也。治國煩則下亂、治身煩則精散」。東晉・楊羲「方諸宮東華上房靈妃歌曲」〔晉詩〕卷二二に「小鮮未烹鼎、言我巖下悲」。陸龜蒙「漁具詩」〔全唐詩〕卷六二〇に「有意烹小鮮、乘流駐孤櫂」。

25 ●誰能：誰かできないものか。『詩經』檜風「匪風」に「誰能亨魚、漑之釜鬻」毛傳「亨魚煩則碎、治民煩則散。知亨魚則知治民矣」。『漢書』卷七三・韋玄成傳に「玄成自傷貶黜父爵、歎曰、吾何面目以奉祭祀。作詩自劾責曰、……誰能忍媿、寄之我顏。誰將遐征、從之夷蠻」。孟浩然「田園作」〔全唐詩〕卷一五九に「誰能爲揚雄、一薦甘泉賦」。

●明主：賢明な君主。明君。005「別韋參軍」〔四・12〕の8「明主」注を参照。また、李白「溫泉侍從歸逢故人」〔全唐詩〕卷一六八に「逢君奏明主、他日共翻飛」。貫休「古塞下曲七首」其六〔全唐詩〕卷八三〇に「誰能奏明主、功業已堪封」。

26 ●一試：ひとたび試す。『新書』匈奴に「陛下何不使能者一試理此、將爲陛下以耀蟬之術振之」。韋應物「學仙二首」其一〔全唐詩〕卷一九四に「存道忘身一試過、名奏玉皇乃升天」。李咸用「和友人喜相遇十首」其一〔全唐詩〕卷六四六に「且固初心希一試、箭穿正鵠豈無緣」。なお、ここの「試」は、人を官職につけて用いてみるという意味で、盧明府を國政で用いてみるということであろう。『詩經』小雅「大東」に「私人之子、百僚是試」毛傳「是試、用於百官也」。『論語』子罕に「牢曰、子云、吾不試、故藝」何晏集解「鄭曰、……試、用也」。

●武城弦：次の『論語』にあるように、孔子の弟子の子游が武城の長官を務めていた時に、國政のためのものである「弦歌（弦楽器の演奏と歌）」によって、武城という小さな町を治めていたことをふまえたことば。『論語』陽貨に「子之武城、聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。子游對曰、昔者偃也聞諸夫子、曰、君子學道則愛人。小人學道則易使也。子曰、二三子、偃之言是也。前言戲之耳」邢昺疏「時子游爲武城宰。意欲以禮樂化導於民、故弦歌」。西晉・潘岳「贈河陽」〔文選〕卷二四に「桐鄉建遺烈、武城播弦歌」。盧照鄰「于時春也慨然有江湖之思寄贈柳九隴」〔全唐詩〕卷四一に「遙聞彭澤宰、高弄武城弦」。嚴維「詠孩子」〔全唐詩〕卷二六三に「將雛有舊曲、還入武城弦」。

單父^{ぜんは}にて鄧司倉の倉庫を覆するに逢う。因りて贈る有り

- | | | |
|----|-------|----------------|
| 1 | 邦牧今坐嘯 | 邦牧 今 坐嘯し |
| 2 | 羣賢趨紀綱 | 群賢 紀綱に趨く |
| 3 | 四人惣不擾 | 四人 惣て擾れず |
| 4 | 耕者遙相望 | 耕す者 遙かに相い望む |
| 5 | 粲粲府中妙 | 粲粲 府中に妙なり |
| 6 | 授詞如履霜 | 詞を授くること霜を履むが如し |
| 7 | 炎炎伏熱時 | 炎炎たり 伏熱の時 |
| 8 | 草木無晶光 | 草木 晶光無し |
| 9 | 匹馬度睢水 | 匹馬 睢水を度り |
| 10 | 清風何激揚 | 清風 何ぞ激揚する |
| 11 | 校繆閱帑藏 | 繆を校べて帑藏を閲し |
| 12 | 發廩忻斯箱 | 廩を発いて斯箱を忻ぶ |
| 13 | 邂逅得相逢 | 邂逅 相い逢うを得 |
| 14 | 歡言至夕陽 | 歡言 夕陽に至る |
| 15 | 開襟自公館 | 襟を開くこと公館自りし |
| 16 | 載酒登琴堂 | 酒を載せて琴堂に登る |
| 17 | 舉杯挹山川 | 杯を挙げて山川に挹し |
| 18 | 寓目窮毫芒 | 目を寓せて毫芒を窮む |
| 19 | 白鳥向田盡 | 白鳥 田に向かいて尽き |
| 20 | 青蟬歸路長 | 青蟬 歸路長し |
| 21 | 醉中不惜別 | 醉中 別れを惜しまず |
| 22 | 況乃正遊梁 | 況んや乃ち正に梁に遊ぶをや |

【詩型】

五言古詩

【押韻】

下平十陽(望・霜・揚・箱・陽・長・梁)、下平十一唐(綱・光・堂・芒)同用。／平水韻：下平七陽。

*『廣韻』下平聲・十陽・望・看望。又音妄。

【現代語訳】

- 單父で鄧司倉が倉庫を調査しているのに出会う。そこで詩を贈る
- 1・2 州の長官殿が今ゆつたりと座って嘯いておられるのは、優れた部下たちがしっかりと法令通りに職務を執行しているから。
 - 3・4 土農工商の四民はすべて秩序に従い乱れ騒いでおらず、耕す者たちもお互いを遠くから見ている。
 - 5・6 あなたはまばゆいばかりの姿で役所で人並みはずれた仕事をし、配下に下す言葉も霜がやがて堅い氷になるように先を見越した深謀遠慮。
 - 7・8 火が燃えるような酷暑、草木にも鮮やかな輝きがない。
 - 9・10 そんな中、あなたが一頭の馬に乗って睢水を渡ると、爽快な風がなんと激しく吹き立つことか。
 - 11・12 あなたは財貨の蔵で銭差しの銭を丁寧に調べ、穀物倉を開いて多くの食糧があることをよるこぼ。
 - 13・14 私たちは期せずして出合い意気投合することができ、日の入りまで楽しく語り合う。
 - 15・16 あなたは役所からすでに胸襟をひらいてくれ、酒を車に積み、孔子の弟子・宓子賤が琴を弾くだけでここ單父を治めたという琴堂に登る。
 - 17・18 杯を挙げて山河に拝礼し、風景を微細なところまで見極める。
 - 19・20 白い鳥が田畑の方に向かって飛び去ってゆき、長い帰り道に青い蟬が鳴き続ける。
 - 21・22 私は、お酒に酔っているで別れをつらいとは思わない。ましてや今まさしく梁の地に自分を認めてくれる人に会いに行くのだ。

【詩題解説】

單父にて職務を行う鄧司倉に出会い、役人としての彼を褒め、二人の交遊を描き、最後は別れの悲哀を抑制する。制作時期は、22「況乃正遊梁」の「梁」に係ると考えられる。005「別章參軍」(四・122)の10「梁宋」注で記したように、「梁」は、戦国・魏の都である大梁(河南省開封市)、あるいは漢の梁国(都は睢陽県、河南省商丘市。つまり高適寓居の地、宋州宋城県)である。前者の場合は、天宝三載(七四四)、高適が、李白、杜甫と梁宋(河南省東部、開封市から商丘市にかけての地)に遊んだ頃の作品の可能性がある(劉譜を参照)。後者の場合は、高適が初めて宋城に赴く途中すなわち宋中寓居の時期以前の作品、あるいは宋城

から出遊して宋城に戻る時の作品(ただこのような場合「遊梁」という表現をするのかは、よくわからない)となるであろうか。制作場所は、詩題にある「單父」で、宋州単父県(山東省荷沢市単県)。「逢」は、出会う。「鄧司倉」は、未詳。「司倉」は、州に置かれた司倉參軍事(『大唐六典』卷三〇)。「同」卷三〇・上州中州下州官吏に「倉曹、司倉參軍、掌公廩、度量、庖廚、倉庫、租賦、徵收、田園、市肆之事」。「覆倉庫」は、「覆」は、調べる。『爾雅』釋詁下に「覆、察、副、審也」。「倉」は、穀物倉。『說文解字』卷五下・食部に「倉、穀藏也。倉黃取而藏之、故謂之倉」。「庫」は、兵器や武器を収納する庫。『說文解字』卷九下・戶部に「庫、兵車藏也」。「禮記曲禮下」に「在官言官、在府言府、在庫言庫、在朝言朝」鄭玄注「庫謂車馬兵甲之處也」。「覆倉庫」は、穀物倉、武器庫、財貨庫などの倉庫を点検、調査することである。劉注は、「覆倉庫、謂檢校倉庫、以防私隱也」と説く。「有贈」は、詩を贈る。007「過盧明府有贈」(八・066)の詩題解説を参照。

【語注】

1 ●邦牧：刺史。地方長官。梁・劉孝綽「和湘東王理訟詩」(『藝文類聚』卷五〇・職官部・刺史)に「馮翊亂京兆、廣漢欲兼治。豈若兼邦牧、朱輪褰素帷」。張九齡「臨泛東湖(時任洪州)」(『全唐詩』卷四七)に「驕孤忝邦牧、顧已非時選」。

●坐嘯：「嘯」は、口笛を吹くように口をすぼめ長く声を引くこと。のびやかで自由な精神を示す発声法(川合康三ほか『文選詩篇』四)一〇八頁。岩波書店、二〇一八年)。「坐嘯」は、後漢の南陽太守であった成瑨が功曹の岑暉に政務をゆだねていた故事をふまえる。『後漢書』卷六七・黨錮列傳に「後汝南太守宗資任功曹范滂、南陽太守成瑨亦委功曹岑暉、二郡又爲謠曰、汝南太守范孟博、南陽宗資主畫諾。南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯」。南齊・謝朓「在郡臥病呈沈尚書」(『文選』卷二六)に「坐嘯徒可積、爲邦歲已暮」。梁・丘遲「旦發漁浦潭」(『文選』卷二七)に「坐嘯昔有委、臥治今可尙」。

2 ●羣賢：才徳を兼ね備えた多くの士人。『呂氏春秋』不苟論・當賞に「秦小主夫人用奄變、羣賢不說自匿、百姓鬱怨非上」。西晉・成公綏「正旦大會行禮歌」(『樂府詩集』卷一三・燕射歌辭)に「皇皇羣賢、峨峨英雋」。西晉・盧諶「荅魏子悌」(『文選』卷二五)に「多士成大業、羣賢濟弘績」。

●趨：遵守する。『史記』卷六八・商君傳に「於是太子犯法。衛鞅曰、法之不行、自上犯之。將法太子。太子、君嗣也、不可施刑、刑其傅公子虔、黥其師公孫賈。明日、秦人皆趨令」司馬貞索隱「趨音七踰反。趨者、向也、附也」。

●紀綱：国家の制度・規則。きまり。『禮記』樂記に「子夏對曰、……然後聖人作爲父子君臣、以爲紀綱。紀綱既正、天下大定」。魏・繆襲「楚之平」(『樂府詩集』卷一八・鼓吹曲辭)に「興禮樂、定紀綱」。劉長卿「題元錄事開元所居」(『全唐詩』卷一四七)に「幽居蘿薜情、高臥紀綱行」。

3 ●四人：「四民」に同じ。人民の四つの階級である士・農・工・商。一般の民衆。太宗・李世民的諱を避けて「四人」としたと考えられる。『管子』小匡に「管子對曰、士農工商四民者、國之石民也」。西晉・潘岳「藉田賦」(『文選』卷七)に「夫九土之宜弗任、四人之務不壹」李善注「管子曰、士農工商四民者、國之正民也」。庾信「徵調曲六首其二」(『樂府詩集』卷一五・燕射歌辭)に「王道蕩蕩用無爲、天下四人誰不足」。李乂「享龍池樂第八章」(『全唐詩』卷九二)に「星分邑里、四人居、水洧源流萬頃餘」。また、魏・繆襲「太和」(『樂府詩集』卷一八・鼓吹曲辭)に「五穀溢田疇、四民相率遵軌度」。西晉・陸機「挽歌詩三首」其二(『文選』卷二八)に「昔居四民宅、今託萬鬼鄰」。

●惣：底本(孫注)は、「忽(たちまち)」に作る。今、『敦煌集本』に従い、「惣(すべて)」とする。なお、凡例に掲げた孫注の底本、対校本は、「忽」に作る(『敦煌選本』に本詩は見られない)。

●不擾：「擾」は、みだれさわがしい。『韓詩外傳』卷六に「孔子曰、……入其庭甚閑、此明察以斷、故民不擾也」。清畫「皎然」安吉崔明甫山院聯句一首」(『全唐詩』卷七九四)に「人不擾、政已和。世慮寡、山情多」。皇甫冉「廬山歌送至弘法師兼呈薛江州」(『全唐詩』卷二五〇)に「政成人野皆不擾、遂令法侶性安閑」。

4：平和な農耕の風景を描く。よくわからないが、次の「耕者」注の『史記』周本紀と「襄陽民爲胡烈歌」から考えると、農民同士が田畑の境界を譲り合う、つまり近づいて田畑についていさかいを起こしてはいないことをいうのであろうか。

4 ●耕者：農耕している者。農民。『史記』卷四・周本紀に「西伯陰行善、諸侯皆來決平。於是虞、芮之人、有獄不能決、乃如周。入界、耕者皆讓畔、民俗皆讓長」。襄陽民爲胡烈歌」(『魏詩』卷一一)に「耕者讓畔、百姓豐溢」。また、『孟子』梁惠王上に「(孟子)曰、……今王發政施仁、使天下仕者皆欲立於王之朝、耕者皆欲耕於王之野、商賈皆欲藏於王之市、行旅皆欲出於王之塗、天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王」。『古樂府詩六首』其一「日出東南隅行」(『玉臺

新詠』卷二)に「耕者忘其耕、鋤者忘其鋤」。

●遙相望：遠く離れて向き合う。『釋名』釋天に「望、月滿之名也。月大十六日、小十五日。日在東、月在西、遙相望也」。『古詩十九首』其三(『文選』卷二九)に「兩宮遙相望、雙闕百餘尺」。魏・曹丕「燕歌行」(『文選』卷二七)に「牽牛織女遙相望、爾獨何辜限河梁」。

5 ●粲粲：裝飾や色彩が多く、鮮やかで美しいさま。『詩經』小雅「大東」に「西人之子、粲粲衣服」毛傳「粲粲、鮮盛貌」。西晉・陸機「擬古詩十二首」其三「擬迢迢牽牛星」(『文選』卷三〇)に「昭昭清漢暉、粲粲光天步」、同「其五」擬青青河畔草に「粲粲妖容姿、灼灼美顏色」。杜甫「同元使君春陵行」(『全唐詩』卷二二二)に「粲粲元道州、前聖畏後生」。

●府中：「府」は、役所。『史記』卷一二二・酷吏列傳・趙禹傳に「亞夫爲丞相、禹爲丞相史、府中皆稱其廉平」。『古樂府詩六首』其一「日出東南隅行」(『玉臺新詠』卷二)に「盈盈公府步、冉冉府中趨。坐中數千人、皆言夫婿殊」。杜甫「送韋十六評事充同谷郡防禦判官」(『全唐詩』卷二二七)に「府中韋使君、道足示懷柔」。

●妙：人並み外れている。

6：鄧司倉の「授詞」が慎重であり、先のことは見通した、いわゆる深謀遠慮であるさまをいうのであろう。

6 ●授詞：配下の者に命令などの言葉を伝える意味だと思われる。沈亞之「李紳傳」(『全唐文』卷七三八)に「傍一人爲(節度使宗臣)錡言曰、聞有許侍御縱者、尤能軍中書。紳不足與等。請召縱。縱至。錡銳意自舉、授詞操書、無不可鑄意」。

●履霜：霜を履む。『易經』坤に「初六、履霜、堅冰至。象曰、履霜堅冰、陰始凝也。馴致其道、至堅冰也」とあり、本田濟『易(上)』(六八頁。朝日新聞社、一九七八年)は「爻辞の言わんとするところは、霜をふむ季節ともなれば、やがては堅い氷が張るようになる。悪の動き、始めは微細でも、すておけば大悪になる、との意」と説く。西晉・傅玄「唐堯」(『樂府詩集』卷一九・鼓吹曲辭)に「積漸終光大、履霜致堅冰」。王績「贈梁公」(『全唐詩』卷三七)に「履霜成堅冰、知足勝不祥」。

7 ●炎炎：火が盛んに燃えるように暑いさま。『詩經』大雅「雲漢」に「赫赫炎炎、云我無所」毛傳「炎炎、熱氣也」。孟浩然「初秋」(『全唐詩』卷一六〇)に「炎炎

暑退茅齋靜、階下叢莎有露光」。丘爲「省試夏日可畏」(『全唐詩』卷二二九)に「赫赫溫風扇、炎炎夏日徂」。

●伏熱：盛夏の暑さ。『角川新字源改訂新版』の「三伏」の解説に「夏至のあとの三番目の庚の日を初伏、四番目の庚の日を中伏、立秋後の最初の庚の日を末伏という。陰気が起ころうとするが、陽気に押さえられて出ることができず蔵伏しているから伏日という。この時期は非常に暑いとされている」とある。ここは、この「三伏」の暑気をいうと考えられる。「月節折楊柳歌十三首」其六「六月歌」(『樂府詩集』卷四九・清商曲辭・西曲歌)に「三伏熱如火、籠窗開北牖」。白居易「天竺寺七葉堂避暑」(『全唐詩』卷四四五)に「鬱鬱復鬱鬱、伏熱何時畢」。

8 ●晶光：晶は、あきらか。白く光って明るい。『清抄本』(卷四)、「全唐詩」卷二二二、「敦煌集本」は、「晶」を「晶」に作る。「晶光」は、きらめく光。『焦氏易林』乾之否に「載日晶光、駉駕六龍」。喬知之「苦寒行」(『全唐詩』卷八一)に「遙裔出雁關、逶迤合晶光」。岑參「至大梁卻寄匡城主人」(『全唐詩』卷一九八)に「四郊陰氣閉、萬里無晶光」。

9：睢水を渡る主体が高適と読めなくてもいいが、ここは鄧司倉と解する。

9 ●匹馬：一頭の馬。『晏子春秋』内篇・雜上「曾子將行晏子送之而贈以善言」に「晏子曰、……今夫蘭本、三年而成、湛之苦酒、則君子不近、庶人不佩。湛之糜醢、而賈匹馬矣。非蘭本美也、所湛然也」。李世民「句」(『全唐詩』卷一)に「昔乘匹馬去、今驅萬乘來」。杜甫「巴西聞收宮闕送班司馬入京」(『全唐詩』卷二三四)に「念君經世亂、匹馬向王畿」。

●睢水：高適が寓居する宋州宋城県の南を流れる河川。006「酬龐十兵曹」(六・115)の12「睢水」注を参照。また、『史記』卷八・高祖本紀に「項羽聞漢王在宛、果引兵南。漢王堅壁不與戰。是時彭越渡睢水、與項聲、薛公戰下邳、彭越大破楚軍」。

10：真夏の酷暑にも関わらず、鄧司倉の存在によって、爽快な風が激しく吹き立つことをいう。

10 ●清風：すがすがしい風。さわやかな風。『詩經』大雅「烝民」に「吉甫作誦、穆如清風」。『古詩八首』其八(『玉臺新詠』卷二)に「穆穆清風至、吹我羅裳裾」。魏・曹丕「喜霽賦」(『藝文類聚』卷二・天部・霽)に「激清風以漂潦、發皎日之陽暉」。西晉・左思「詠史八首」其一(『文選』卷二二)に「長嘯激清風、志若無東臬」。

●激揚：激しく起る。『淮南子』墜形訓に「正土之氣也御乎埃天、……陰陽相薄爲雷、激揚爲電、上者就下、流水就通、而合于黃海。」李陵錄別詩二十一首其一〇(『漢詩』卷一二)に「悲意何慷慨、清歌正激揚」。魏・曹丕「於醮作詩」(『初學記』卷一四・禮部・饗燕)に「餘音赴迅節、慷慨時激揚」。西晉・潘尼「火賦」(『初學記』卷二五・器物部・火)に「遂乃衝風激揚、炎光奔逸」。

11 ●校緡：金錢を調べる。「校」は、かぞえる。調べる。「緡」は、錢差しにしたも。なお、「緡錢」は、ひもを通してあななき銅錢を一千枚単位でまとめたもの。權德輿「送袁太祝衢發巡覆」(『全唐詩』卷三二四)に「校緡稅畝不妨閒、清興自隨魚鳥閒」。劉禹錫「武陵書懷五十韻」(『全唐詩』卷三六二)に「校緡資筦榷、復土奉山園(時以本官判度支鹽鐵等兼崇陵使判官)」。

●閱：ひとつひとつあたって調べる。

●帑藏：財貨をおさめるくら。『漢書』卷九九下・王莽傳に「馳犇賊、皆戰死。莽傷之、下書曰、惟公多擁選士精兵、衆郡駿馬、倉穀帑藏、皆得自調」。皮

日休「七愛詩」李太尉(『全唐詩』卷六〇八)に「丹券入帑藏、青史傳子孫」。

12 ●發廩：「發」は、ひらく。「廩」は、くら。こめぐら。『晏子春秋』內篇・問下・景公問何修則夫先王之遊晏子對以省耕實に「齊景公」命吏計公掌之粟、藉長幼貧氓之數、吏所委發廩出粟、以予貧民者三千鍾、公所身見癯老者七十人、振贍之、然後歸也」。耿湜「喜侯十七校書見訪」(『全唐詩』卷二六九)に「發廩因春黍、開畦復翦蔬」。

●忻：よろこぶ。たのしむ。

●斯箱：次の『詩經』をふまえ、食糧を積んだ車。大量の食糧。「斯」は、助字。「箱」は、車の荷台。『詩經』小雅「甫田」に「乃求千斯倉、乃求萬斯箱」鄭玄箋「成王見禾穀之稅、委積之多。於是求千倉以處之、萬車以載之。是言年豐收入踰前也」。北周・庾信「周祀方澤歌」昭夏(『樂府詩集』卷四・郊廟歌辭)に「斯箱既千、子孫則百」。張九齡「奉和聖製瑞雪篇」(『全唐詩』卷四七)に「歲稔復人和、預數斯箱慶」。

13 ●邂逅：期せずして合う。偶然に出くわす。『詩經』鄭風「野有蔓草」に「邂逅相遇、適我願兮」毛傳「邂逅、不期而會、適其時願」。後漢・張衡「同聲歌」(『玉臺新詠』卷一)に「邂逅承際會、得充君後房」。西晉・陸雲「贈顧彥先五章」其四(『晉詩』卷六)に「邂逅相遇、良願乃從」。

●得：可能を表す。

●相逢：ここは、めぐり会って意気投合することと解する。001「行路難二首」其一(一・120)の3「相逢」注を参照。

14 ●歡言：楽しく語り合う。東晉・陶淵明「讀山海經詩」(『文選』卷三〇)に「歡言酌春酒、擿我園中蔬」李善注「張協歸舊賦曰、苦辭既接、歡言乃周」。李白「下終南山過斛斯山人宿置酒」(『全唐詩』卷一七九)に「歡言得所憩、美酒聊共揮」。

●至：達する。

●夕陽：ゆうひ。入り日。『詩經』大雅「公劉」に「度其夕陽、幽居允荒」。西晉・劉琨「重贈盧諶」(『文選』卷二五)に「功業未及建、夕陽忽西流」。東晉・湛方生「遊園詠」(『藝文類聚』卷六五・產業部・園)に「乘夕陽而含詠、杖輕策以行遊」。

15 ●開襟：胸襟を開く。心を打ち明ける。『高僧傳』卷一三・經師に「故聽聲可以娛耳、聆語可以開襟」。王勃「送盧主簿」(『全唐詩』卷五六)に「開襟方未已、分袂忽多違」。李白「送楊少府赴選」(『全唐詩』卷一七五)に「我非彈冠者、感別但開襟」。

●公館：地方官僚の役所。『禮記』曾子問に「孔子曰、善乎問之也。自卿大夫之家曰私館。公館與公所爲曰公館。公館復此之謂也」鄭玄注「公館、若今縣官宮也」孔穎達疏「公館、謂公家所造之館。與公所爲者、與、及也。謂公之所使爲命停舍之處、亦謂之公館」。北齊・裴讓之に「公館譙訓南使徐陵詩」(『藝文類聚』卷五三・治政部・奉使)。高適169「睢陽酬暢大判官」(一八九・012)に「清晝下公館、尺書忽相邀」。杜甫「嚴公廳宴同詠蜀道畫圖」(『全唐詩』卷二二七)に「日臨公館靜、畫滿地圖雄」。韋應物「答劉西曹(時爲京兆功曹)」(『全唐詩』卷一九〇)に「公館夜云寂、微涼羣樹秋」。なお底本(孫注)は、凡例に掲げた孫注の底本や諸本(訳注者が確認したのは凡例の対校本。『敦煌選本』に本詩は見られない)が「公館」に作るのを、『敦煌集本』に従い「公館」に作る。「公館」は、公務の余暇。こちらでも意味は通る。顏真卿「華蓋山王郭二眞君壇碑記」(『全唐文』卷三三八)に「他日公餘、因令軍將往山下訪求碑銘。果得一石記」。李愿「登瀛洲閣」(童養年「全唐詩續補遺」卷四(陳尚君「全唐詩補編」所収)に「公餘自多暇、尊酒奉仙遊」。王周「和程刑部三首」其二「碧鮮亭」(『全唐詩』卷七六五)に「公餘時引步、一徑靜中深」。

16 ●載酒：酒を運ぶ。酒樽や酒壺を車や舟に載せて運ぶ。『漢書』卷八七下・揚雄傳に「雄以病免、復召爲大夫。家素貧、耆酒、人希至其門。時有好事者載酒肴從游學、而鉅鹿侯芭常從雄居、受其太玄、法言焉」。梁・何遜「傷徐主簿詩」

〔梁詩〕卷八に「提琴就阮籍、載酒覓楊雄」。張説「出湖寄趙冬曦」〔全唐詩〕卷八六に「何時與美人、載酒遊宛洛」。高適011「別王徹」〔一三・016〕に「載酒登平臺、贈君千里心」。

●琴堂：県の役所。孔子の弟子の宓子賤が単父の長官になったとき、役所で琴を弾いているだけで、その地方がよく治まったという故事をふまえる。こは、実際の琴堂（の古跡）である。『呂氏春秋』開春論察賢に「宓子賤治單父、彈鳴琴、身不下堂而單父治」。梁・昭明太子蕭統「錦帶書十二月啓」太簇正月〔全梁文〕卷一九に「想足下神遊書帳、性縱琴堂」。117高適「登子賤琴堂賦詩三首」其二〔一三・075〕に「邦伯感遺事、慨然建琴堂」。劉長卿「出豐縣界寄韓明府」〔全唐詩〕卷一四九に「音容想在眼、暫若升琴堂」。蕭穎士「重陽日陪元魯山德秀登北城矚對新霽因以贈別」〔全唐詩〕卷一五四に「賴茲琴堂暇、傲睨傾菊酒」。

17 ●舉杯：杯をあげて、酒を飲む。後漢・孔融「與韋林甫書」〔藝文類聚〕卷五三・治政部・奉使に「不得復與足下、岸幘廣坐、舉杯相於。以爲邑邑」。劉宋・鮑照「行路難十八首」其四〔樂府詩集〕卷七〇・雜曲歌辭に「酌酒以自寬、舉杯斷絕歌路難」。楊炯「送梓州周司功」〔全唐詩〕卷五〇に「舉杯聊勸酒、破涕暫爲歡」。

●挹：こまねく、つまり両手を前で組み合わせて上下させる礼。007「過盧明府有贈」〔八・066〕の5「挹」注を参照。また、東晉・楊羲「雲林右英夫人詩二十五首」其「四」右英作「晉詩」卷二に「清晨挹絳霞、總氣霄上遊」。

●山川：山と川。山河。「春秋左氏傳」昭公元年・傳に「子產曰、……山川之神、則水旱癘疫之災、於是乎祭之」。魏・曹丕「燕歌行二首」其二〔玉臺新詠〕卷九に「別日何易會日難、山川悠遠路漫漫」。馬令「早春陪敕使麻先生祭岳」〔久視二年〕〔全唐詩〕卷八八七に「鞭撻走神鬼、玉帛禮山川」。

18 ●風景を細かく觀賞していることを、このように表現しているであろう。
18 ●寓目：注意して見る。注目する。「春秋左氏傳」僖公二十八年・傳に「子玉使鬬勃請戰曰、請與君之士戲。君馮軾而觀之。得臣與寓目焉」杜預注「寓、寄也」。西晉・潘尼「遊西岳詩」〔晉詩〕卷八に「駕言遊西岳、寓目二華山」。東晉・庾闡「登楚山詩」〔藝文類聚〕卷七・山部・總載山に「拂駕升西嶺、寓目臨浚波」。

●窮：ぎりぎりのところまできわめつくす。
●毫芒：毛とのぎ。微細なものたとえ。後漢・班固「荅賓戲」〔文選〕卷

四五に「獨據意乎宇宙之外、銳思於毫芒之內、潛神默記、經以年歲」李善注「項岱曰、毫、毛也。芒、毛之顛抄也」。西晉・陸雲「贈顧尚書詩」〔晉詩〕卷六に「細微不錯、毫芒以陳」。梁・何遜「又答江革詩」〔梁詩〕卷九に「要知同罔象、然始見毫芒」。

19 ●白鳥：白い鳥。鶴や鶺鴒のたぐい。『詩經』大雅「靈臺」に「麀鹿濯濯、白鳥鶺鴒」。梁・沈約「休沐寄懷詩」〔初學記〕卷二〇・政理部・假に「紫籜開綠篠、白鳥映青疇」。王維「輞川閒居」〔全唐詩〕卷一二六に「青孤臨水拔、白鳥向山翻」。20「青蟬」注の羅鄴詩を参照。

20 ●青蟬：青い蟬。実態は未詳。『漢語大詞典』に「蟬の一種。色緑而小」とあり、こや次の李賀詩とその王琦彙解などを用例として挙げる。李賀「南園十三首」其三〔全唐詩〕卷三九〇に「竹裏綠絲挑網車、青蟬獨噪日光斜」。李長吉歌詩王琦彙解「卷一は、『通志』卷七六・昆蟲草木・蟲魚類「五月以前鳴者、似蠅而差大、青色、或有紅者。夜在草上、日在木上。聲小而清亮。此則正謂之蠅」を引く。鈴木虎雄「李長吉歌詩集」上）（一四三頁。岩波書店、一九六一年）は「ひぐらしの類」と注する。また、張籍「新桃行」〔全唐詩〕卷三八二に「青蟬不來鳴、安得迅羽過」。羅鄴「夏晚望高亭有懷」〔全唐詩〕卷六五四に「青蟬漸傍幽叢噪、白鳥時穿返照飛」。

●歸路：帰り道。『三國志』卷二六・魏書・滿寵傳に「寵上疏曰、……此爲引賊平地而捨其歸路、於計爲便」。東晉・陶淵明「庚子歲五月中從都還阻風於規林詩二首」其一〔晉詩〕卷一六に「行行循歸路、計日望舊居」。李康成「采蓮曲」〔全唐詩〕卷二〇三に「青荷蓮子雜衣香、雲起風生歸路長」。韋應物「登重玄寺閣」〔全唐詩〕卷一九二に「誠知虎符忝、但恨歸路長」。

21 ●醉中：酒に酔って。杜審言「和韋承慶過義陽公主山池五首」其四〔全唐詩〕卷六二に「卷簾唯待月、應在醉中歸」。劉禹錫「洛中送韓七中丞之吳興口號五首」其三〔全唐詩〕卷三六五に「本欲醉中輕遠別、不知翻引酒悲來」。

●惜別：別れをおしむ。別れることをつらく思う。南齊・王融「蕭諮議西上夜集詩」〔藝文類聚〕卷二九・人部・別に「徘徊將所憂、惜別在河梁」。李白「餞校書叔雲」〔全唐詩〕卷一七七に「惜別且爲歡、裴回桃李間」。

22 ●自分自身を庇護し、推挙してくれる人物に会いに、あるいはそのような人物を求めて「梁」に行くということであろう。

22 ●況乃：それにましてや。『史記』卷二〇・建元以來侯者年表に「況乃以中國一

統明天子在上、兼文武、席卷四海、內輯億萬之衆、豈以晏然不爲邊境征伐哉。魏・劉勳妻王宋「雜詩二首」其二『玉臺新詠』卷二に「千里不唾井、況乃昔所奉」。劉宋・謝靈運「登臨海嶠初發彊中作與從弟惠連見羊何共和之」(『文選』卷二五)に「茲情已分慮、沉迺(乃)に同じ)協悲端」。

●正：ちようどそのとき。ちようどよく。

●遊梁：梁の地に行く。ここの「梁」については、詩題解説を参照。『史記』卷一一七・司馬相如傳に「司馬相如」客游梁。梁孝王令與諸生同舍、相如得與諸生游士居數歲、乃著子虛之賦。『漢書』卷五一・枚乘傳に「枚乘」復游梁、梁客皆善屬辭賦、乘尤高。孝王薨、乘歸淮陰。劉宋・鮑照「古辭」(『宋詩』卷九)に「容華不待年、何爲客遊梁」。祖詠「酬汴州李別駕贈」(『全唐詩』卷一三一)に「自洛非才子、遊梁得主人」。高適094「宋中送族姪式顏時張大夫貶括州使人召式顏遂有此作」(九〇・018)に「遊梁且未遇、適越今何以」、「東征賦」(三〇二)に「高子遊梁既久、方適楚以超忽」。

(中国文学)

The Translated and Annotated Poetry of Gao Shi 高適 (Part 1)

KAWAGUCHI Yoshiharu
(Chinese Literature)

Abstract

The aim of this research is to provide translations and annotations of all the poems written by the High Tang poet Gao Shi. This study (Part 1) contains translations and annotations of eight of his poems.